

八尾市埋蔵文化財発掘調査概報
1980・1981年度

1983年8月
助八尾市文化財調査研究会

八尾市埋蔵文化財発掘調査概報
1980・1981年度

1983年8月
八尾市文化財調査研究会

はしがき

滔滔と流れる大和川は、母なる大地に生命の萌芽を促し、幾久しく変わることなく豊穣の喜びを与えてきました。それ故河内平野は、幾多の先人の活動の舞台として、古来より重要な役割を果たしつつ、今日に至っています。しかし、山紫水明を賛えたこの地も近年の開発の波に追われ、近代都市へと変貌しつつあります。

八尾市域では、これらの先人の足跡である埋蔵文化財を保護する目的で、昭和55年10月1日より要綱を定めました。それ以後、遺跡指定区域内の開発事業に際しては、開発申請者の御理解のうえ調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握と保存に務めています。

今後、こうした祖先の遺産を受け継ぎ、後世の人々に未来の遺産として継承していくことは、現在の私どもに課せられた使命であります。

なお、現地調査および本書の作成にあたって御協力いただいた調査補助員諸子、関係者の方々に厚く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年8月

財團法人八尾文化財調査研究会

山脇 悅司

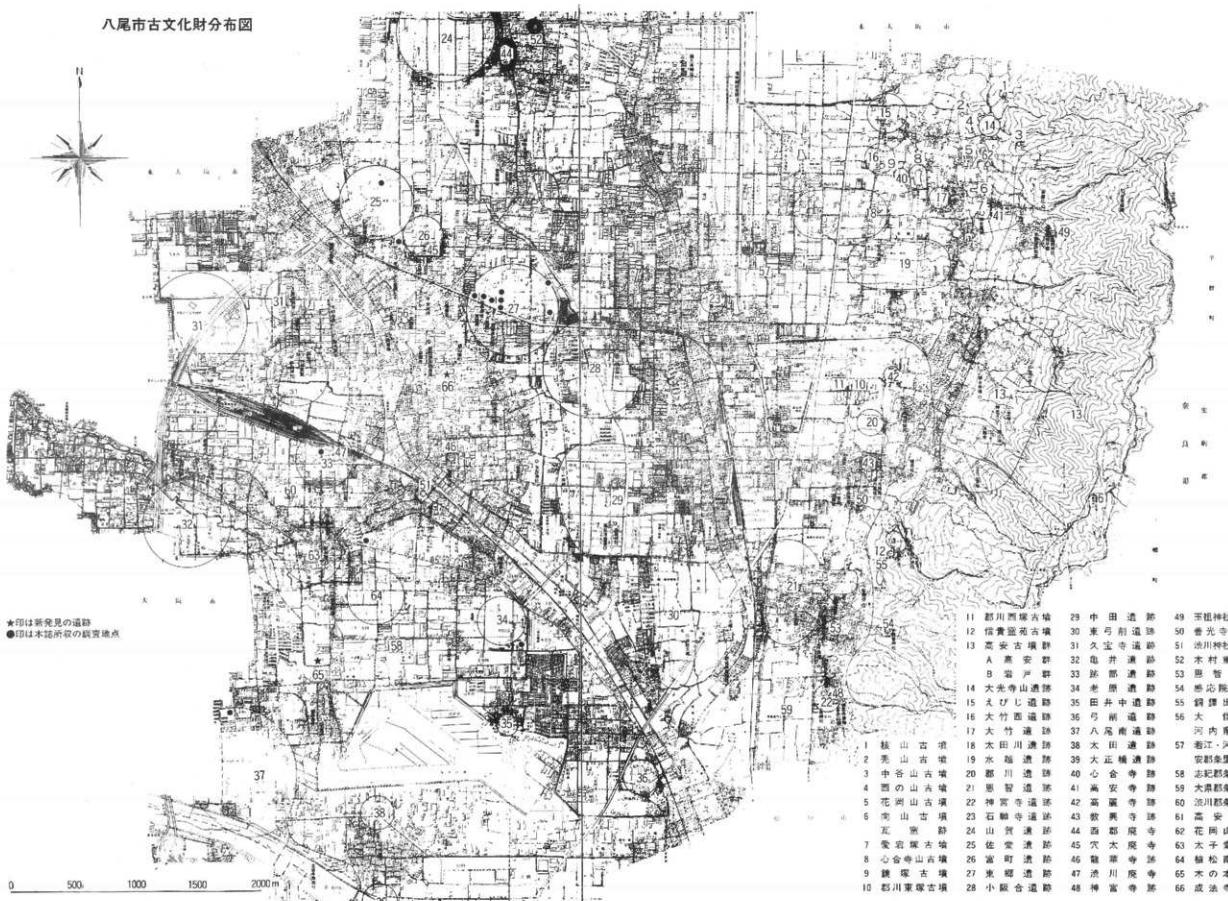
例　　言

1. 本書は、昭和55・56年度に八尾市教育委員会文化財室が実施した、埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。なお、本書作成に係る業務は、御八尾市文化財調査研究会が昭和57年7月1日から継続して行なった。
1. 本書に掲載した概要報告は、下記の目次に記したとおりである。なお、調査地の位置は、次頁の八尾市古文化財分布図に示している。
1. 本書作成にあたっては、山本昭の指導のもと調査担当者の米田敏幸・高萩千秋・原川昌則・高木真光・成海佳子が行ない、文責は各例言に明示した。

目　　次

第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告	1
第2章 植松南遺跡発掘調査概要報告	39
第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告	68
第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告	109
第5章 美園遺跡発掘調査概要報告	127
第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告	139
第7章 老原遺跡発掘調査概要報告	157
第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告	169
付　載 昭和55・56年度調査一覧表	368

八尾市古文化財分布図



第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市宮町2丁目1番地において実施した、株式会社大誠住建店舗建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和55年7月7日から7月29日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、原田昌則・高木真光が現地を担当した。なお、調査にあっては、駒沢敦の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか駒沢敦・野田雅彦(遺物実測)、成海佳子・池田まゆみ(トレース)があたり、執筆は原田昌則が担当した。

本 文 目 次

I	調査の目的と経過	8
II	調査方法	4
III	検出遺構	5
IV	出土遺物	10
V	まとめ	23
VI	遺物観察表	26

挿 図 目 次

図1	調査地周辺図	8
図2	グリッド設定図	4
図3	Aグリッド平断面図	6
図4	SE1(北から)	7
図5	SE1平断面図	7
図6	Bグリッド平断面図	8

図7 Cグリッド断面図	9
図8 土師質皿実測図	11
図9 瓦器椀実測図	12
図10 撥鉢・ねり鉢実測図	13
図11 羽釜実測図	15
図12 中国製磁器実測図	16
図13 国産陶磁器実測図	18
図14 漆器椀実測図	19
図15 人物像を墨書きした小石	19
図16 花瓶実測図	20
図17 瓦実測図	21
図18 麻尖実測図	22

図 版 目 次

図版1 調査地近景	図版5 撥鉢・ねり鉢II 同上(内面)
Aグリッド 遺構検出状況	
図版2 Bグリッド 遺構検出状況	図版6 羽釜 中国製磁器
同上 瓦溜	
図版3 土師質小皿	図版7 仏事遺物 中国製磁器
図版4 撥鉢・ねり鉢I 同上(内面)	図版8 漆・瓦・漆器

第1章 宮町遺跡(宮町2丁目1番地)

I 調査の目的と経過

宮町遺跡は八尾市宮町1丁目に位置する穴太神社を中心に拡がる遺跡である。穴太神社境内からは、平安時代末期から室町時代にかけての屋瓦片の出土があり^①『河内鑑名所記』・『和漢三才図会』等に記述してきた千眼寺に推定される地点である。

今回調査が予定された地点は、穴太神社西方約100mに位置し、周囲一帯が開発された中にあっては、わずかに残された闊地の一つである。このような状況から、急務とされる宮町遺跡の拡がりを知るためにも、重要な地点であるものと判断し、工事に先立って発掘調査を実施することを決定した。

調査は、調査地が穴太神社に近接する関係から、寺院を中心とした集落の有無を確認し、記



図1 調査地周辺図

録保存を計るとともに、必要な場合には遺構を保存するための資料を作成する目的で実施した。調査は昭和55年7月7日から7月29日まで実施し、調査面積は約80m²におよんだ。

II 調査方法

調査対象地は、府道八尾枚方線と市道弥刀上ノ島線が交差する南西隅に位置する土地で、面積は1857m²を測る。

調査はまず、調査地の北西にAグリッドを設定し、遺構の検出状況を見て他のグリッドを設定する方法をとった。その結果、中世末期の遺構面を検出したことから、南・東への拡がりを追求する目的でB・Cグリッド(各5m×5m)を設定した。調査は原則として、盛土および耕土は機械掘削を行ない、以下は人力により実施した。

なお、基準レベルは穴太神社内のOP+9.66mを使用した。

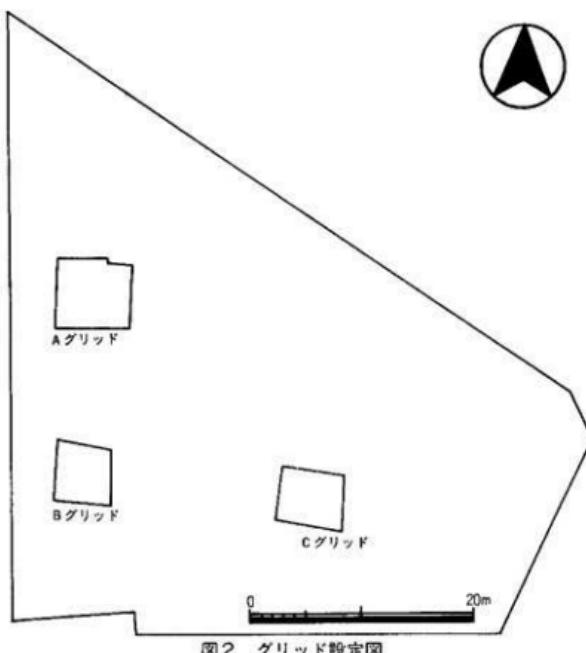


図2 グリッド設定図

III 検出遺構

1) Aグリッド

Aグリッドは調査地の北西部に南北5m・東西4mを設定して調査を実施したが、後に遺構の拡がりを追求する目的で東側へ2m拡張している。

調査の結果、第5層青灰色砂混粘土層を切り込む近世溝遺構2条(S D 1・S D 2)から成る第1遺構面と、黄褐色砂混粘土層を基盤として、水溜状遺構・井戸(S E 1)・溝4条(S D 3~S D 6)から構成される第2遺構面を検出した。

S D 1

グリッドの西壁面に沿って検出した。西側は調査区外のため不明で、深さもわずかに窪みを残す程度である。溝内からは近世陶磁器等の細片が少量出土した。

S D 2

南北方向に延びるもので、上部が削平されているため南側では痕跡をとどめないが、残存部では幅90cm・深さ10cmを測る。S D 1と同様に農耕に関連した小溝であろう。

溝内からは近世陶磁器・土師質皿等の細片が少量出土した。

S D 3

水溜状遺構とS E 1をつなぐ溝で、幅130cm・深さ約40cmを測り、南流するものである。溝は2段で形成され、底部は「U」字形を呈し、底部の比高差は約5cmを測る。

遺物は土師質皿・ねり鉢・中国製磁器・国産陶磁器等の細片が少量出土した。

S D 4

南北方向に延びる溝で幅50cm・深さ5~8cmを測り、北側では水溜状遺構の東側の水口と接続している。接続部では拳大の石や屋瓦片を使って水口施設を造っているが、レベル的にはやや高位置にあり、溝の水を直接水溜状遺構に入れたものではなく、水位の高い時にのみ機能を果したものと推定される。

出土遺物は少量ではあるが瓦器柄・土師質皿・屋瓦等の細片が認められた。

S D 5

北流する溝で幅30cm・深さ35cmを測り、北側ではS D 4を切り込んでいる。内部埋土は上層黄褐色砂まじり粘土、下層暗褐色砂まじり粘土から構成されているが、主な遺物包含層は上層で、土師質皿・瓦器柄・ねり鉢・土蓋・青磁等の細片が出土した。

S D 6

S D 5に流れ込む溝であるが、小規模の検出のため詳細は不明である。

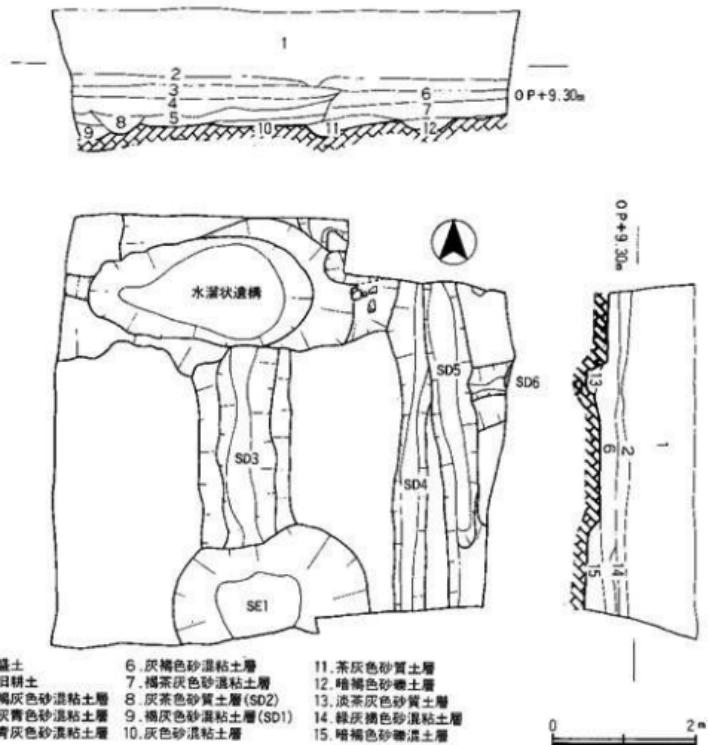


図3 Aグリッド平断面図

水溜状造構

東西方向に長い楕円形を呈する造構で東西3.7m・南北2.0m・深さ0.8mを測る。底部は平らで最下層は青灰色シルト層に達している。水溜状造構に付随する水口は東側・西側・北東の3ヶ所にあり、それぞれ水溜状造構内側へ向かって急角度の傾斜面を造っている。以上のことからこの水溜状造構は、水口を通して各方面から流入する雨水および生活排水を一時的に溜めておき、水位に応じてSD3へ流す機能を果たしたものと推定される。

また、この造構の上面積査時において、径約1.5mを測り円形を呈する青灰色砂質土層の存

在を確認していることから、水灌状遺構が後に縮少し、井戸として使用された可能性も考えられる。

遺物は第2層灰黄色砂混じり粘土層と第4層灰黄色粘土層から出土し、第2層からは土師質皿・指鉢・ねり鉢・土釜・中国製磁器等の破片が出土し、第4層では漆器椀・花瓶・人物像を墨書きした小石・絹木の編みもの等が出土した。

SE1

SD3に接続する円形の素掘り井戸で上面径2.8m・底径1.2m・深1.0mを測る。最下層はシルト層に達していて、調査中多量の湧水が認められた。

調査では井戸の全容を知るまでに至らなかつたが、南壁で直立した2枚の板材を検出したことから、板枠を有した井戸であった可能性も考えられる。

またSD3とは同レベルから切り込む関係にあるが、SE1下層からは瓦器楕片が比較的多数出土しており、両者が同時期に併存していたとは考え難く、SE1の埋没後にSD3が開溝されたものと考えられる。ただ平面精査時においては、両遺構を明確に判別することはできなかつた。

遺物は第1層茶褐色粘土層、第2層灰青色粘砂土層、第6層灰緑色微砂層から土師質皿・瓦器楕等が出土した。

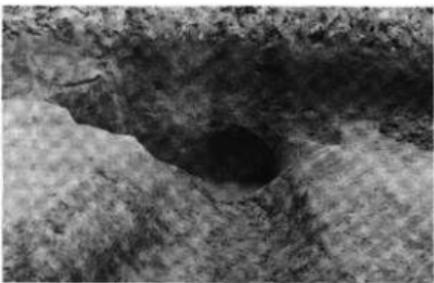


図4 SE1(北から)

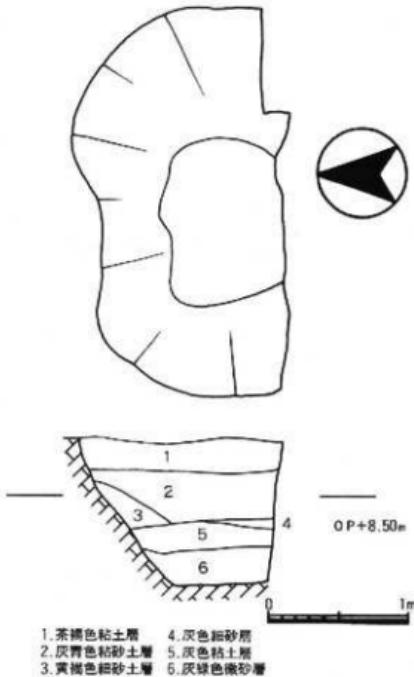


図5 SE1平面面図

2) Bグリッド

Aグリッドの南側に設定した調査地で、 $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ を測る。地表下 1.5 m の地点で瓦溜と溝1条から成る遺構面を検出した。

瓦溜

グリッド南西部で検出した。瓦溜は直径約 90cm を測りほぼ円形に拡がるもので、一部で地山面を切り込んでいるが、断面で見る限りでは上層からの切り込みは無く、遺物の地積もほぼ水平である。また、西側への拡がりを追求する目的で一部拉張し、瓦溜が西側に 30cm 拡がって終わることを確認している。

出土遺物はコンテナ2箱分におよび、丸瓦・半瓦・軒丸瓦・軒平瓦等の屋瓦類が大半を占め、他に擂鉢・ねり鉢・土釜・砥石等の細片が出土した。

SD7

上部が削平されていて底部のみの残存であるが、南北方向に延びて南端部で大きく東側へ拉がるもので、幅 40cm ・深さ $10\sim 17\text{cm}$ を測る。溝内からは、国産陶磁器の細片が小量出土した。

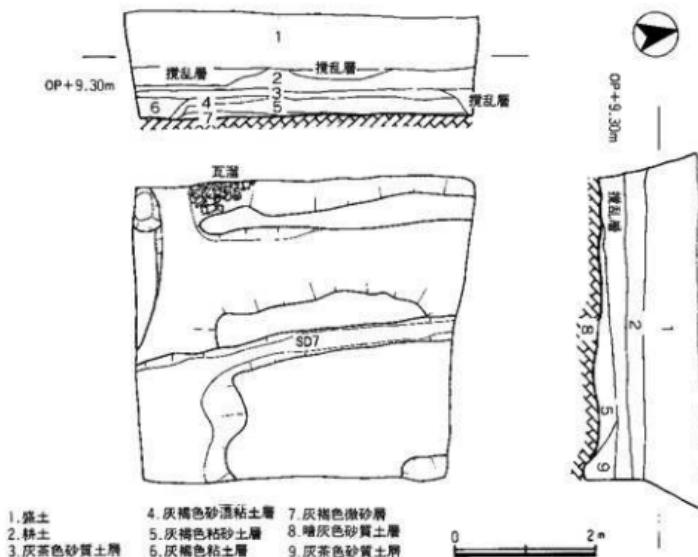


図6 Bグリッド平断面図

3) Cグリッド

Aグリッドの東側に設定した調査地で、5m×5mを測る。全体的な層位は上層より第3層まではA・Bグリッドに対応しているが、以下は最下層まで複雑な堆積で、造構面も認められなかった。また、最下層のシルト層以下は粗砂層の堆積が顕著に認められることから、Cグリッドの東側一帯は、河川が南北方向に拡がっていたものと推定される。

遺物は第4層灰褐色砂質土層より出土したが、主な包含層は第9層灰色粘土層で、土師質皿・瓦器楕・土釜・屋瓦の細片および植物遺体が多数出土した。

西壁

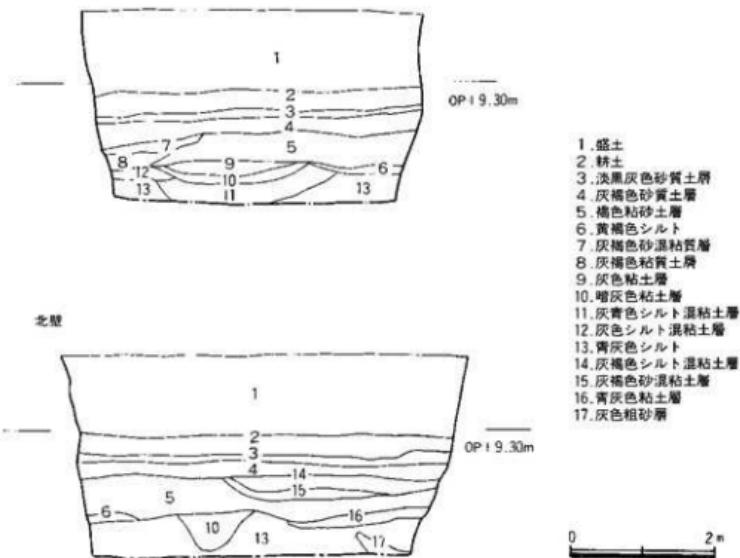


図7 Cグリッド断面図

IV 出土遺物

出土遺物は、土師質土器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器・屋瓦・羽釜・檻鉢・おり鉢・中国製磁器・国産陶磁器・漆器・石製品等の中世遺物が主体で、総量はコンテナ5箱分である。

その中でも特にAグリッドの水溜状遺構からは、多数の中世日常雑器と共に数点の漆器碗を検出している。これらの漆器碗は八尾市域にあっては数少ない出土例で、中世末期の生活必需器との組み合わせを知るうえで重要な資料であるばかりでなく、瓦器碗消滅以後の日常雑器の変化を示唆するものと言えよう。

また、仏事に使用されたと推定される花瓶や人物を墨書きした小石は、中世末期の民間信仰の一端を知るうえで、格好の資料を提供している。

以下器種ごとに概観し、遺物の法量・技法・調整についての詳細は一覧表で文末に明示する。

1) 土師質皿(図8-1~23)

土師質皿はAグリッドの水溜状遺構、SD3および拡張部の遺構面より多数出土した。

図示した23点は、その口径より概ね小皿・中皿の2種に大別できる。小皿は口径7.1~8.3cm・器高1.4~2.1cm、中皿は口径10.7~12.4cm・器高2.1~2.5cmで、量的には小皿が圧倒的に多く、中皿はわずかに出土した程度である。

1. 小皿(図8-1~17)

土師質小皿は、完形品を含めて良好な資料を17点図示している。すべて粘土円板手すくね成形を基本とするもので、形状から大別してA~D類の4種に分類することができる。

A類(1~3)

いわゆるへそ皿と呼ばれるもので、底部中央が上方へ突出し、口縁部が斜上方へ立ち上がる。全体にシャープな作りで、内面には時計回りのナデが一周する。外面は底部にまで丁寧にナデを行なう(3)と弱いナデにとどまる(1・2)がある、胎土には化粧土を使用し、焼成は良好で色調は乳白色を呈する。また、(1・3)は灯明皿として使用されたもので、内外面に黒色に媒化した部分が認められる。

B類(4~8)

技法・調整ともにA類に類似するが、底部中央の突出がゆるやかで、外面に指頭圧痕が目立つものである。

C類(9~12)

口縁部をつまみながらヨコナデすることにより端部が尖り気味に終わるもので、底部中央は

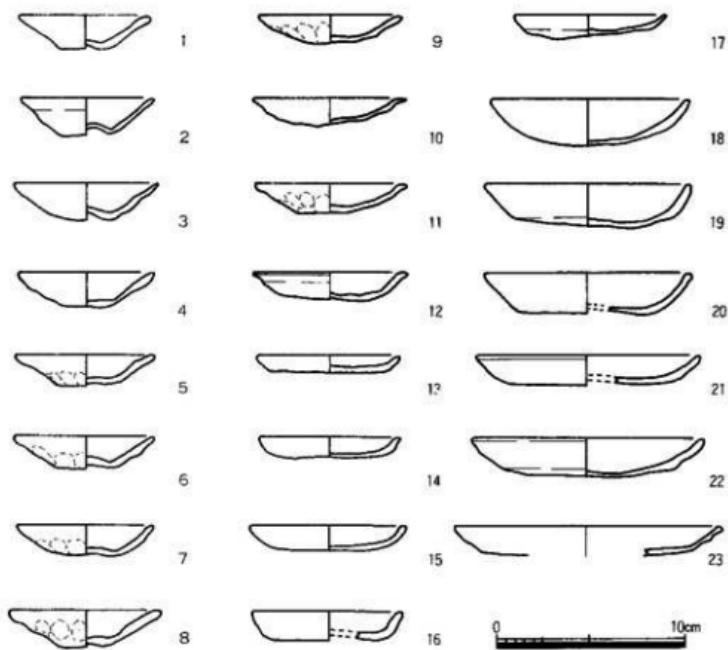


図8 土師質皿実測図

突出しないタイプである。調整は内面に時計回りのナデが一周し、外面には全体に弱いナデを施す。胎土・色調・焼成はA・B類に類似している。また、(10・12)は内外面に灯芯油痕を残す灯明皿である。

D類(13~17)

いずれも底部からゆるやかなカーブを描いて立ち上がるもので、口縁部は上方へつまみ上げられている。調整は口縁部と内面がナデ、外底部は指頭圧痕を残す。焼成は良好であるが、胎土はA~C類が化粧土であるのに対してD類には小砂粒が散見され、色調も乳褐色を呈する。また、D類は全てAグリッド拡張部からの出土で、時期的にはA~C類より若干先行するものと考えられる。

2. 中皿(図8-18~23)

小皿同様Aグリッドからの出土で5点を図示している。

(18)は皿というより椀に近い形状で、内面はナデ、外面は指頭圧成形の調整を行なっている。

(19・20)はともに底部より斜方向に立ち上がるもので、内面および口縁部にはナデ、外面には指頭圧痕を残す。(21・22)はやや扁平な形状を呈し、体部外面にはヨコナデによる明瞭な段を残す。調整は両者とも内外面にナデを行なうが、(22)は体部内面の一部に一次調整のハケメを残す。(23)も前者同様の調整が行なわれるが、他資料よりやや大型である。

2) 瓦器椀(図9-1~9)

瓦器椀は(1)を除き、すべてAグリッド拡張部から出土した。遺物はすべて細片で全容をつかむまでには至らなかったが、その特徴から扁平化が顕著に認められ、調整も全体に粗い。

口縁部の形態には、外面を強くヨコナデすることにより段をもつ(2・4)や弱いヨコナデを行なう(1・3)がある。高台はすべて簡略化の著しい貼付高台で、断面逆三角形を呈する(5~8)や外方向に開き台形状を呈する(9)がある。見込み部には平行直線文を施文する(3・8・9)や格子文を呈する(5)、平行直線文の一部を交差させる(6・7)がある。また、壇文の施線幅には2~3mmを測る(1・6~8)や1mm程度の(3・5)の2タイプが認められる。調整は口縁部外面はヨコナデ、以下は指頭圧痕を残すものが大半を占める。内面は体部・底部ともにナデで平滑にする。胎土は一様に良好であるが、(1)の様に大粒の砂礫を散見するものもある。焼成は良好であるが一部に炭素付着の不良があり、灰白色のものが多い。

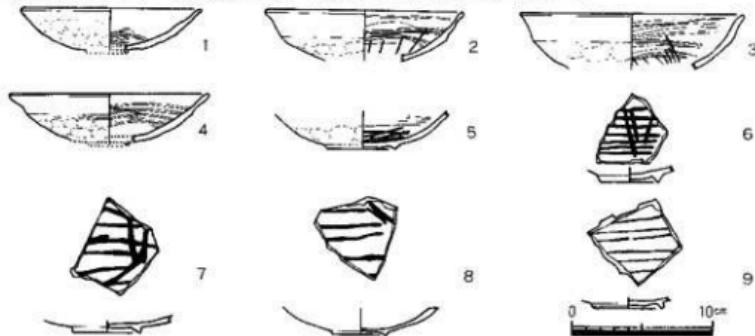


図9 瓦器椀実測図

3) 撥鉢・ねり鉢 (図10-1~11)

撥鉢・ねり鉢はA・Bの各グリッドで普遍的に認められたが、(5)以外はすべて細片で出土した。種別には土師質・須恵質・瓦質・陶質の4種がある。

(1)は口縁部が外方向に開き気味に終わる瓦質の撥鉢で、内面には7本単位とする擋目が施

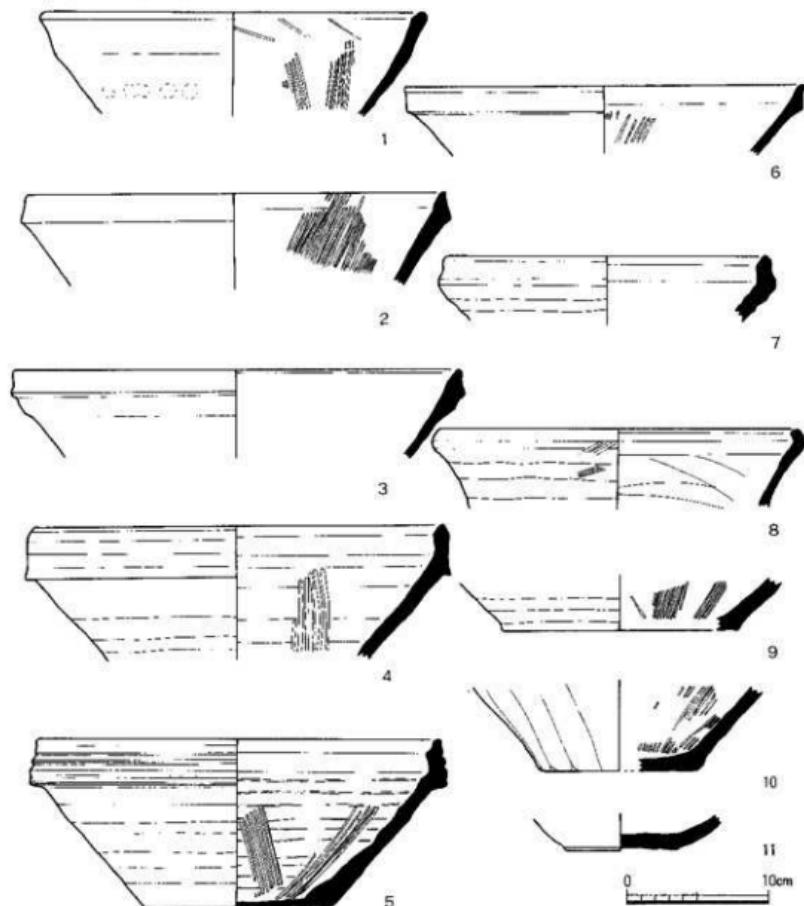


図10 撥鉢・ねり鉢実測図

状工具で描かれている。(2)は逆「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、内面の擇目は単位的でなく、全面に施される。(1)同様瓦質であるが、形態や調整には差異が認められる。(3)は土師質で内面が著しく剥離しているため、描鉢かねり鉢かの判定はし難いが、同形態のものには瓦質で描鉢とするものがある。(4・5・7)は備前焼の描鉢で、いずれも粘土紐巻き上げ成形によるもので口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面にはロクロ痕を残す。口縁部の特徴では、直立気味に立ち上がり口縁部下端に垂下りのある(4)や、凹線をもつ(5)や、逆「く」の字形に屈曲する(7)がある。擇目は太めの拂状工具を使用する(4)や、ロクロ痕との関係から途中で一部が跡切れる(5)がある。(4)は間壁編年の第ⅣB期に、(5)はV期に比定できる。
(6)は信楽焼の描鉢である。擇目は細片のため単位数・幅とも不明であるが、残存部の擇目は拂描きでなくヘラ描き条線である。(8)はよく焼しまった土師質のねり鉢で、口縁部外面は重ね焼のため灰色を呈する。(9)は陶質の描鉢の底部で、9本を単位とする擇目が櫛状工具で描かれている。(10)は土師質の描鉢である。内面の擇目は長期間の使用のため磨滅が著しい。また、外面全体には煤の付着が認められ、一部で指摘されているように直接火にかけて調理する機能を果たした描鉢であった可能性も考えられる。(11)は須恵質のねり鉢と推定され、外底面には静止糸切り痕が認められる。

4) 羽釜(図11-1~7)

羽釜はA・Bグッリドから多数出土した。(1)の足釜を除いてはすべて丸底球形の胴部から水平に伸びる鋸を有するもので、6点を図示している。しかし、大半が口頭部から胴部上半にかけての破片で、全様を知り得た資料は1点も検出していない。

羽釜は口径の大きさにより21cm前後の小型のもの(2・3)、27cm前後の中型のもの(4~6)、31cm以上の大型(7)の3種に大別できる。口頭部は(6)を除いては内傾するもので、外面に2~4の段もしくは凹線を配する。鋸は幅広で、水平方向ないしは斜上方に付けられていて接合部下半で段を有するものが多い。調整は口頭部内面に横または斜方向のハケとナデを施し、外面には丁寧なヨコナデを行なう。胴部以下は横方向にヘラで粗削りが行なわれ、器壁を薄く仕上げている。焼成は灰黒色に焼かれて瓦質を呈する(2・7)と、上師質(3~6)の2種に区別されるが、両者とも技法や調整面では大きな差異は認められない。また、胴部外面は二次焼成を受けて黒色に煤化し、有機物の付着を認める個体が大半を占める。

これら一群の土釜は、当代の鉄釜を模倣したと推定されるもので、口頭部の形態変化から8期に区別されている福垣編年では、(2・3・4・6)が第6期E₂、(7)がE₁に分類される。
^③

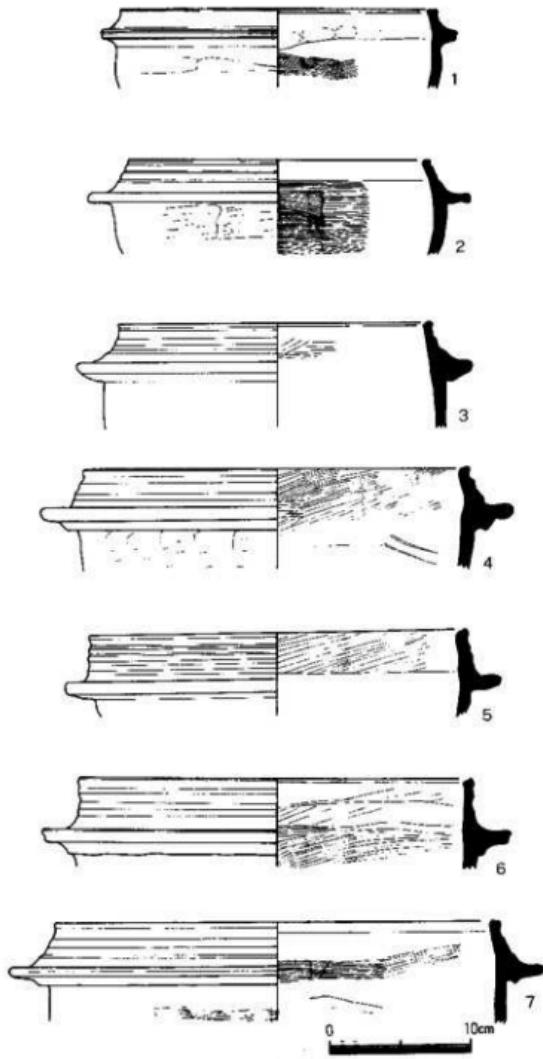


図11 羽釜実測図

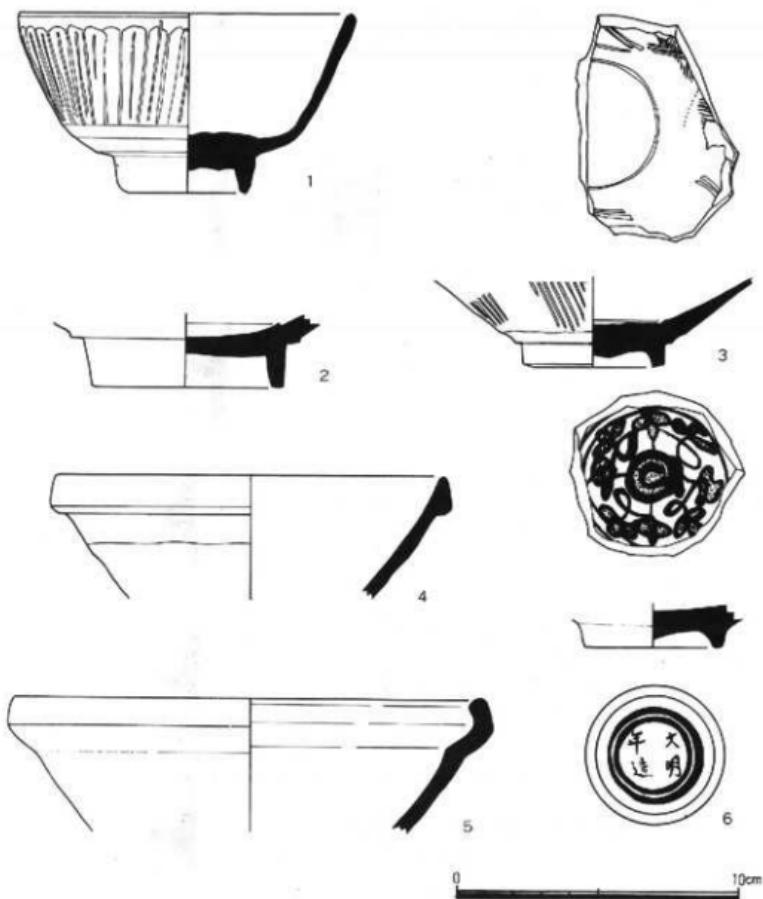


図12 中国製磁器実測図

5) 中国製磁器(図12-1~6)

中国製磁器はA~Cの各グリッドから散発的に出土した。量的には小破片を含めて20点あまりで、器種は碗が大半を占める。碗は、白磁(2・4)・青磁(1・3・5)・染付(6)に区別され、出土位置の違いにより時期差が認められる。

(1)は直口の青磁碗である。体部外面に細蓮弁文をヘラ描きした後、下半をヘラで横方向に削る。釉は淡灰緑色で光沢があり、釉層も厚い。兵庫県伊丹城址の調査では備前焼の擂鉢(問壁編④年)と共伴する例が報告されている。(2)は直立する高台を有する白磁碗で、高台径6.8cmを測る。見込み部は沈線状の浅い段を持ち、中央部はわずかに窪む。釉は白緑色で薄く施釉しているが、全面に細かい貫入が入る。白磁碗V類に分類される。(3)は体部上半を欠損する青磁碗である。内面は弧状の刻線と細かい点綴文を施文する。外面は猫かきと称される怖描直線文が、底部から口縁部にかけて放射状に施される。釉は灰緑色で光沢があり、体部下半まで施釉される。同安窯系青磁碗I類-1-Dに分類される。(4)は玉縁状口縁を持つ白磁碗である。釉は灰白色で光沢があり、内面および体部上半に施されている。白磁碗IV類-2に分類される。(5)は体部が斜上方へ立ち上がり、上半で外折し角度を変え内弯する口縁部を作る。釉は光沢の少ない青灰色で全体に釉層が厚い。(6)は底部のみ残存の染付碗で、高台底径4.9cmを測る。見込み部分は植物と推定される文様が呉須で描かれている。輪内には2条の圓線の中に銘款がある。从方ともに発色の良い呉須で描かれているが、全体に釉層が厚く染付がくすんで薄く感じられる。釉は透明ガラス質で光沢があり、疊付を除いた全体に施釉されている。疊付には重ね焼の際生じたと推定される陶片の付着が認められる。また、銘款されている文字は「大明」とも、日本の年号である「文明」(1469~1486)とも読むことができる。中国製磁器であり「大明」と読むのが妥当であろうが、文明年間は中国明代で優秀な磁器を生産した成化年間(1465~1487)と併行することから、この時期に日本の注文により製作された可能性も考えられる。日本年号を銘款する最古の例は、和歌山県根来寺遺跡出土の白磁小皿(「天文年造」1532~1555)があり、本資料を「文明年造」と読めばそれよりも古い時期に比定できるが、現段階ではやや疑問を残す。

6) 国産陶磁器 (図13-1~8)

国産陶磁器は主としてAグリッド第1構造面を構成するSD1・SD2およびBグリッドの構造面から少量出土した。

(1~4)は伊万里焼の碗である。(1)は丸文の中に桐文様を発色の悪い呉須で濃淡に描いている。(2)は高台脇と体部に圓線が回り、外面には網目文様が淡い呉須で描かれている。(3)は白色の素地に透明釉が施され、高台部に2条、体部に1条の圓線が染付けられる。(4)は高台部から体部にかけて淡い呉須で3条の圓線が施文される。体部の文様は植物を表現したものと考えられるが、破片であり明らかでない。(5)は淡灰色の素地に灰茶色の釉を施す。体部外面の2条の圓線は茶褐色、網目模様はくすんだ呉須で染付けられる。内外面に粗い貫入がはいる唐

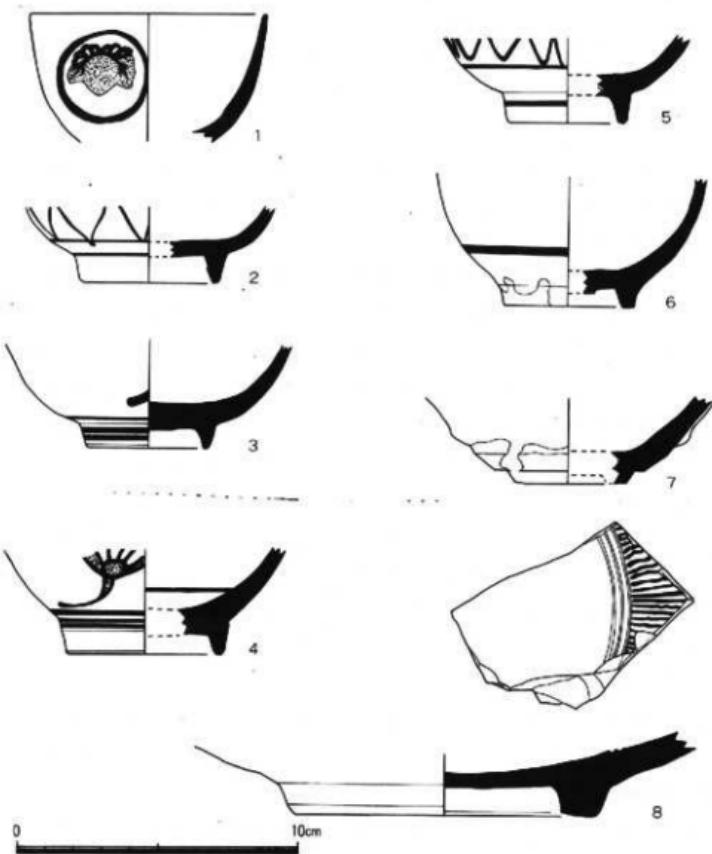


図13 国産陶磁器実測図

津焼の碗である。(6)も唐津焼の碗で白色の素地に光沢のある白緑色の釉を施す。外面には発色の良い呉須で直線文が染付けられ、内外面に粗い貫入がはいる。(7)は蛇ノ目高台をもつ天目茶碗と推定される。内外面ともに光沢のある茶色の釉を施す。(8)は唐津焼の大皿である。高台は幅広で、疊付外面には面取りを施す。内面は3条の圓線を陰刻施文し、そこから放射状に直線と波線を櫛で陰刻した後、白泥を塗り込む。

7) 漆器 (図14—1~3)

漆器はすべて水溜状遺構下層からの出上で、図示し得たものは3点のみであるが、全体としては数個体分の出土が認められた。器種はすべて碗形で、3点とも原材料を横木取りし、ロクロで挽きだす素地製作法が用いられている。漆は素地に洪を塗る等の下地加工をした後、重ね塗りしたものと推定される。

(1)は横方向に張り出した後斜上方へ立ち上がる深い体部をもつもので、口径15.0cm・器高7.9cm・高台底径8.5cmを測る。高台は高く重厚で「ハ」の字形に開き、内面は深く削り出されている。漆は剥離が著しく明瞭でないが、全体に朱漆を塗布した後、体部外面および高台部に黒漆を上塗りしている。口縁部外面には朱漆で絵を描いた部分を認めるが、詳細は不明である。(2)は高台のみが残存するもので、高台底径7.9cmを測る。高台内面の削り込みは浅く、内外面には黒漆が塗布されている。見込み部には朱漆で絵が描かれていた痕跡が認められるが、文様の詳細は不明である。(3)はやや小型の椀で残存高6.0cm・高台底径6.8cmを測る。高台は橢円形を呈し、裏面は深く水平に削り込まれている。全体に黒漆を塗布した後、外面に鳥(鶴?)、見込みにも鳥をモチーフとした絵が描かれている。

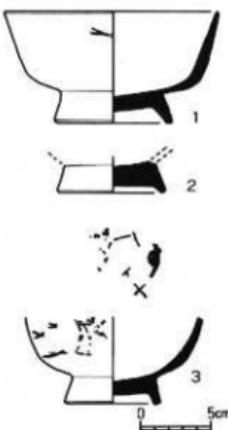


図14 漆器概実測図

8) 仏事遺物

仏事に関連した遺物としては、人物像が墨書きされた小石と花瓶2点を検出している。これらはすべてAグリッドの水溜状遺構下層から他の日常雑器とともに出土したものである。

人物像を墨書きした小石 (図15)

人物像が描かれた小石は、花崗岩質の河原石で、長さ7.1cm・幅2.8cmを測る。人物像は石の平端面を利用して描かれたもので、頭部は鮮明であるが首部以下はやや不鮮明で、脚部は墨痕をわずかにとどめる程度である。

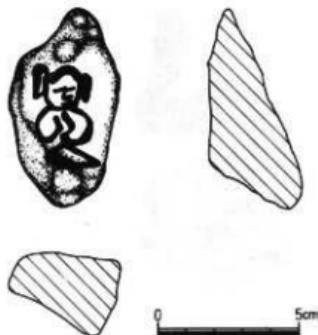


図15 人物像を墨書きした小石

玉子形を呈する顔には穏やかな幼顔が描かれている。耳は双方ともに比較的大きく、左耳がやや上方に描かれている。首の表現は行なわれず直接肩に接続されている。二の腕は丸く描かれ、肘を境に前膊は上方へのび、手はわずかに角度を変え胸の中央で合掌する形で終わっている。脚部は細長い三角形を一笔で描き、座像を表現したものと推定される。これらの図柄から、纏長の耳を垂髪と考えれば、合掌して両膝を着いて座る形で表現されている「太子七歳童形」に類似するものと考えられる。しかし、水に関する遺構から出土したことから、石神信仰に見られるように流産や死産した嬰兒の魂を水に返し、新たなる生命となって生まれてくることを願う民間信仰の一つであるとも考えられる。すなわち水とともに石の持つ生命力、呪力への信仰が、自然石に地蔵像を描くことにより新たなる再生を願ったものとも理解できる。

以上のことから、太子像あるいは地蔵像の双方が考えられるが、現時点では類似する資料がなく、今後の出土例に期待したい。

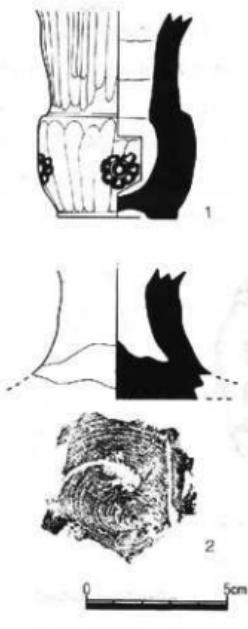


図16 花瓶実測図

花瓶（図16-1～2）

(1)は上部を欠損する土師質の花瓶で、底径4.2cm・残存高7.2cmを測る。体部は底部より弯曲して立ち上がり、上端で段を有し、上方へラッパ状に拡がる頸部に統く。調整は体部外面・頸部ともに縱方向のヘラガキを施し、内面にはロクロ痕を顕著に残す。体部外面の印刷文様は八葉蓮華文と推定され、全体を6個で分割している。焼成は良好硬質で茶色を呈し、胎土には小砂粒を散見する。また、底部から体部にかけて煤の付着が部分的に認められる。

(2)は右回りのロクロ水挽き技法で成形された瀬戸焼の花瓶で、残存高4.6cm・残存底径5.2cmを測る。上部は欠損していて不明であるが、欠損部を境として外方向に一度拡がった後、内窓気味に立ち上がる器形を有したものと考えられる。裾部もゆるやかに拡がるものと推定され、中段まで淡黄緑色の釉が薄く施されている。底部は水平で、回転糸切の痕跡を残す。奈良県斑鳩町の仏塚古墳出土の花瓶①に類例を認める。

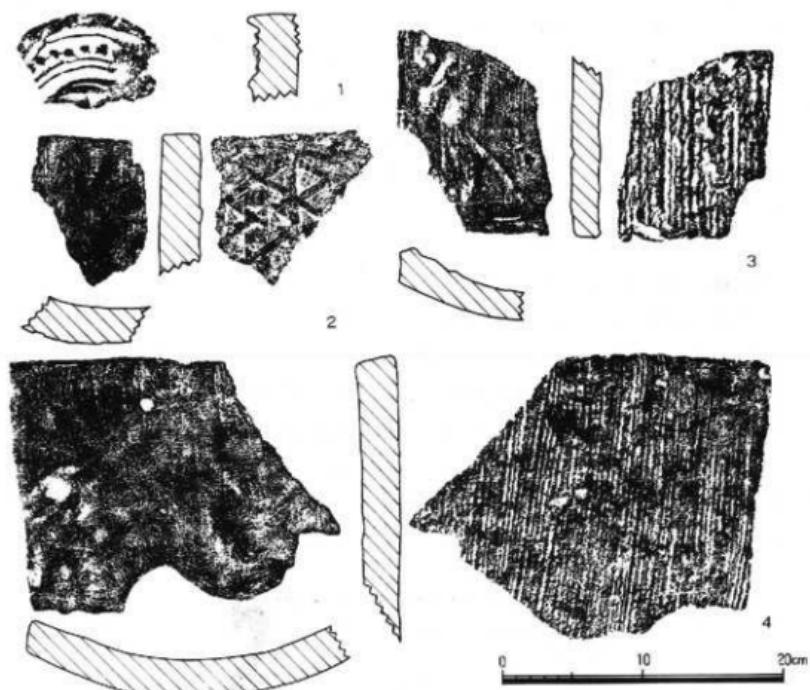


図17 瓦類実測図

9) 瓦類(図17-1~4)

瓦類は各グリッドから比較的多数出土した。その中でも特にBグリッドの瓦溜からは、他の中世雜器とともにコンテナ2箱分が出土している。出土した瓦類のうち、軒瓦は軒丸瓦(1)1点のみで、他は丸瓦・平瓦の破片である。

(1)は突出した内区に右巻きの三巴文を配する軒丸瓦である。圓線は細く内側に2本、外側に1本が回る。外区の内線には小粒でやや不揃いの珠文を配している。胎土は石英粒を多量に含み粗い。焼成は良好堅緻で明灰色を呈している。また、同范瓦が近接する穴太神社から出土している。Bグリッド瓦溜出土。(2)は厚みのある平瓦片で凸面に格子状の押印、凹面には

ナデを施す。全体に砂粒が散見されるが胎土は比較的密である。焼成は良好堅緻で灰茶色を呈する。Aグリッド造構面出土。(3)は凸面に粗いタタキ、凹面には粗い布目を残す。胎土は良好密である。焼成は良好非常に堅緻で、表面黒灰色・内部明灰色を呈する。Bグリッド瓦溜出土。(4)は凸面に細かく均整のとれたタタキ、凹面は磨滅していく不明瞭であるが、一部に粗い布目が認められる。胎土には小砂粒を多量に含む。焼成はやや不良で表面・内部ともに乳白色を呈する。AグリッドSD3出土。

10) 瓢(図18-1~2)

瓢は常滑焼(1)と瓦質(2)の2点を図示している。

(1)は口縁部が外折し、上下に拡張して幅広の縁帯を作っている。口縁部内外面および体部外面は丁寧なヨコナデ、体部内面中位は指頭圧痕を残す。焼成は良好堅緻で茶褐色を呈する。胎土には小砂粒が散見されるが密である。Bグリッド造構面出土。

(2)は口縁部が外方へ折れ曲がり、端部は丸く終わる。口縁端部と口縁部内面はヨコナデ、体部外面は横方向のハケとヘラミガキが行なわれている。焼成は良好で明灰色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。Bグリッド瓦溜出土。

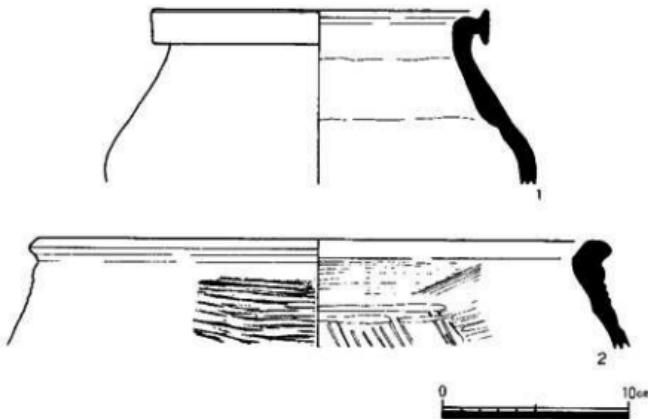


図18 瓢実測図

V まとめ

今回の調査は限られた範囲にもかかわらず、比較的良好な資料の検出を見、中世末期における日常雑器の組み合わせを知る上で格好の資料を与えてくれた。

近年、本調査のように中・近世の時期に関する発掘例も増加する傾向で、各地でこの時期に該当する遺構や遺物に関する報告も、数多く出されるようになってきた。

しかし、中・近世における遺構・遺物のあり方は、社会的背景や社会構造に伴なう要素が多分に影響しているものが多く；その内容は遺跡間で一様ではない。

とくに遺物においては、社会的な流通機能が確立してゆく中世にあっても、依然として旧国単位、あるいは遺跡ごとに地域色および遺跡間の差を残している。したがって同器種であっても、技法や調整の相違や全般的な年代観に、旧国単位ごとに若干の差が認められることは、今まで多くの方々が指摘されてきたことである。

それ故、全般的な指標となる年代の決定は、生産地の限定された一部の特定遺物によって推定しなければならないのが、今日の現状であると言えよう。

今回の調査では包含層を始めとして、水溜状遺構・溝遺構・瓦溜から、多数の遺物が出土した。しかし、水溜状遺構以外には時期幅のある遺物が混在していて、層位的には把握し難い。したがって、比較的良好な資料を検出した水溜状遺構の出土遺物を中心に、15世紀末から16世紀前半の日常雑器のあり方について考えてみたい。

水溜状遺構から出土した日常雑器類の基本的構成は、他の一般的中世集落と同じく、煮沸・調理・貯蔵・供膳の4機能からなり、本資料に関しても形態別に区別できる。

煮沸形態では、羽釜(図11-5)がある。水溜状遺構以外の資料が口縁部を3段ないし4段に成形して、ほぼ一型式に捉えられるのに対して、この資料は凹線で段を形成するなど、技法的にも前者より新しい時期に位置づけられるものと考えられる。

また、播磨以西や平安京で盛行をきわめた土鍋は、他の遺構からも出土せず、和泉地方との共通性が認められる。

調理形態としては、擂鉢(瓦質・備前焼)がある。瓦質擂鉢は口縁部外側に面をもたず丸く終わるもので、口縁部の形態変化から3型式に編年されている大岡編年(広瀬氏)^⑪のC型式に類する資料である。一方、備前焼の擂鉢は口縁部の外面に凹線をもち、間壁編年(図11-6)のV期に比定されるもので、兵庫県伊丹城址の調査では、永正16年(1519)の落城に関連した焼土より、このタイプのものが大量に出土したことが報告されている。

また、水溜状遺構以外でも備前焼の擂鉢の出土があり、15世紀後半以降は在地産の土師質や

瓦質にかわって、技術的にも優良な陶器の流通が一般化したものと推定される。

貯蔵形態では常滑焼の大甕の破片を数点検出しただけで、他の流通品やこの時期特有の在地産瓦質・土師質の甕等の出土は見られず、同時期の中・南河内の一般的な遺物構成とはやや異にしている。

供膳形態としては、土師質皿・漆器碗・中国製磁器碗がある。

土師質皿には小・中の2種があり、中でも小皿には中央部が突出する『へそ皿』の存在が注目される。へそ皿は14世紀以降に、平安京を中心として広く分布するもので、中・南河内でも瓦器碗消滅期以降の指標の一つに考えられている。周辺の遺跡では、15世紀前半以降に比定される挟山編年の初期にへそ皿が認められる。また、東大阪市の若江遺跡のS D 1では、消滅期の瓦器碗と共に存しておらず、中・南河内では15世紀前半以降にへそ皿の存在が認められる。しかし、当遺跡のへそ皿は挟山遺跡の資料とは形態的に異なり、高屋城址で2.5~3寸ものに分類されている資料に類似するものと考えられる。¹⁹⁾

また、この時期に突飛的にへそ皿が出現することは、従来の灯明皿から発展して、中央部を突出させることにより油溜まりを良くし、最後まで能率よく油を使い切ると言った、機能面での変化が考えられる。さらに、当時の社会経済面から考えれば『座』等の流通体制が整いつつあるこの時期にあっても、燈油(菜種・ゴマ)等の需要品は天候に左右されやすく、供給量も不安定であったものと推定される。このことから、油容量の少ないへそ皿は、当時の経済体制を反映したものの一つであった可能性も考えられよう。しかし、すべてのへそ皿に灯芯油痕が認められるわけではなく、実体についてはなお不明な点が多い。

漆器は6個体分を検出している。これらは瓦器碗消滅以降の日常雑器の変化の一端を示すもので、当遺跡出土の資料のように高い高台をもつタイプは、15世紀以前にはその存在が認められず、この時期の所産と推定される。

中国製磁器は、碗2点を検出している。その中でも染付碗には前章でも一部触れたように銘款があり、15世紀後半の移入品と考えられる。これは、水溜状遺跡構出土の一括遺物を概ね15世紀末~16世紀前半に比定した根拠となり得る資料の一つである。

日常雑器以外では、瓦片を多数検出した。この瓦類はすべて、東方に近接する穴太神社境内に位置した千眼寺に関連するものと推定される。千眼寺址では、瓦以外でも水溜状遺跡と同時期に属する遺物を検出していることから、この時期に寺と集落が併存する関係にあったことが窺われる。

また、穴太神社南側の宮町1丁目でも、中国製磁器(水注・花瓶)の完形品を検出しているこ²⁰⁾

とから、穴太神社を中心とする集落は広範囲な拡がりをもっていたことが推定される。

以上、水溜状遺構出土の遺物を中心に、概略を記した。しかし、今回の調査では遺跡の一部を検出したにすぎず、多くの問題点を残したことは否めない。

今後これらの問題を解明することは、千眼寺の寺域の範囲や、関連する集落との関わりを考えるうえで、重要な事柄と言えよう。

〔注 記〕

- 1 古岡哲「大阪府八尾市出土瓦について」『古代研究16』元興寺文化財研究所 1978年
- 2 間壁忠彦・間壁貞子「備前焼研究ノート(1)・(2)・(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5号倉敷考古館 1965・1966・1968年
- 3 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』第7巻第7号 大和文化研究会 1962年
- 4 伊丹市教育委員会「伊丹城跡発掘調査報告書III」 1978年
- 5 ①前掲書
- 6 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
- 7 ⑥前掲書
- 8 ⑥前掲書
- 9 東京国立博物館「日本出土の中国陶磁」 1978年
- 10 大瀧八郎「石神信仰」木耳社 1977年
- 11 斑鳩町教育委員会「斑鳩・仏塚古墳」 1977年
- 12 大阪府教育委員会「大岡遺跡発掘調査概要・V」 1981年
- 13 ②前掲書
- 14 ④前掲書
- 15 大阪府教育委員会「挾山遺跡・蘇里遺跡発掘調査概要」 1974年
- 16 東大阪市教育委員会「若江遺跡3D-U8地区の調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』 1980年
- 17 大阪府教育委員会「高麗城址発掘調査概要Ⅶ」 1981年
- 18 八尾市教育委員会「宮町遺跡発掘調査概要I」 1982年

V 出土遺物観察表

1) 土師質皿

実測番号	器種	出土位置	法面(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
1	小皿	Aグリッド水溜状壇構	7.1	—	1.8	底部中央が上方へ突出し、口縁部が斜め方向に立ち上かる。内面は時計回りのヨコナガ、外縁は直線状成形を施す。	乳灰色	精良	良好	
2	小皿	#	7.2	—	2.0	直下内横手板成形、内面時計回りのヨコナガ、外縁は直線状成形。	乳灰色	良好 砂粒を 散見す。	良好	完形
3	小皿	#	7.8	—	2.0	内面及び口縁部外側ヨコナガ削除。体部外縁から底部にかけてはヨコナガを施す。	乳灰色	精良	良好	内面黒色に碳化した部分あり。完形
4	小皿	#	7.3	—	1.9	内面は時計回りのヨコナガ、外縁は直線状成形後、ナガ調整。	白灰色 (外面) 赤褐色 (内面)	精良 化粧土	良好	内外面に 灯芯油痕 充形
5	小皿	#	7.6	—	1.6	体部中段で角度を變え外にする。内部体部ヨコナガ、外縁は直線状成形後、弱いナガを施す。	乳灰色	精良	良好	
6	小皿	#	7.5	—	1.9	外縁底部中央から内面に向かってわずかに突出する。内面時計回りのヨコナガを削除。	乳灰色	精良	良好	完形
7	小皿	#	7.2	—	1.6	底部より内面弧底に立ち上かる。内面及び口縁部はヨコナガ。体部外縁から底部にかけては直線状成形を施す。	乳灰色	精良	良好	完形
8	小皿	#	8.1	—	2.1	底部中央が若干上方へ突き上げられている。内面及び口縁部はヨコナガ、体部外縁から底部にかけては直線状成形を施す。	乳灰色	精良	良好	
9	小皿	#	7.6	—	1.5	全体に直線作りである。内面は時計回りのヨコナガ、外縁はわずかに口縁部をナガするだけで、以下はほとんど無調整である。	乳白色	精良	良好	完形
10	小皿	#	8.2	—	1.4	口縁部が水平方向に伸びる。内面は時計回りのヨコナガ。外縁は口縁部ヨコナガ以下直角油成片。	乳灰色	精良	良好	内面中央に 灯芯痕 あり。 完形
11	小皿	#	8.1	—	1.5	口縁部はやや厚く、水平方向に伸びる。内面時計回りのヨコナガ。外縁体部には直線状成形を施す。	乳白色	精良	良好	完形
12	小皿	#	8.2	—	1.5	口縁部は水平方向に僅く外反し。口縁部は火焚灰跡である。内面時計回りのヨコナガ。外縁は口縁部のヨコナガ以下はヨコナガを施す。	乳灰色	精良	良好	内面に 灯芯痕 あり。 完形
13	小皿	Aグリッド 構造面	7.5	—	1.0	口縁部は底部から丸底を彎びて立ち上り、口縁部は丸く折る。内面及び口縁部はナガ以下は本開削である。	乳白色 良好 砂粒を 含む	良好	良好	

実測図 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
14	小皿	Aグリッド 遺構面	7.5	-	1.1	口縁部は底部近くまで外反し、縁部は丸く切れる。内面及び縁部はナガ。以下は断面形状を記す。	乳褐色	精良	良好	
15	小皿	#	8.3	-	1.4	口縁部は底より内側突出して立ち上がり、口縁部は丸く切れる。内面及び縁部はナガ。外側底部には松浦窓の凹痕を有す。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	
16	小皿	#	8.0	-	-	底部より急なカーブを描き立ち上り、かづらは縁部は丸味を持つ状態。内面は丁寧なナガ型。体部外側にはコロナガにより底部との境を作る。	乳褐色	精良	良好	
17	小皿	Aグリッド SD 5	8.1	-	1.2	底部より斜方向に立ち上り。口縁部は丸味を持つ状態。内面及び縁部は丁寧なナガ。体部外側と底部は指標を記す。	乳褐色	良好 砂粒を散見する	良好	完形
18	中皿	Aグリッド SD 3	10.7	-	2.5	底部からゆるやかにカーブを描き立ち上るもので、底部は楕円状を呈し、している。内面及び縁部はナガ。外山田窓頭頂形成。全体に渋く仕上げられている。	乳褐色	良好 砂粒を散見する	良好	
19	中皿	#	10.9	-	2.3	全体からゆるやかにカーブを描き立ち上るもので、底部は楕円状を呈し、している。内面及び縁部はナガ。外山田窓頭頂形成。全体に渋く仕上げられている。	乳褐色	精良	良好	完形
20	中皿	#	10.9	-	-	わずかに底部が干び底になってしまい、内面及び口縁部は丁寧なナガ。口縁部外側と体部の境にはナガによる接縫が有る。	乳褐色	精良	良好	
21	中皿	Aグリッド 遺構面	12.0	-	-	斜方内面立ち上り。口縁部は丸味を持つ状態。内面及び口縁部はナガ。以下は弱いナガ調性。体部中段にはコロナガによる接縫が認められる。	乳褐色	精良	良好	
22	中皿	Aグリッド SD 4	12.4	-	2.1	底部下部より斜方内面立ち上り。口縁部は丸味を持つ状態。内面及び口縁部はナガ。以下は弱いナガ調性。体部外側にはコロナガによる接縫が認められる。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	
23	中皿	#	14.4	-	-	底部下部より斜方内面立ち上り。内面及び口縁部はナガ。以下は弱いナガ調性。体部外側にはコロナガによる接縫が認められる。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	

2) 瓦器椀

実測図 番号	添付	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
1	瓦器椀	Aグリッド 遺構面	12.9	-	-	底部より直方向に立ち上った後、斜方向へ立ち上る。口縁部内外面コロナガ。体部外側は底部を削り飛ばす。	灰黒色 -灰色	良好 砂粒を散見する	良好	
2	瓦器椀	#	13.7	-	-	口縁部は弱いコロナガにより増強された跡を有する。内面底部はヘラミガキ。見込み部は平滑面を施す。	灰色	精良	良好	
3	瓦器椀	#	15.5	-	-	体部中央部に角度を変えて立ち上り、口縁部は斜方向に立ち上る。外面口縁部コロナガ以下指標圧成形。内面底部は斜方向のヘラミガキ。見込み部平行斜線。	灰色	精良	良好	

実測図番号	器種	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
		出土位置	口径 (底径)	器径 (高さ)						
4	瓦器輪	Aグリッド 造構面	14.0	—	—	底盤より外方に立ち上がり、口縁部は側、ヨコナ斜めに張り出せる。内面全体部は施釉方法のヘラミガキ。体部外側は擦摩斑痕を残す。	灰黒色 一灰色	精良	良好	
5	瓦器輪	Aグリッド SD 4	(4.8)	—	2.6 (底径)	内面底盤はラミガキ。見込み部は斜い頭削子で施釉を施す。高さはわずかに株させと貼りつけるもので、横円形に一致する。	黒灰色	精良	良好	
6	瓦器輪	Aグリッド 造構面	(4.0)	—	1.1 (底径)	横円形に一致する高さで、断面三角形を呈する。見込み部は平行継文を施文している。	灰色	精良	良好	
7	瓦器輪	Aグリッド SD 5	(4.8)	—	2.1 (底径)	高さは内側から外方向にナタが一直線するため底盤は尖り形に終わる。見込み部は平行継文、外側体部は擦摩斑痕を残す。	灰色 微砂を多量に含む。	良好	良好	
8	瓦器輪	Aグリッド 造構面	(3.6)	—	2.1 (底径)	高さは軽く茎をわずかに盛り付けるもので、頭削子を施す。体部内外部ナタ。見込み部は平行継文を施文する。	灰色	精良	良好	
9	瓦器輪	Aグリッド 造物包 含層	(5.2)	—	0.8 (底径)	腹半に押しつけられた高さで、断面円形を呈する。見込み部の略文は幅約1mm程度の施文跡である。	黒灰色	精良	良好	

3) 擬鉢・ねり鉢

実測図番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
			口径 (底径)	器径 (高さ)	高さ						
1	擬鉢	Aグリッド 水溜状 造構	26.5	—	7.5 (底径)	口縁部は体部上半からゆるやかに外反する。底盤は厚く丸い。口縁部内外部及び内側に斜めナタココナ斜めに張り出せる。横幅は7本単位の字形を呈する。	黑色	砂粒を多量に含む。	良好	瓦質	
2	擬鉢	Cグリッド 造物包 含層	29.4	—	6.5 (底径)	体部は上方に伸び、口縁部は「ノ」字形を呈する。口縁部内外部ナタ。体部外側は指痕を形成する。底盤は全て一部に擦摩斑痕を呈する。	淡灰色	砂粒を多量に含む。	良	瓦質	
3	ねり鉢	Bグリッド 瓦溜	31.6	—	6.2 (底径)	体部は上方で縁部と「C」の字形を呈する。口縁部は縦く、体部外側はナタケギ。底盤内面は全体に剥離のため清晰不分明。	乳灰色	砂粒を多量に含む。	不良	土師質	
4	擬鉢	Bグリッド	28.8	—	9.5 (底径)	口縁部は、西側次第に立ち上がり、口縁部には外方に張がれたれアリタツク。内面クロロ波形のヨコナ斜めに張り出せる。横幅は6本で6本を横並んでいる。	茶褐色	良好 砂粒を含む。	良好 好級	備前焼	
5	擬鉢	Aグリッド 水溜状 造構	28.5 (15.0)	—	12.0 (底径)	口縁部は上方へ内傾して立ち上がり、外側に3条の横筋がある。粘土は吹き上げて皮膜で内面にはクロロ波形を呈す。横幅は12条を半位としていて6.6mmを測る。	小茶色	精良	良好 好級	備前焼	
6	擬鉢	Bグリッド 造構面	28.2	—	5.0 (底径)	口縁部は上方へ内傾し、口縁部は外反して張る。内外部共斜めココナ。横幅はヘラ棒による施縫である。	黄褐色	器壁に多量の砂粒を認める。	良好 好級	信楽焼	
7	擬鉢	Aグリッド SD-3	22.5	—	4.7 (底径)	口縁部はくの字形を呈し、内面に深んだ斜面を有す。口縁部内外部はヨコナ斜め。体部内外部はクロロ波形を呈す。	暗紫色	精良	良好 好級	備前焼	

実測回 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
			口径 (底径)	器径	器高						
8	ねり鉢	Aグリッド SD 3	25.3	—	5.1 (残存高)	口縁部は内側へ強く内折し、口縁端部は丸く終る。口縁部外面は重ね縫のため灰色を呈する。体部内面ヨコヨコ。外面は指印等のオコナガで模擬的にハケ目を残す。 私に接着部を上げて底部。器内は9本を単化とする形で施錠される。	茶褐色	精良	良好	好	
9	擂鉢	Bグリッド 瓦溜	(16.6)	—	3.3 (残存高)	外縁は衝撃圧成形とテナカ向のヘタケズリを行なう。端部は下から上方への施錠のため灰色を呈する。体部内面ヨコヨコ。外面は指印等のオコナガで模擬的にハケ目を残す。 私に接着部を上げて底部。器内は9本を単化とする形で施錠される。	淡茶色	精良	良好	好	備前焼
10	擂鉢	Aグリッド 水溜状 造構	(10.8)	—	5.5 (残存高)	外縁は衝撃圧成形とテナカ向のヘタケズリを行なう。端部は下から上方への施錠のため灰色を呈する。体部内面ヨコヨコ。外面は指印等のオコナガで模擬的にハケ目を残す。 私に接着部を上げて底部。器内は9本を単化とする形で施錠される。	淡茶灰褐色 表面焼化	砂を 多量に 含む。	良		土師質
11	ねり鉢	Aグリッド 造物包 含層	(7.7)	—	2.5 (残存高)	外縁ともに衝撃圧成形の後ナナメ部には静止あたりを残す。	灰色	精良 砂粒を見 える。	良好	好	須恵質

4) 羽釜

実測回 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
			口径 (底径)	器径	器高						
1	足釜	Aグリッド SD 3	22.6	25.5	5.8 (残存高)	口縁部はやや内側して立ちあがり、端部は水平である。脚は斜めに下に付く。口縁部及び脚部ヨコナガ。内部全体はハケ目模様。	黒灰色	良好 砂粒を 多量に 含む。	良好		瓦質
2	羽釜	Bグリッド 瓦溜	21.4	27.0	6.6 (残存高)	内側する口頭部は3段に成形されている。口頭部内外斜め及び脚部は丁寧なヨコナガ調整。体部内面ハケ模様。体部外面は左から右へのヘタケズリ。	灰色	良好 砂粒を 多量に 含む。	良好		瓦質
3	羽釜	〃	22.3	28.1	7.5 (残存高)	内側する口頭部は4段に成形されていいる。口頭部全体傾斜でやや上向きに付けられている。口頭部内面斜め及び脚部はハケ目。以下斜め外側及び内面全体はヨコナガ。外表面は左から右へのヘタケズリ。	淡灰茶色 内部一色	砂粒、 砂體を 含む。	軟質		土師ローリング を受ける。
4	羽釜	〃	27.2	33.3	7.3 (残存高)	内側する口頭部はヨコナガにより3段に成形されている。口頭部内面斜め及び脚部はハケ目。以下斜め外側及び内面全体はヨコナガ。外表面は左から右へのヘタケズリ。	淡灰茶色 鷄部以下 墨色	砂粒を 含む。	良好	や や 軟質	半瓦質
5	利釜	Aグリッド 水溜状 造構	28.8	31.0	5.7 (残存高)	内側する口頭部は3段の凹面により4段が成形される。脚はやや上向きで入金足ヨコナガが施されている。体部内面はテナカ向の細ハケのヨコナガ。内面は單度のハケ模様。脚部以下に有機物の付着を認める。	淡灰茶色 鷄部以 下墨色	砂粒、 砂體を 多量に 含む。	良好		土師質
6	羽釜	Aグリッド 造構面	27.8	33.2	6.4 (残存高)	内側する口頭部はヨコナガにより2段に成形されている。内面接合部はハケ目。体部ナナメ。外表面はハケ模様。	乳白色 鷄部以下 墨色	1m大 長石 粒多量 に含む。	良好		土師質
7	羽釜	Bグリッド 造構面	31.6	38.2	7.2 (残存高)	内側する口頭部はヨコナガにより2段に成形されている。内面接合部はハケ目。体部ナナメ。外表面はハケ模様。	灰色	良好 砂粒含 む。	良好		瓦質

5) 中国製磁器

実測回 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
			口径 (底径)	器径	器高						
1	青磁碗	Aグリッド 水溜状 造構	11.9 (4.2)	—	6.4	本器さクロコ成形。体部は折衷方に立ち上がり、口縁部は尖りとなる。体部外面に網状走行する利痕模様、以下斜め部までハケ模様。内面裏裏も各部のヘタケズリ。	淡灰綠色 (光沢)	精良	堅	好	

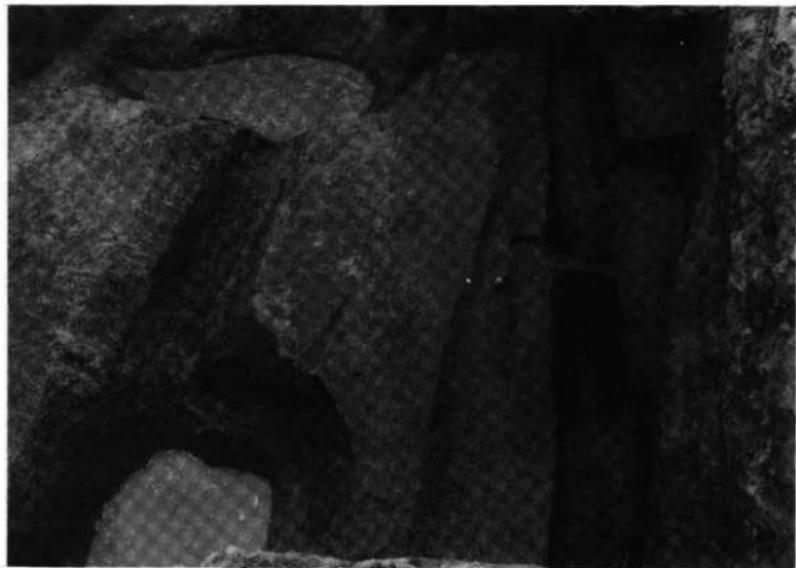
実測図 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
2	青磁碗	Aグリッド 水溜状 遺構	(6.8)	—	2.6 (底存高)	安定した高台で断面は凸形を呈する。内外面は円形に取り残されていて全体に細かい質入が入る。胎体は一部高台外側に見えかね疊付及び高台内部に疊付がある。	淡綠白色	精良	堅緻	高台部 完存
3	青磁碗	Aグリッド SD 3	(5.0)	—	3.4 (底存高)	水滴きのクロ形底。外表面はラケヅリの抹柄輪巻紋。内面は弧状の内襷と点突文。胎体は体部下半まで高台部は内外面とも露出である。	淡灰綠色	精良	堅緻	
4	白磁碗	Cグリッド 遺構面	13.7	—	—	口縁部の外側に折り返されて五瓣状に跡を作れる。内面及び体部外側上半まで灰白色の釉を施す。	灰白色 (光沢)	精良	堅緻	
5	青磁碗	Bグリッド 遺構面	16.6	—	—	体部下段で外折し、口縁部はやや内弯し、通幅は九くある。青灰色の釉がほぼ均一に施されている。全体に細かい質入が入る。	青灰色	精良	堅緻	
6	染付碗	Aグリッド 水溜状 遺構	(4.9)	—	1.5 (底存高)	内底面は中央の円孔を中心として絞りと規定される必ず描かれていた。高台部内面には「文鏡平造」の私が2束の纏織の中に發達の良い鳥羽で染付けられている。	白色 (光沢) ガラス質 (點入)	精良	堅緻	高台部 完存

6) 国產陶磁器

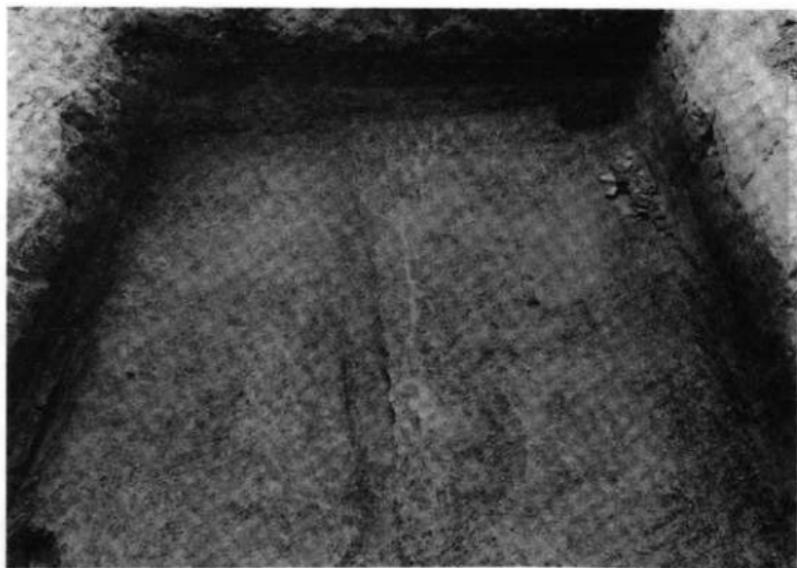
実測図 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
1	碗	Bグリッド 遺構面	8.4	—	—	ゆるやかなカーブを描いて立ち上がり口縁部は直角を呈する。白地に山灰色の釉を施す。外面には直徑3.2cmの丸い文中に斜めの文様が描かれている。	白灰色	精良	堅緻	
2	〃	Bグリッド 遺構面	(4.3)	—	3.6 (底存高)	裏面に広がった様、而もやや上にカーブを描いて立ち上がる。裏縁には2束、体部に1束を施付ける。内底面に輪廻の重ね模様を施す。	白灰色 (光沢)	精良	堅緻	
3	〃	Bグリッド 遺構面	(4.8)	—	2.7 (底存高)	白灰色の裏面に白灰色の釉を施す。外縁は青苔部と体部の境に発達の良い供託で1束の隠緋を染付けた。体部外側には側目文を施す。	白灰色	精良	堅緻	
4	〃	Aグリッド 第4層	(5.5)	—	3.6 (底存高)	白灰色の裏面に白灰色の釉を施す。高部から体部にかけつい鳥足式で2束の隠緋が施されれる。体部文様は不明。	白灰色 (光沢)	精良	堅緻	
5	〃	Bグリッド 遺構面	(4.0)	—	3.2 (底存高)	深灰色の底に褐色の釉を施す。外縁の高台部及び体部の隠緋を施す。口付部から体部にかけて2束の隠緋が施されれる。内外面とも細かい質入がある。	灰色 (光沢)	精良	堅緻	
6	〃	Aグリッド 第4層	(5.6)	—	3.9 (底存高)	裏縁から内底へ立ち上がる。内縁と外縁とに白灰色の釉を施す。外縁には1束の直緋が染付けられる。全体に粗い質入がある。	白紅色 (光沢)	精良	堅緻	
7	大目碗	Aグリッド 第4層	(4.0)	—	—	口口内と強度される。胎は明茶色で、体部下半および底台は底盤である。	明茶色 (一部黒) (緑色)	精良	堅緻	
8	唐津 大皿	Aグリッド 水溜状 遺構	(10.6)	—	4.0 (底存高)	切り出し高台。外縁は茶褐色の釉を染付外縁部で施す。内縁には2束の隠緋を中心として直緋と隠緋を印刷し、内へ底足を吊り込む。	灰茶色 (内面) 茶褐色 (外面)	精良 砂粒を散見する。	堅緻	



調査地近景（東より）



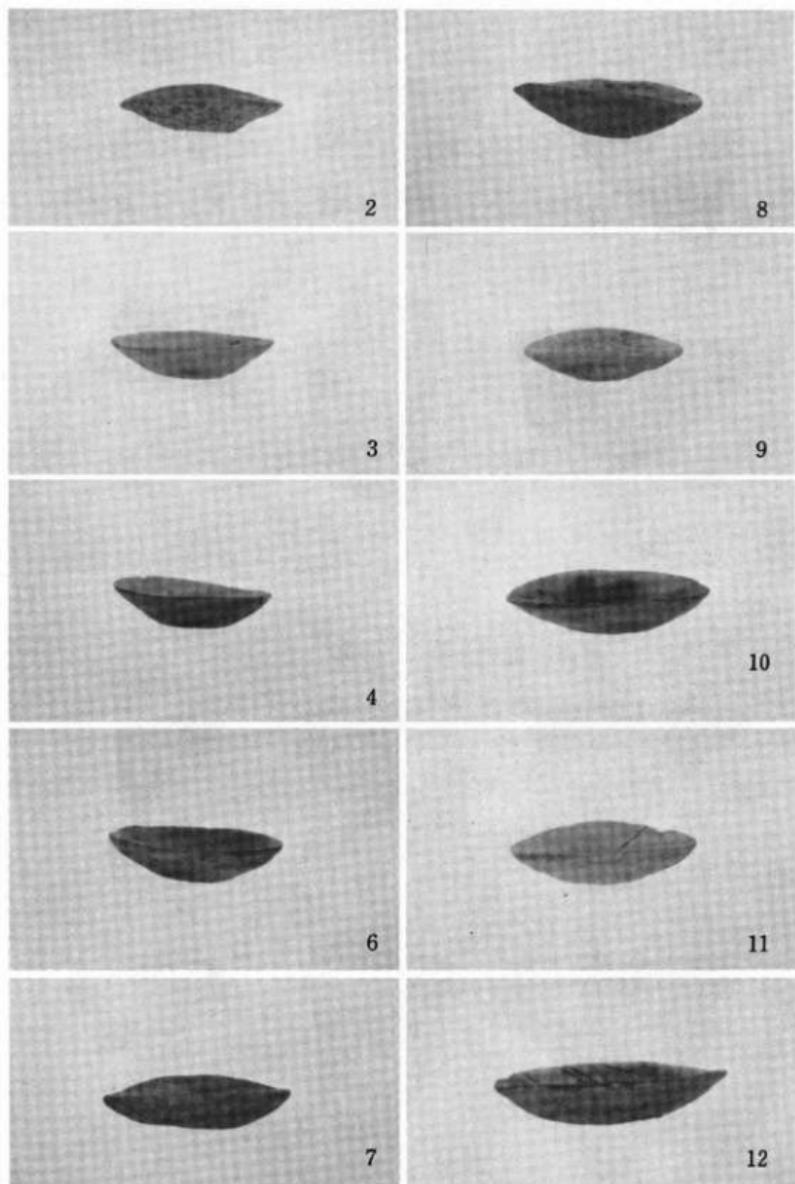
Aグリッド 遺構検出状況



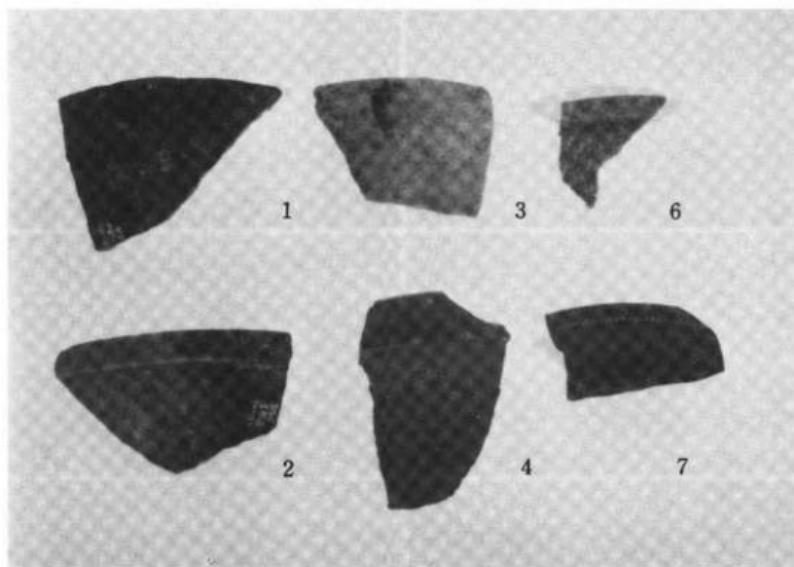
Bグリッド 遺構検出状況（北より）



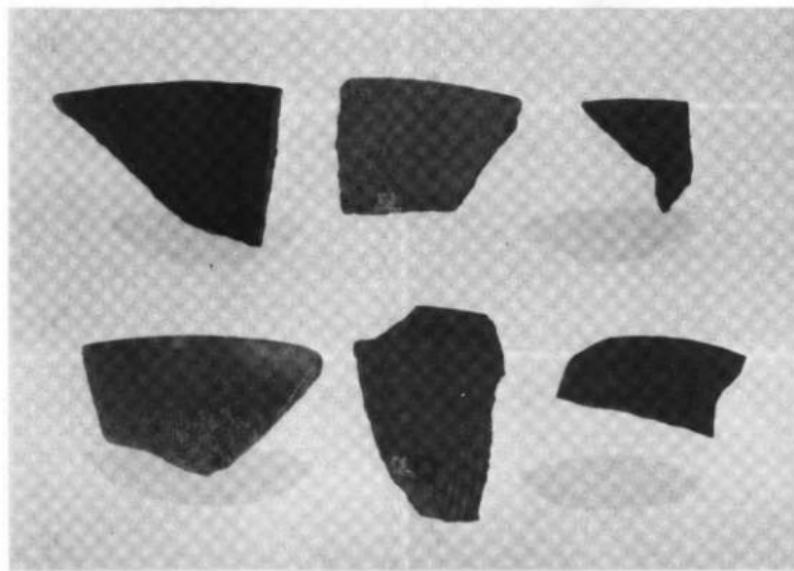
同上 瓦溜（東より）



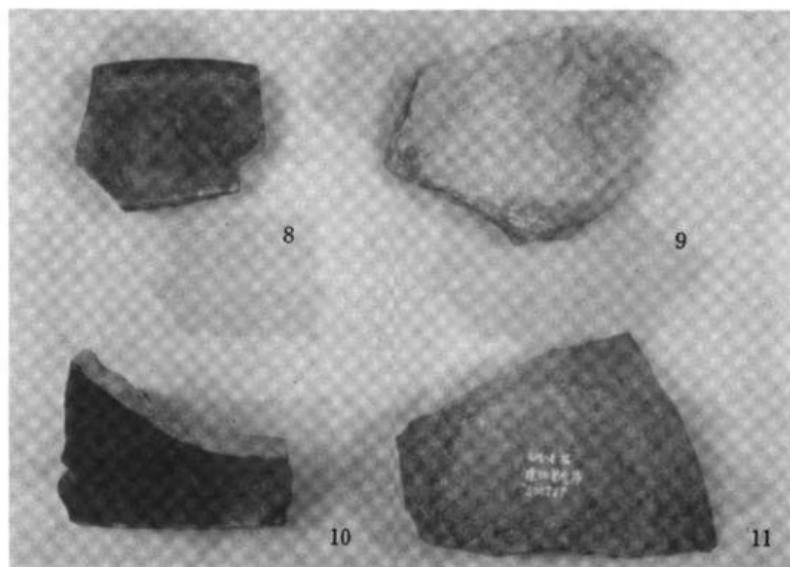
土師質小皿



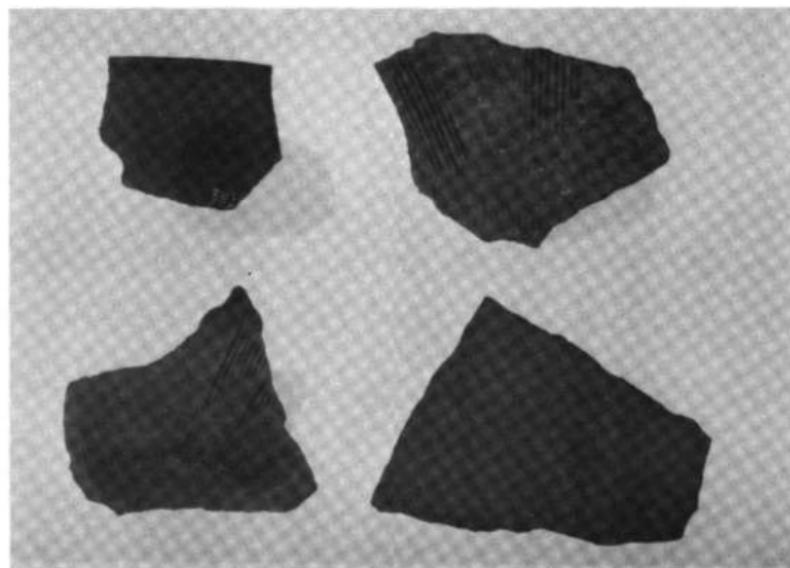
擂鉢・ねり鉢 I



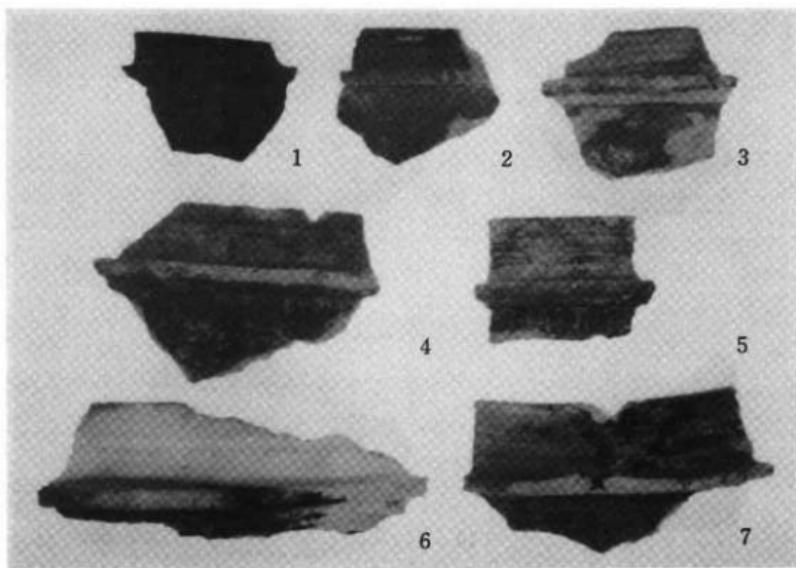
同上 (内面)



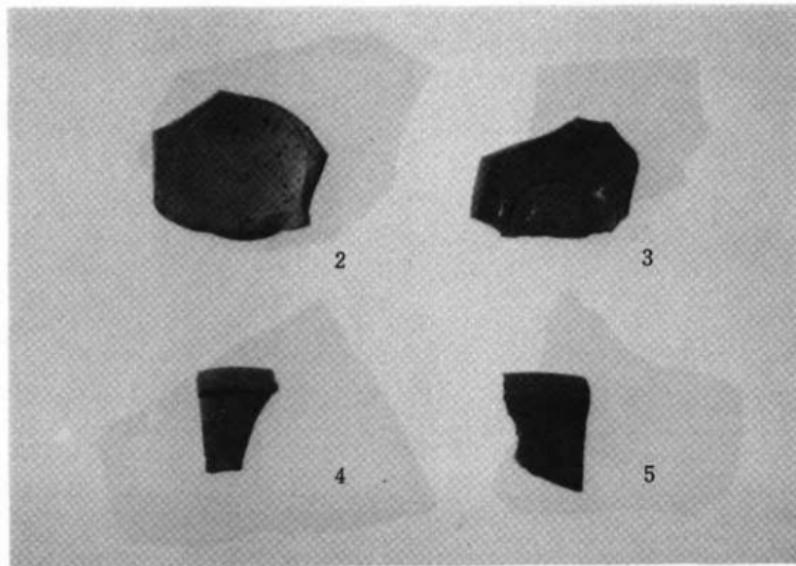
擂鉢・ねり鉢II



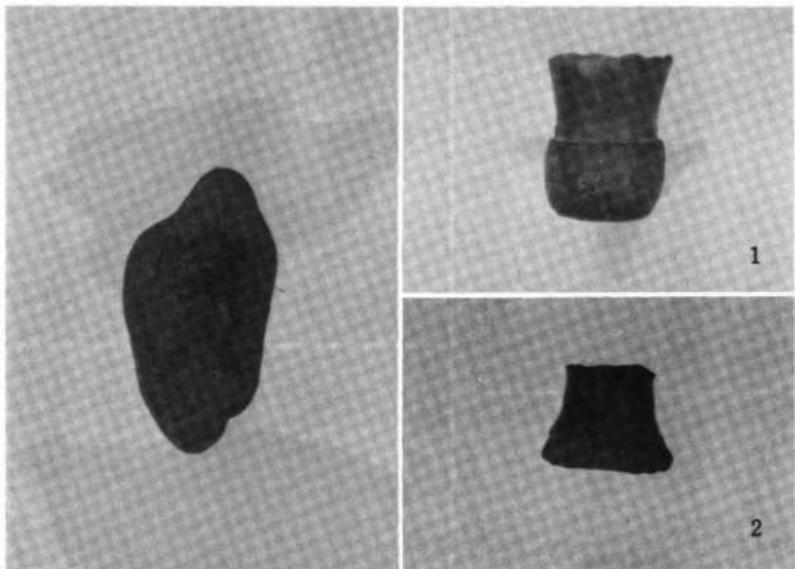
同上(内面)



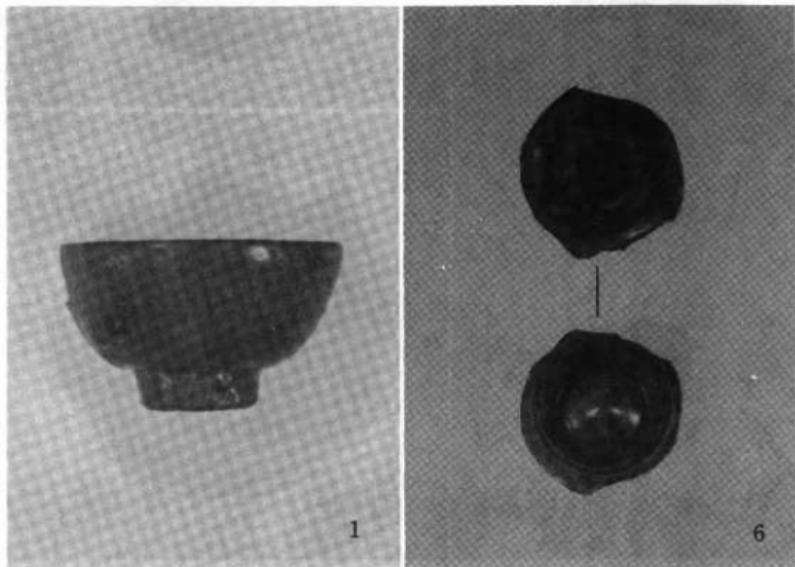
羽笠



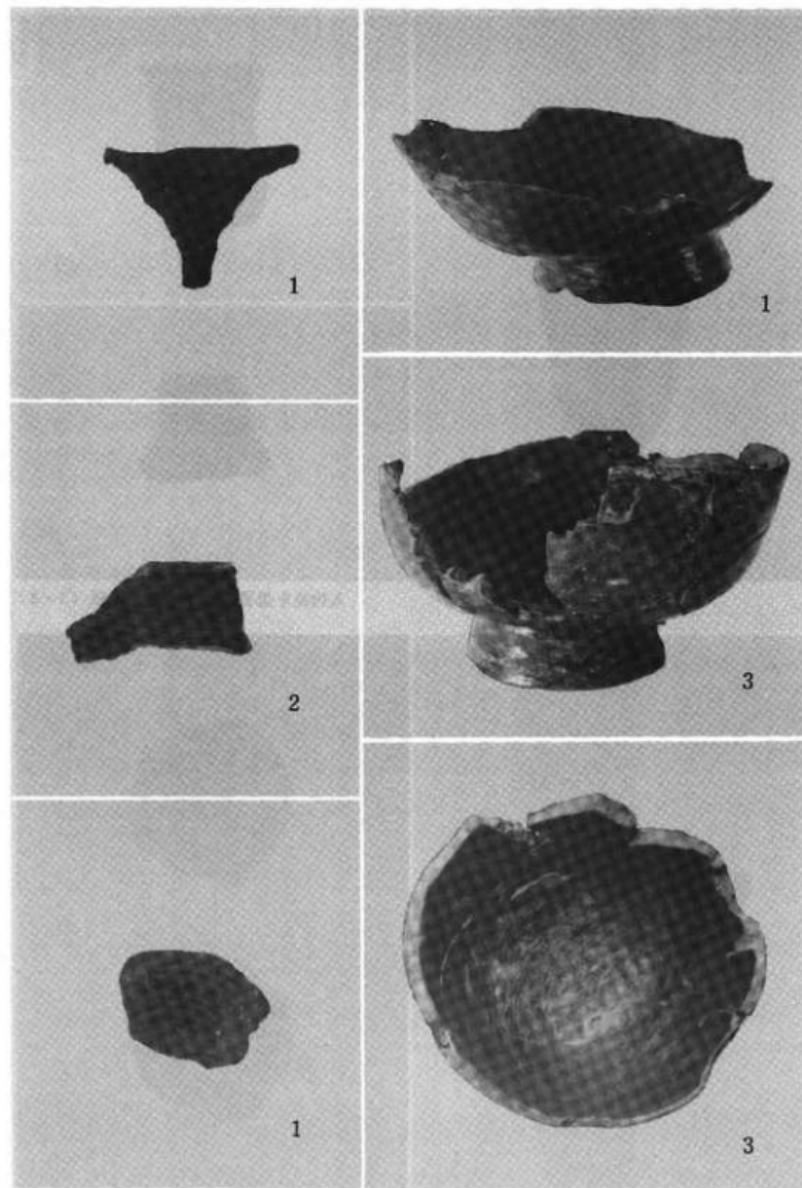
中国製磁器



人物像を墨書きした小石器 花瓶 (1・2)



中国製陶磁器 (1・6)



甕(1・2)・瓦(1)・漆器(1・3)

第2章 植松南遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市水畑町2丁目2番地において実施した、本田ベルノ八尾店建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年2月23日から3月10日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、高木真光が現地を担当した。なお、調査にあたっては、野田雅彦・西村公助・竹花田建設の協力があつた。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか野田雅彦・中野慶太(遺物実測)、成海佳子・中谷聖子(トレース)があたり、執筆はI・II・III・IV・VIが高木真光、V・VIIは成海佳子が担当した。

本 文 目 次

I	調査の目的と経過	41
II	調査の概要	42
III	層序	42
IV	検出遺構	43
V	出土遺物	47
VI	まとめ	51
VII	遺物観察表	58

挿図目次

図1 調査地周辺図	41
図2 グリッド設定図	42
図3 各ピット出土遺物実測図	43
図4 Aグリッド平断面図・Bグリッド断面図	45
図5 Cグリッド平断面図	46
図6 出土遺物実測図	49
図7 瓦実測図	50
図8 土鍾実測図	51

図版目次

図版1 Aグリッド 遺構検出状況	図版3 S D 2 出土遺物・土鍾
Aグリッド 碾集積検出状況	各ピット出土遺物
図版2 Aグリッド S D 2 遺物出土状況	
Cグリッド 遺構検出状況	

第2章 植松南遺跡(永畠町2丁目)

I 調査の目的と経過

植松南遺跡は八尾市中南部に位置する、古墳時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。今回の調査地である永畠町2丁目は、この遺跡推定範囲の北方約100mに位置し、八尾市が指定した埋蔵文化財包蔵地に含まれている。このことから、この地域一帯の埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査を行なった結果、土師器等を含む包含層が認められたため、昭和56年2月23日から3月10日にかけて、発掘調査を実施するに至った。

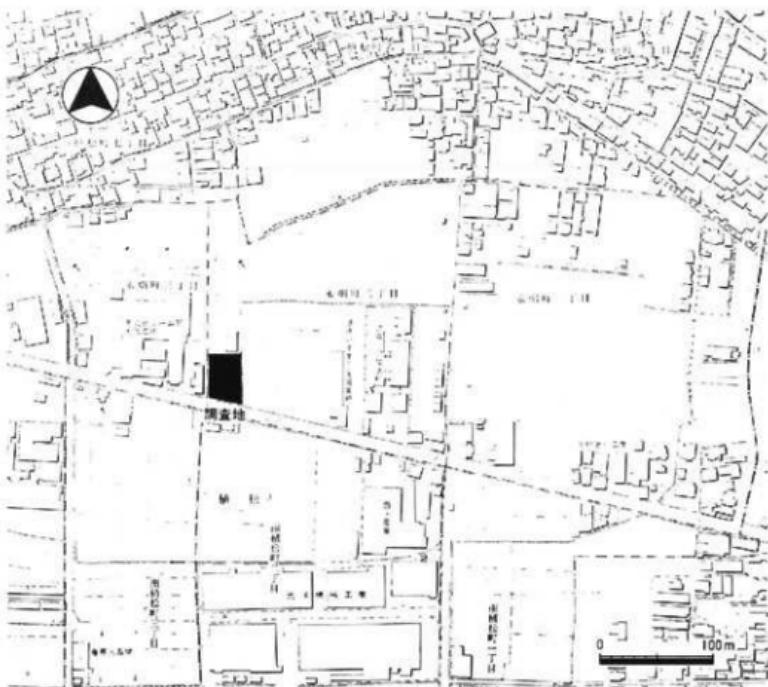


図1 調査地周辺図

遺跡は地形的には、旧大和川の支流の一つである長瀬川の自然堤防下を占地する。また、歴史的環境については、南東に老原遺跡(鎌倉時代)、南に木の本遺跡(弥生～古墳時代)、北東に龍華寺址(奈良～鎌倉時代)、北西に渋川庵寺(飛鳥時代)が近接する。
① ②
③ ④

II 調査の概要

調査対象地に3ヶ所のグリッドを設定した。グリッドはAグリッド(7m×7m)・Bグリッド(6m×6m)・Cグリッド(5m×11m)と付称し、A～Cグリッドへ順次調査を行なった。調査総面積は140m²を測る。

III 層序

Aグリッド東壁・Cグリッド西壁では、第1層盛土、第2層旧耕土、第3層暗褐色粘質土、第4層褐灰色粘質土I、第5層褐灰色粘質土II、第6層褐灰色粘質土III、第7層暗灰色粘質土(遺物包含層)、第8層淡灰色シルト(遺構ベース)が堆積し、これが調査地全体の基本層序と考えられる。一方、A・B両グリッドの南側では河川の氾濫のためか、若干の相違が観察された。

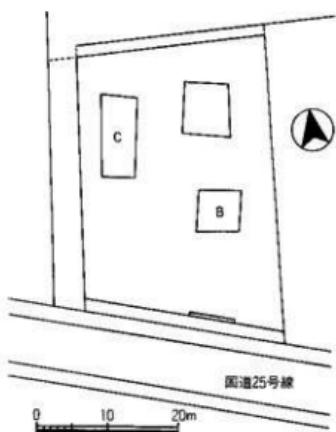


図2 グリッド設定図

Aグリッド南壁の東側は基本的な堆積であるが、西側では第5層・第6層および第7層の上面は、河川の氾濫により削平を受けている。その後は、ほぼ6層に分類できる土層が水平に堆積していることから、河川は機能を停止したものと考えられる。

Bグリッドの南壁も、第4層までは基本層序とはほぼ同様であるが、以下の土層はより複雑な堆積状況を示している。またここでは、遺物包含層である第7層暗灰色粘質土や、遺構のベースである第8層淡灰色シルトが認められなかつたことから、これらは河川の氾濫によって削平を受けたものであろうと推定される。

Cグリッドの南壁では、A・B両グリッド南壁で認められた河川の氾濫によると考えられる堆積の変化はみられなかった。

IV 検出遺構

Aグリッドで掘立柱建物・ピット・礫集積・溝・落ち込み、Cグリッドで溝・ピットを検出した。これらの遺構は第8層淡灰色シルトをベースにし、上層には厚さ約30cmの遺物包含層が被覆する。

両グリッドで検出した溝は東西方向のもの12条、南北方向のもの9条で相互に切り合うが、その前後関係については明確にできなかった。溝はその延びる方向によって、東西方向のものをS D a～S D Iとし、南北方向のものをS D 1～S D 9とした。

1) Aグリッド

掘立柱建物(S P 1～S P 5)

グリッド内および西壁で5個の柱穴を検出した。検出部の建物規模は東西2間(4m)、南北1間(1.3m)を測る。柱穴の掘形は径35～55cm・深さ30～40cmを測り、柱の径は18cm程度であろう。

S P 4から黒色土器椀(1・2)、須恵器の高台(3)、土師器椀(4・5)等の平安時代の遺物が出土した。

ピット(S P 6～S P 8)

掘立柱建物を構成する柱穴の他、3個のピットを検出した。S P 6・S P 7は径30cm前後の小型のもので、S P 2・S P 4の中間に並んでいる。S P 8はグリッドの北壁ぎわで検出したもので、径約40cmを測る。

S P 6からは土師器椀(6)・皿(8)、S P 7からは土師器椀(7)が出土した。

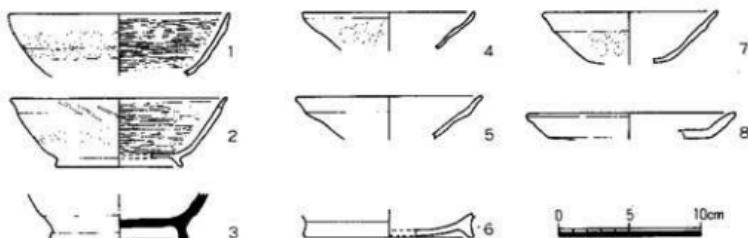


図3 各ピット出土遺物実測図

礫集積

グリッド北東隅で、東西約1m・南北約0.8mの範囲で、礫の集積する部分を検出した。礫は径約2~10cm程度のもので、当初は全体的に集積していたものと考えられるが、東壁ぎわを除いては、まばらに認められる程度である。礫に混ざった状態で、平瓦(図7-1)や土師器瓶(27)等の小片が少量出土した。

溝

東西方向のもの4条(SD a~SD d)、南北方向のもの3条(SD 1~SD 3)、あわせて7条の溝を検出した。

SD aはグリッドの北西隅でわずかに検出したのみで、詳細は不明である。SD b・SD c・SD dは幅30~60cm・深さ10~15cmを測り、グリッド中央部を平行に延びる溝である。遺物はSD b・SD dから土師器瓶(13・19)・平瓦(図4-2)等の細片が出土した。

SD 1は幅60~120cm・深さ20cmを測り、両側では2段の撮影をもつ。SD 2は幅40~80cm・深さ15cmを測り、内部より土師器瓶(15)・同瓶(30)等が出土している。ともに平行して、SD b~SD dと切り合う。SD 3はグリッド西側で肩を検出したのみである。

落ち込み

グリッド東側約1.5mの範囲に落ち込み状の遺構が認められた。グリッド北東隅で深くなり、調査区外へ至っている。内部から土師器瓶(11・20)が出土した。

2) Cグリッド

ピット(SP 9・SP 10)

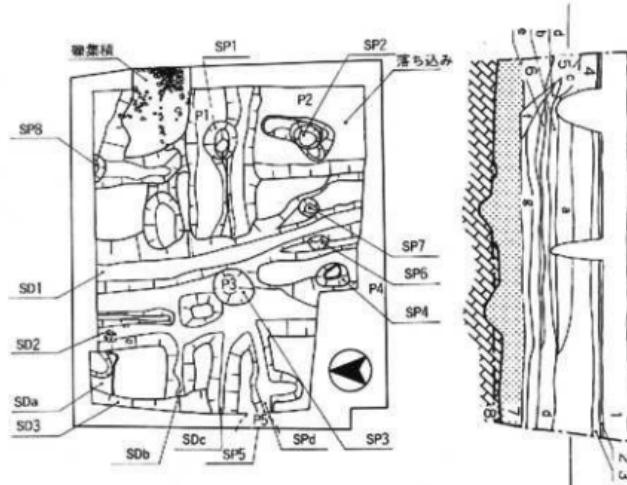
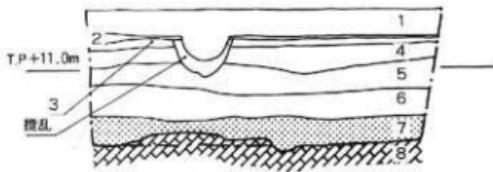
ともにグリッドの南側で検出し、約1mの間隔で位置する。径30~35cm・深さ20cmを測り、SP 10の底部には根石が認められたため、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。

溝

東西方向のもの8条(SD e~SD i)、南北方向のもの6条(SD 4~SD 9)、あわせて14条の溝を検出した。

SD e~SD iは幅30~60cm・深さ10cmを測る。SD e~SD iとSD j~SD lがまとまりをもって平行している。

SD 4・SD 5・SD 6・SD 8は幅30~80cm・深さ15~20cmを測るが、SD 7・SD 9はともにグリッドの西壁近くで東肩を認めたのみである。SD 4からは土師器瓶(10)が出土した他、少量の土師器片を認めた。



1. 盛 土	a. 淡褐色シルト	i. 灰青色粘質シルト	q. 灰青色粘土
2. 拼 土	b. 淡褐色粘質土 I	j. 橙褐色粘質シルト	r. 橙黃色シルト
3. 暗褐色粘質土	c. 淡褐色粘質土 II	k. 底面褐色粘土	s. 暗褐色粘土
4. 棕褐色粘質土 I	d. 淡灰褐色粘土	l. 茶褐色粘質シルト	t. 灰青色粘質シルト
5. // II	e. 棕色砂	m. 棕色粘質シルト	u. 青灰色粘土
6. // III	f. 灰色粘土	n. 灰色粘土	v. 灰色粘質シルト
7. 灰色粘質土	g. 灰色粘質土	o. 灰褐色粘土	w. 灰青色粘土
8. 淡灰色シルト	h. 淡褐色粘質土	p. 棕茶色粘質シルト	

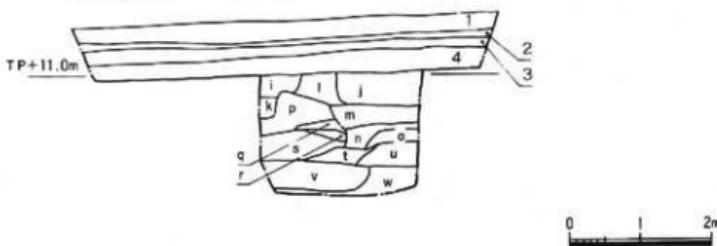


図4 A グリッド平断面図・B グリッド断面図

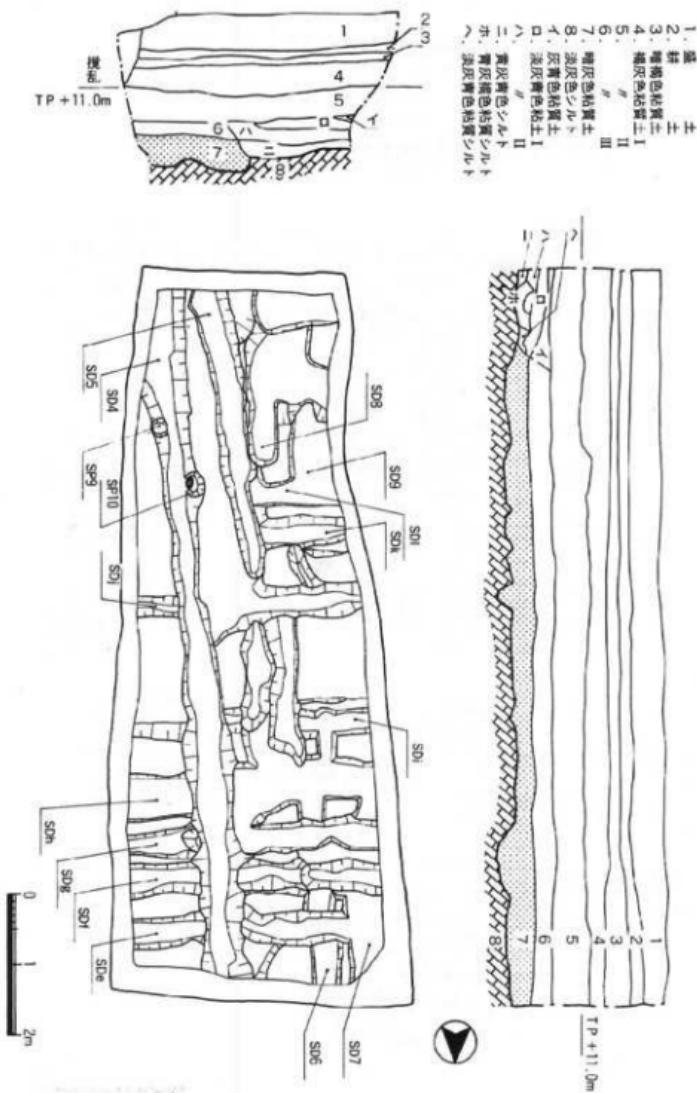


図5 Cグリッド平断面図

A・C両グリッドで検出した溝のうち、AグリッドのSDa～SDdとCグリッドのSDe～SDiは、位置的にみて同一の溝の可能性が考えられる。また、南北方向に延びるAグリッドSD1、CグリッドSD4・SD5は比較的規模が大きいため、他の溝とは別な機能を果たしていたものと考えられる。

V 出土遺物

土師器碗・皿・碟、黑色土器碗・皿、瓦、上鍍等がコンテナに1箱出土したが、ほとんどが細片で良好な資料ではない。ここでは遺物の概観を述べ、個々の特徴や出土位置等は、巻末の観察表に記す。

1) 土師器

碗(4～7・9～22)

図上で完形品近くにまで復元し得たものが3点のみで、他は口縁部や高台付近のみの小破片である。

体部の形態は、丸いカーブで口縁部まで連続して伸びるものは(9)1点のみで、他はすべて体部と口縁部の境に棱を持つ。それらはさらに体部に若干丸みをもつもの(10・11)と、直線的な体部をもつ(4・5・7・12～16)の2種類に分かれる。

口縁部をみると(4・9～12)は丸く、あるいはつまみ上げぎみに終わるが、体部と口縁部の境に棱をもつものほとんどは強いヨコナデによって外反する口縁部を作り出している。なかでも(15・16)はともに口径約20cmを測る大型のもので、体部と口縁部の境の棱は鋭く、口縁部は外反ぎみに直立している。とくに(16)は深い体部をもち、「鉢」と呼ぶべき器形であろう。

調整はほとんどが指頭圧成形の後体部にナデ、口縁部にはヨコナデが行なわれ、粘土紐接合痕や指頭圧痕の明瞭なものが多く、全体的に粗雑なつくりである。

高台のみの資料は7点を図示したが、形態・大きさともにバラエティーに富む。(6)は口径11.7cm・高台高1.1cmを測る大型の碗の高台で、大きさに比して器内は薄い。(17)は粗雑な作りで、端部には押しつけられたようにみ出す部分もあり、不揃いに終わっている。(18・19)は器内も厚くしっかりした作りで、重厚な高台が垂直に貼り付けられている。(20)は薄手のもので、精良な胎土を用い、丁寧な作りである。(21・22)は1cm以上の高い高台をもち、外反してハの字形に長く伸びる。

甕(25~32)

口径から、10cm前後の小型甕(25・26)と、15~20cm程度のもの(27・32)に分かれる。

2点の小型甕は屈曲部の棱が鋭く、体部の張りは少ないようである。口縁部は(25)が内弯ぎみで魁かいが、(26)は外反している。

他の甕のうち屈曲部の棱が鋭いものは(29)のみである。(27・28)の口縁端部は外傾する平凹面を有し、体部は直線的に強く張り、(27)の器肉は厚めである。(29)も直線的な体部をもつが張りは少ない。(30・31)は丸みをもって大きく開く体部をもち、口縁端部は水平に近い面を有して外へつまみ出るような形になる。外面体部には指頭圧痕を顕著に残す。(32)は口径21.7cmを測り、大型で厚手の甕である。口縁端部は内に巻き込むように肥厚しており、他の甕とは様相が異なっている。

皿(8・33・34)

口径約15cm、器高2cm前後と比較的大きさが揃っている。3点とも半たい底部から屈曲して口縁部に至る。(33・34)の底部には指頭圧痕が顕著にみられ、強いヨコナデによって体部との境に棱を作り凹みのある口縁部となるが、(8)には棱が認められず、口縁端部のみがヨコナデによって外反ぎみとなる程度である。器肉は(8)が厚く、(33・34)は薄い。

小型高杯(35)

根部に指頭圧痕の凹凸を残したままの粗雑な作りである。杯部を欠損し、根径6.2cm・残存高4.2cmを測る。

羽蓋(36)

復元口径30cm前後を測る。鉢は若干下がりぎみに伸び、下面に煤が厚く付着するが、細片のために詳細は不明である。

2) 黒色土器

椀(1・2・24)

すべて内黒のAタイプである。高台が残存するものは(2)のみである。(1・2)は掘立柱建物を構成する柱穴から、(24)はAグリッド包含層からの出土である。

(1)はやや直線的な体部から外へつまむ口縁部に至り、(2)はゆるやかなカーブで口縁部まで連続して伸びる点など形態に若干の差はあるものの、体部の傾きや体部内面に単位幅の細いヘラミガキを密に施し、口縁部内面に沈線を持つところなどは近似している。

それに対して(24)の形態は、体部が直線的に大きく開き、ヨコナデによる棱を作った後外反

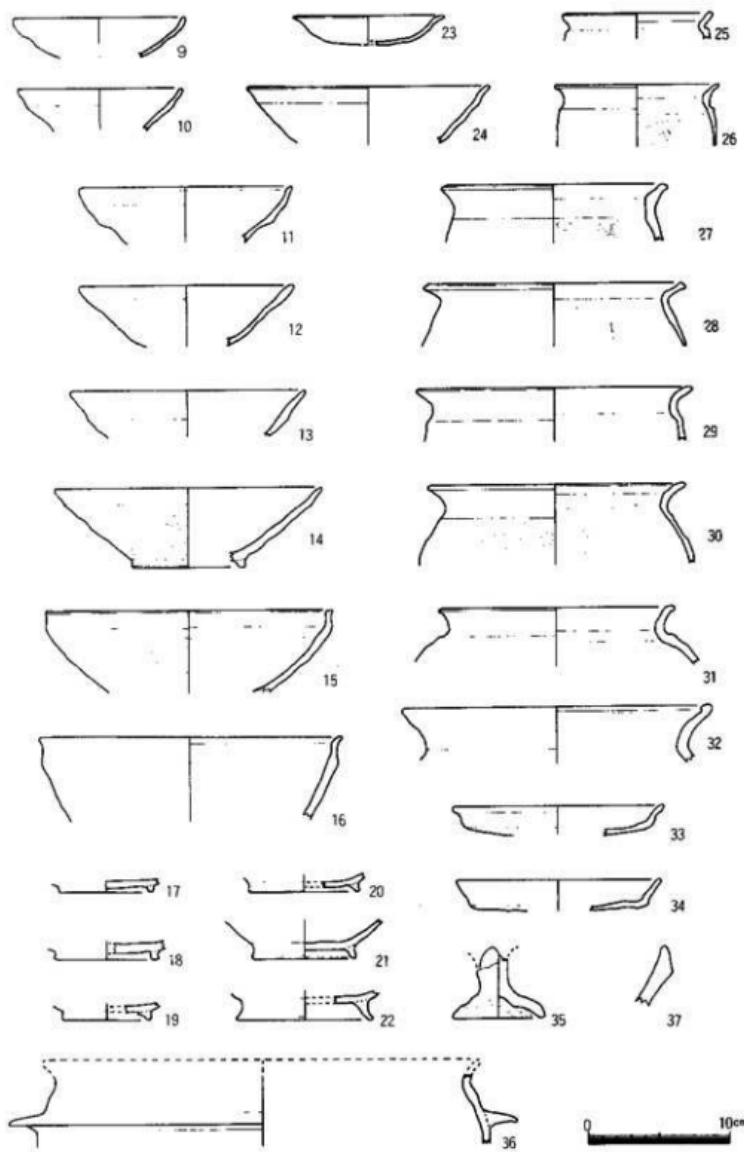


図6 出土遺物実測図

する口縁部に至り、口縁端部は外傾する面を作り出している。また調整をみると、体部内面のヘラミガキや、口縁部内面の沈線は行なわれていない。

このような形態・調整上の特徴の差から、(24)は(1・2)より新しい時期に比定できるものと考えられる。

小皿 (23)

両黒のBタイプである。口径10.4cmを測り外反する口縁部をもつが、器表が著しく磨耗しており、調整は不明である。⁽⁶⁾

3) 須恵器

壺(3)

高台付近のみの資料である。急角度で立ち上がる体部をわずかに残しているため、肩部まで直線的にのびる壺の底部であろうと考えられる。

4) 瓦質土器

こね鉢(37)

口縁部で厚みを増し、端部は断面三角形を呈する。小破片のため口径や傾きは不明であるが、体部外面にヘラケズリの痕跡がわずかに認められる。

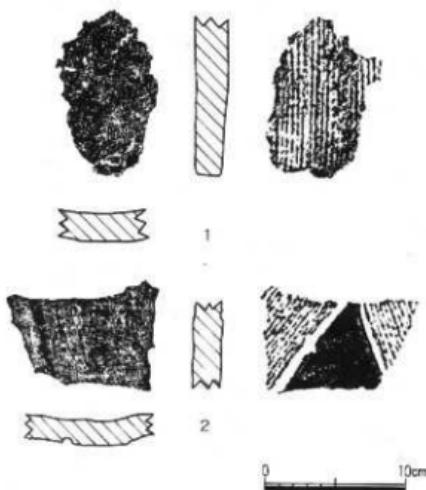


図7 瓦実測図

5) その他の遺物

瓦(1・2)

図示し得たものは平瓦2点のみであるが、他に細片が疊集積からも若干出土している。

(1)は四面に布目を残し、凸面にはタタキを施す。灰白色を呈し、2~5mmの長石や石英をきわめて多量に含む。焼成は甘く軟質で磨耗が進

む。礫集積からの出土である。

(2)は凹面に布目を残し、凸面は沈線によって斜方の区画をし、その外側にタタキ、中央にはナデを施す。青灰色を呈し、小砂粒を含む。焼成は良好堅緻である。S D b 出土。

土鍤(3・4)

小型の土鍤が完形で2点出土した。

(3)はAグリッド包含層出土のもので、長さ4.6cm・径1.5cmを測る。(4)はCグリッド包含層から出土したもので、長さ5.0cm・径1.7cmを測る。ともに径0.3cm前後の縦孔をもち、紐ずれの痕跡を顕著に残す。2点とも灰褐色～淡赤褐色の色調を呈し、胎土には2mm以下の長石・石英粒を多く含んでいる。

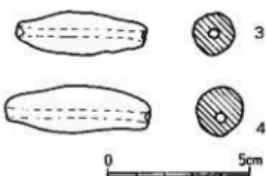


図8 土鍤実測図

VI まとめ

今回の調査では平安時代前期の掘立柱建物・溝群等の遺構や、土師器碗・甌等の遺物を検出した。溝は時期的な前後関係が明らかでないものの、ほぼ東西方向に延びるものと南北方向に延びるのが交差する状態で検出した。また、掘立柱建物を構成する柱穴のいくつかは、落ち込みや溝の中から検出したもので、落ち込みおよび溝と掘立柱建物との間に時期差が考えられる。しかし、各遺構の時期については、遺物から見てもほとんど差を見い出せず、短期間のうちに遺構が順次形成され、廃絶していくものと考えられる。

また、多数検出した溝は東西・南北方向に延びていることから、条里に規制された遺構としての可能性が強く、おそらく農耕に関する機能を果たしたものと推定される。大阪市長原遺跡の調査例では約30本の南北方向の小溝を検出しておらず、当遺構と時期的にも近似している。長原遺跡では生産区と居住区の土地利用が条里によって規制を受けながらなされており、近接する当遺跡においても同様の土地利用形態を示すものと考えられる。^①

出土遺物については各遺構および土層より出土し、時期は平安時代前期に限定される。これらの遺物によって遺構の時期を推定する手がかりを得たといえるが、良好な資料が少なく、磨耗を受けた小片が多くを占めている。

(注 記)

- 1 本誌所収 第7章
- 2 本誌所収 第3章
- 3 八尾市役所『八尾市史』1958年
- 4 前掲書③
- 5 田中琢「古代中世における手工業の発達(窯業)ー畿内」『日本の考古学VI』河出書房新社
1976年
- 6 ⑤前掲書
- 7 (財)大阪市文化財協会『大阪市立第8美術学校建設に伴なう長原遺跡発掘調査の現地説明
会』1982年

VII 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法従 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	土器器軸 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 12.0	直線的に伸び、内窓さみに立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は上方に丸く終わる。	外面 指輪圧成形の後口縁部のみヨコナデ。 内面 不明。	色調 乳白色 胎土 良 焼成 1mm前後の長石・石英を多く含む。 器表の消耗が著しい。
2	土器器軸 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 13.1	直線的に伸び、口縁部との境に稜を作った後外反する。口縁端部は丸く終わる。	外面 指輪圧成形の後体部ナデ、口縁部ヨコナデ 内面	色調 赤褐色 胎土 良好 焼成 長石・角閃石・長石を細粒で含む。
3	土器器軸 Aグリッド SP 7	口 径 12.2	比較的平坦な底面からゆるやかに内折して伸びる口縁部に至る。口縁端部は外反へつまみざみに終わる。	外面 指輪圧成形の後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。 内面	色調 基褐色 胎土 良 焼成 良好
4	土器器軸 Aグリッド SP 6	口 径 14.5	平緩な底部からゆるやかに外折して伸びる口縁部に至る。口縁端部は外反へつまみざみに終わる。	外面 口縁部ヨコナデ。他は不明。 内面	色調 赤褐色 (外面) 赤褐色 (内面) 胎土 良 焼成 0.5mm前後の長石・石英等を含む。 良好
5	土器器軸 Aグリッド SP 6	高台径 11.7 高台高 1.1	深く窪む底面から「ハ」の字形に開く高台で、選部は丸く終わる。	外面 不明。 内面	色調 赤褐色 胎土 良 焼成 1mm前後の長石・石英等を多く含む。 良 器表の消耗が著しい。
6	風呂器蓋 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	高台径 9.7 高台高 1.0	平たい底部から急角度で立ち上がり、体部に至る。高台は「ハ」の字形に開き、選部は水平な凹面を作る。	外面 回転ナデ。体部と高台の境にはヘラケズリの接縫が認められる。底部は静止ナデ。 内面 回転ナデ。底部は不定方向の静止ナデ。	色調 淡灰色 胎土 良 焼成 良 器表の消耗が著しい。
7	黒色土器軸 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 15.2 高台径 8.9 高台高 0.7 器 高 4.8	平緩な底部から弯曲して開いた後、直線的に伸びる。口縁部は先幅となり、選部は外反へつまみざみに終わる。高台は「ハ」の字形に外反して開き、底部は外側へ丸く終わる。	外面 指輪圧成形の後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。高台の結合は沿辺ナデによる。上半に部分的にヘラミガキが見られる。 内面 指輪圧成形の後体部微力方向に単位幅の削り跡をへらう。ガキ、口縁部に沈跡、見込み部にはヘラによる条状が見られる。	色調 淡赤褐色 (外面) 黒灰色 (内面・外周口縁部) 胎土 1mm前後の長石・石英を含む。 焼成 良 器表の消耗が著しい。
8	黒色土器軸 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 15.5	ゆるやかなカーブを描いて開いて開き、口縁部に至る。口縁部は尖りざみに丸く終わる。	外面 指輪圧成形の後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面 指輪圧成形の接縫方向に単位幅の削り (約 2mm) 断面をヘラミガキ。口縁部に沈跡が見られる。	色調 淡褐色 (外面) 黒灰色 (内面・外周口縁部) 胎土 良、右美・角閃石・雲母を粗粒で含む。 焼成 良 外周に運行者か

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒度・焼成・備考
9	上部器底 Aグリッド 遺構Ⅱ	口 径 12.0	ゆるやかなカーブを描いて伸びた後内側さみに立ち上がる口縁部に至る。口縁底部は丸く終わる。	外側 指捺圧成形の後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面	色調 淡木質色 粒度 良、器身の部分を多く含む。 焼成 良。
10	土師器底 Cグリッド SD 4	口径深 11.6	直線的に伸びた後内寄りし、口縁部に至る。口縁底部はつまみ上げぎみに丸く終わる。	外側 指捺圧成形の後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面	色調 淡褐色 粒度 良、径3mmの花崗岩、0.1~3mmの長石含む。 焼成 良好。
11	土師器底 Aグリッド 落ち込み	口 径 14.8	直線的に伸び、口縁部との境に後を引いた後内寄りして立つ。口縁底部はわずかに外へつまんで終る。	外側 指捺圧成形の後口縁部ヨコナヂ。 内面	色調 淡赤茶色 粒度 良 焼成 良
12	土師器底 Aグリッド SD 2	口 径 15.0	底部から弓曲して開いた後よっすぐ伸び、先太となって丸く終わる縁部に至る。	外側 指捺圧成形の後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面	色調 淡褐色(外側) 淡木質色(内面) 粒度 良 焼成 良好。 口縁部内外面に塗付層。
13	土師器底 Cグリッド SD 6	口 径 16.5	体部との境に棱を持ち、外反する口縁部。口縁底部は先細となり丸く終わる。	外側 指捺圧成形の後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面	色調 淡褐色 粒度 1mm前後の長石を多く含む。 焼成 良好。
14	土師器底 Aグリッド 包含層	口 径 18.8 高さ径 1.8 高さ高 0.6 器 高 5.6	底部から直線的に伸び、口縁部との境にゆるい棱を作った後外反する。口縁底部は丸く終わる。高さの範囲は逆尖形で直立に下る。	外側 指捺圧成形、ヘラケズリの後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面 高さの複合はユビナヂによる。	色調 茶褐色 粒度 石英をわずかに含む。 焼成 良 内面口縁底部以下約3cmのところまで塗が薄く付着する。
15	土師器底 SD 2	口 径 20.2	ゆるやかなカーブを描いて伸び、口縁部との境に棱を作って直立する。口縁底部は水平な四面となる。	外側 指捺圧成形、ヘラケズリの後体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。 内面 外面には粘土の接合痕が明瞭に残る。	色調 淡茶褐色(外側) 淡赤褐色(内面) 粒度 0.5~2mmの花崗岩、2mm前後の長石・角閃石、雲母含む。 焼成 良好。 外側全体に塗付層。
16	土師器底 Aグリッド 包含層	口 径 20.2	全角度で直線的に伸び、口縁部との境に棱を作って直立する。口縁底部は外反して丸く終わる。	外側 口縁部のヨコナヂ以外不明顯。体部には粘土の接合痕が見られる。 内面 体部ナヂ、口縁部ヨコナヂ。	色調 淡木質色(外側) 淡褐色(内面) 粒度 良、2mm前後の石英認められる。 焼成 良。 外側表面の焼耗者しい。

番 サ サ	基 準 上 位 置	法 規(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粘土・焼成・備考
17	上部器柄 高台低 高台高	6.5 0.4	高台は直立に貼り付けられ、断面は「U」字形。端部は丸く終わるが無い。体部の器壁は厚い。	外側 内面 高台の接合はユビナゲによる が他の接合は不明。	色調 淡黄色 粘土 良 焼成 良 表皮剥離する。
Aグリッド 包 合 層					
18	土師器柄 高台低 高台高	7.2 0.7	高台は直立に貼り付けられ、断面は直立形。端部は水平な平面を成すが無い。体部の器壁は厚い。	外側 内面 高台の接合はユビナゲによる。 高台内側の接合部は明瞭である。 ナデカ	色調 暗茶褐色(外側) 淡黄色(内面) 粘土 良 焼成 良好
Cグリッド 包 合 层					
19	土師器柄 高内低 高台高	6.6 0.6	直立に貼り付けられ、断面三角形を呈する高台。端部は外へわずかにつまむ。	外側 内面 ナデ。高台の接合はユビナゲによる。高台内側には接合痕が明瞭に見られる。	色調 暗茶褐色 粘土 良 焼成 良好
Aグリッド Sド4					
20	上部器柄 高台低 高台高	8.7 0.7	わずかに突出した端部から、「ハ」の字形に開く断面台形の高台。端部は外側する長い平坦部となる。	外側 内面 ナデ。高台の接合はユビナゲによる。高台内側には接合痕が明瞭に見られる。	色調 暗褐色 粘土 精良 焼成 良好
Aグリッド 落ち込み					
21	土師器柄 高台低 高台高	7.3 3.0	平坦な底部から突出して伸びる体部。高台は直立に下った後外反し、端部は外側へ突りざみに終わる。	外側 内面 ナデ。高台の接合はユビナゲによる。	色調 淡茶褐色 粘土 精良。角閃石を細粒で含む。 焼成 良好 高台・体部の一部に焦げがわずかに付着する。
Cグリッド 包 合 层					
22	上部器柄 高台低 高台高	9.4 1.2	平坦な底部から直立に下った後、外反して伸びる高台。端部は外側へ丸くつまんで終わる。	外側 内面 ナデ。高台の接合はユビナゲによる。	色調 黒褐色 粘土 精良。角閃石を細粒で含む。 焼成 良
Aグリッド 包 合 层					
23	褐色土器小品 口 径	10.4	比較的平たい底部からゆるやかなカーブを描いて伸びた後、外反する口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。	外側 内面 不明。	色調 黑灰色 粘土 0.5~2mmの長石・石英を多く含む。 焼成 良 器表の磨耗が進む。
Aグリッド 包 合 层					
24	黒色土器柄 L1 高	17.0	底部を外傾するが、一貫して後退線的に伸び、口縁部との境にゆるい線を作った後外反する。口縁部は外傾する長い弧を成す。	外側 内面 指印或形の様体部ナデ、L1 株茎ヨコナデ。	色調 黑褐色(外側) 泥灰色(内面) 粘土 1~2mmの長石・石英等含む。 焼成 良
Aグリッド 包 合 层					

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・編号
25	上部器腹 Aグリッド 包含層	口 径 10.0	体部と口縁部との間に深い棱を作り、内凹ぎみで伸びる。口縁端部は外側する面を成す。	外面 口縁面のヨコナナメ以外不明。 内面	色調 淡赤褐色 粘土 良、1mm以下の長石、石英を含む。 焼成 良 表面の磨耗が進む。
26	土師器腹 Aグリッド 包含層	口 径 11.7	張りの少ない体部から口縁部との間に棱を作った後早く屈曲して伸びる。口縁端部は水平な面を成し、外側へつまんで終わる。器壁は薄めて深い。	外面 口縁部ヨコナナメ。体部には指圧痕が見られる。 内面 口縁部ヨコナナメ。体部ナナメ。 内面	色調 淡黄褐色(外面) 暗赤褐色(内部) 粘土 1~2mmの長石・長石・石英多く含む。 焼成 良 表面の磨耗を極める。内面の一部に爆付有。
27	七輪器腹 Aグリッド 堆積層	口 径 15.2	体部からくの字ちかくに加曲する口縁部。口縁端部は外側する面を成し、下方にわずかに肥厚して終わる。器壁は厚めである。	外面 口縁部、屈曲部ヨコナナメ。体部には指圧痕がわざかに見られる。 内面 口縁部ヨコナナメ。体部横方向へく、口縁部、屈曲部はヨコナナメにより凸凹となる。	色調 暗赤褐色 粘土 1~3mmの花崗岩・長石・石英多く含む。 焼成 良 表面磨耗する。
28	上部器腹 Cグリッド 包含層	口 径 18.0	張りの少ない体部からくの字ちかくに屈曲して外側する口縁部。口縁端部は外側する四面を成す。器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナナメ。体部に指圧痕が見られる。 内面 口縁部ヨコナナメ。体部ヘラケスリの後ナナメ。	色調 茶褐色 水褐色(中段) 粘土 1~3mmの長石・石英を含む。 焼成 良 表面磨耗する。
29	土師器腹 Aグリッド 堆積層	口 径 19.0	体部からやよい形をつくり、丸く外反する口縁部。口縁端部は薄く尖って終わる。器壁は薄い。	外面 口縁部ヨコナナメ以外不明。 内面	色調 暗赤褐色 粘土 1~2mmの石英を多く含む。 焼成 良 口縁部内面上方に爆付有。
30	上部器腹 Aグリッド SD2	口 径 18.6	内窓して聞く体部から丸く屈曲し、外反する口縁部。口縁端部は丸く終わる。	外面 口縁部ヨコナナメ。体部に指圧痕が見られる。 内面 体部ヘラケスリ(左下→右上)の後ナナメ。口縁部ヨコナナメ。	色調 茶褐色 粘土 1mm前後の長石・石英多く含む。 焼成 良 器の付け根がわざかに認められる。
31	土師器腹 Cグリッド 包含層	口 径 16.5	張りの強い体部から丸く屈曲し、上方へ外反する口縁部。口縁端部は水平な面を成し、外側につまんで終わる。	外面 指圧痕成形の後体部ナナメ。口縁部ヨコナナメ。 内面 口縁部ヨコナナメ。体部ヘラケスリ。	色調 淡赤褐色(外面) 淡青色(内部) 粘土 2mm前後の長石・1mm前後の長石多く含む。 焼成 良
32	土師器腹 Aグリッド 包含層	口 径 21.7	体部から丸く屈曲する口縁部。口縁端部は水平な面を成し、内窓に肥厚する。	外面 ヨコナナメ。 内面	色調 茶褐色 粘土 2mm以下の長石・石英等多く含む。 焼成 良

番号	器 出上位地	注 量(cm)	形 態の特 徴	手 法の特 徴	色調 胎土・焼成・備考
33	土師器皿 Cグリップ 包含層	口 径 14.8	わずかに圍みを作る底部からゆるい 板を買って外反し、口縁部に至る。 口縁端部は外側へわずかに肥厚し丸 く終わる。	外面 指印圧成形の後体部ナデ。口 縁部ヨコナデ。口縁部外面は 強いナデにより内面を壓する。 内面	色調 赤褐色 胎土 良、露母を含む。 焼成 良好。
34	土師器皿 Aグリップ 包含層	口 径 14.5	平たい体部から屈曲して一旦丸く 彎曲した後、斜めに聞く口縁部。口 縁端部は丸く終わる。	外面 指印圧成形の後体部ナデ。口 縁部ヨコナデ。屈曲部外面は 強いナデにより枝をもつ。 内面	色調 浅水緑色 胎土 良、石英・長石をおず かに含む。 焼成 良好。
35	土師器 小型高杯 Aグリップ 包含層	瓶形态 6.2	直立する中央の柱状部から内曲して 聞く複数に統く。端部は内側して丸 く終わる。	外面 下げくねによって作られ。指 印圧成形が明顯に見られる。 内面	色調 淡黄色～明褐色 胎土 良、2mm前後の石英を多量 に含む。 焼成 良好。
36	土師器皿 Cグリップ 包含層		内窓して伸びる鉢付込みの破片。 わずかに彎曲する口縁部を残す。 鉢は先端となる。	外面 ナデと思われる。 内面	色調 赤褐色 胎土 3～4mmの石英を多量 に含む。 焼成 良 器下面に爆付着。
37	玉茎こし鉢 Aグリップ 包含層		斜めに聞く口縁部で、外面には襷を つくった後直立する。口縁端部は丸 く終わる。	外面 体部ヘラケスリ。口縁部ヨコ ナデ。 内面 ヨコナデ。	色調 黒灰色 胎土 褐灰色(中核) 石英・長石をわずかに 含む。 焼成 良



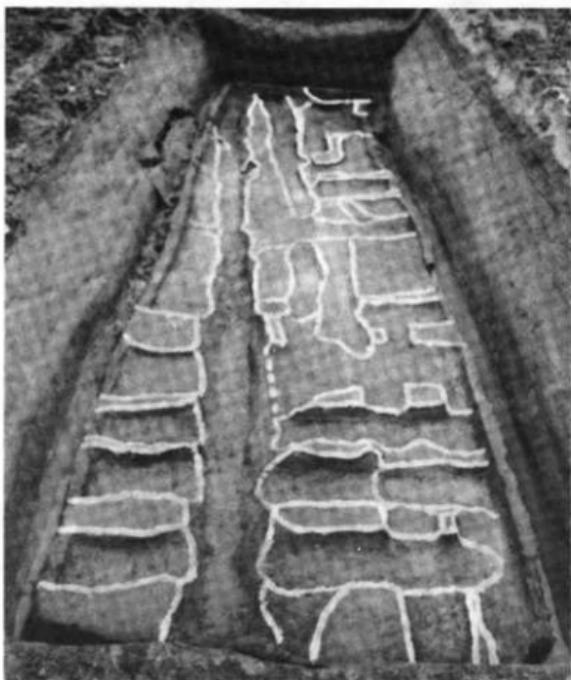
Aグリッド 遺構検出状況



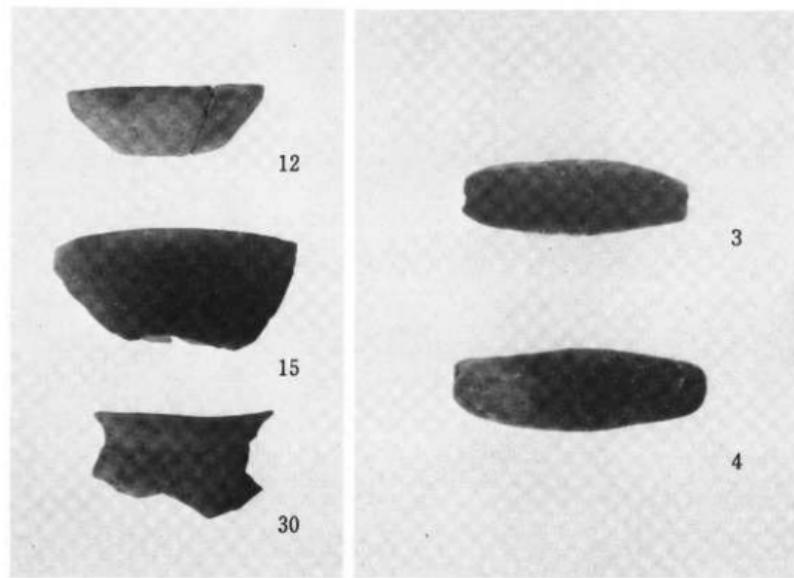
Aグリッド 砂集積検出状況



A グリッド SD 2 遺物出土状況

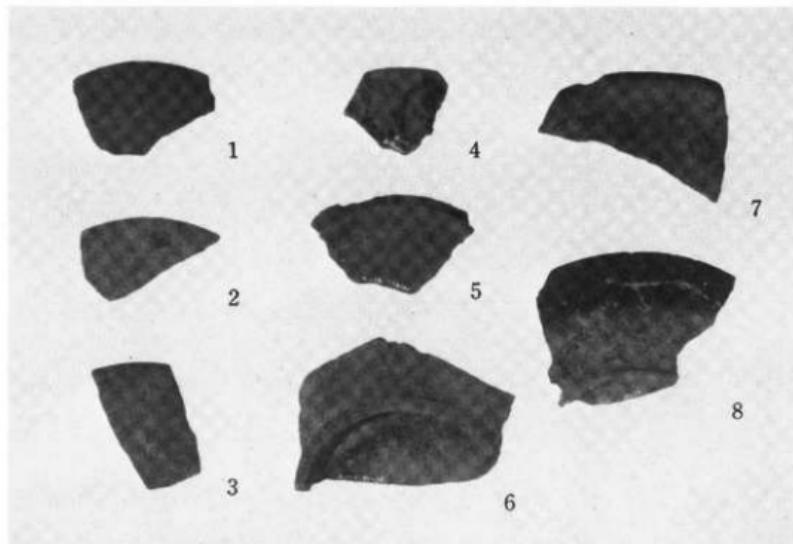


C グリッド 遺構検出状況



SD 2 出土遺物

土錐



各ピット出土遺物



第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市南木の本4丁目5~9番地において実施した、株式会社ニチイ
店舗建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年3月26日から4月11日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、原田昌則が現地を担当し
た。なお、調査にあたっては、西村公助・野田雅彦・駒沢敦・林三雄・(有)花
田建設の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか成海佳子(遺物実測・トレース)が
行なった。執筆は主に原田昌則があたり、IV(弥生式土器)・VIIについて成海
佳子が担当した。なお、V(製塙土器の胎土観察)は、奥田尚(八尾市刑部小学校
教諭)に執筆を依頼した。

本文目次

I 調査の目的と経過	65
II 組序	67
III 検出遺構	67
IV 出土遺物	70
V 製塙土器の胎土観察	88
VI まとめ	89
VII 出土遺物観察表	91

挿 図 目 次

図1 調査地周辺図	65
図2 トレンチ設定図	66
図3 土層模式図	67
図4 平面図	68
図5 S E 1 断面図	69
図6 S D 3・S E 2 出土土師器実測図	70
図7 壱文様模式図	71
図8 S D 2・S E 1 出土弥生式土器実測図	72
図9 包含層出土弥生式土器実測図	73
図10 土師器実測図1	75
図11 土師器実測図2	77
図12 須恵器実測図1	79
図13 須恵器実測図2	80
図14 ヘラ描き記号文拓影	81
図15 砥石実測図	82
図16 製塙土器実測図	83

挿 表 目 次

表1 製塙土器の胎土観察表	88
---------------	----

図 版 目 次

図版1 調査地全景	図版5 土師器
S P 6 杜根検出状況	
図版2 S K 1 検出状況	図版6 須恵器
S B 1・S D 3 検出状況	
図版3 弥生式土器	図版7 須恵器
図版4 土師器	図版8 製塙土器

第3章 木の本遺跡(南木の本4丁目5~9番地)

I 調査の目的と経過

八尾市の南西部に位置する木の本地域一帯は、鉄道等の交通機関と遊離されている関係や、八尾飛行場によって南北に切断されているといった諸条件から、比較的開発の遅れた地域であった。しかし、昭和55年11月に地下鉄谷町線が八尾南駅まで延長されたことを境に、交通網が整備され、地域一帯は急激に開発のテンポを速めつつある。このような情勢下、地域の一画である南木の本4丁目5~9番地に、株式会社ニチイより仮称「ニチイ八尾南店」の出店計画が八尾市教育委員会文化財室に提出された。当教育委員会文化財室は、南木の本地区は遺跡としては未認知であるが、八尾南遺跡の北東に位置することや、計画予定地が式内社の樟本神社に近接することから、試掘調査の必要性があるものと判断した。

試掘調査は昭和56年3月9日から予定地内6ヶ所で実施した結果、GL-3.0m地点を中心とする弥生時代中期前半から古墳時代後期の遺物包含層が認められ、付近一帯が遺跡であることが確認された。当教育委員会文化財室はただちに文化庁へ遺跡発見届を提出するとともに、発掘



図1 調査地周辺図

調査が必要である旨をニチイ側へ伝え、「文化財保護法」に基づく適切な措置を講ずる必要性を明らかにした。その結果、基礎杭の構築が予定されている地点3ヶ所にA～Cの各トレンチを設定し、発掘調査を実施することが両者間で合意された。

調査は昭和56年3月26日よりオープンカットの方法で開始したが、調査が進行するにつれ、遺構ベースが軟質なシルト層で、しかも涌水層に一致することから、壁面の保持にも支障をきたすことが指摘された。そこで、急速壁面を補強するとともに、以後の調査方法についての協議が行なわれた。その結果、現状のままでの調査継続は危険であると考えられたため、大阪府教育委員会を含めた三者で以後の調査方法や工法の再検討についての協議が重ねられた。協議では、計画されている基礎杭が造構面に達するため、設定したトレンチすべてを調査したとしても、未調査部分の造構が破壊されることが指摘された。そのため、改めて全域に鋼板を打って調査を継続するか、設計変更をして遺構を保存するかの2点を選択することが余儀なくされた。このことから当初計画された建物構造を変更し、基礎杭の深度もG.L. - 3.0m以内に抑え、遺構を保存する処置が三者間で合意された。

以上から北側に設定したAトレンチ(5m×50m)は東側40mを調査記録し、西側10mについては埋め戻して遺構の保存を行なった。

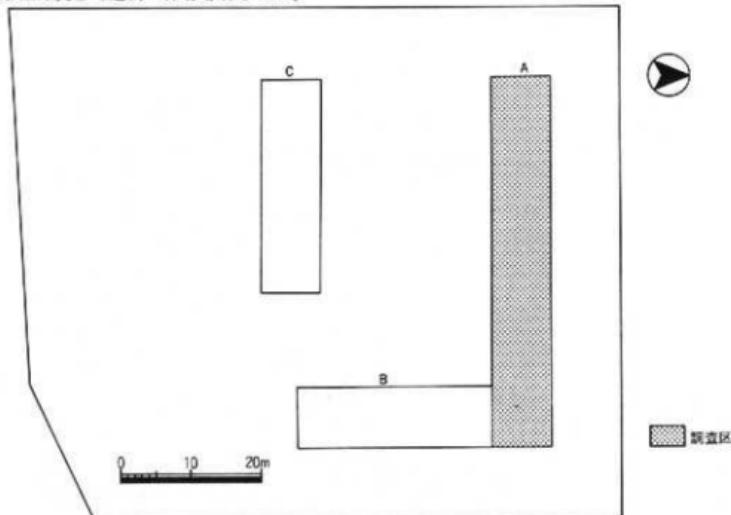


図2 トレンチ設定図

II 層序

東西40m、南北5mの範囲内ではあるが、比較的安定した土層の抜がりを知ることができた。基本的には上層から第1層盛土(90~110cm)、第2層耕土(14~20cm)、第3層灰青色砂混じり粘質土(30~34cm)、第4層灰褐色粘土(42~52cm)、第5層灰色粘土(27~38cm)、第6層暗灰色粘土(40~60cm)、第7層灰青色シルトと続いている。遺物は第4層以下で確認している。

第4層からは土師質土器・瓦器等の中世遺物が細片で出土している。

第5層からは古墳時代後期に属する土師器・須恵器等が出土するが、すべて細片で量も少ない。

第6層は主な包含層で、弥生時代中期前半から古墳時代中期後半に至る遺物が混在して出土しているが、量的には古墳時代中期に属するものが大半を占めている。また、この層は植物遺体を多量に含むことから、古墳時代中期後半以後は全域が帶水し、漸移的な土層の堆積があったものと考えられる。

第7層は弥生時代中期前半と古墳時代中期後半の遺構面のベースになる土層で、少なくとも1m以上の堆積が認められる。

なお、第7層上面(遺構面)は現地表から約-3m地点で、OP+8m前後に位置している。

III 検出遺構

検出した遺構は、弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期に属する溝・井戸・土塙・掘立柱建物・柱穴群である。これら2時期にわたる遺構は同一面で検出している。しかし、上層の第6層には製塩土器を含む灰層が散在していることから、古墳時代中期の遺構はやや上層から切り込んでいたとも考えられるが、対応する土層は認められず、流出した可能性が推定される。

以下、検出遺構については、Aトレーニチの東側から西へ10mごとに設定したA-1区-A-5区の地区別に概観する。

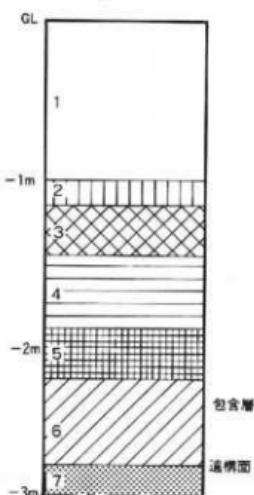


図3 土層模式図

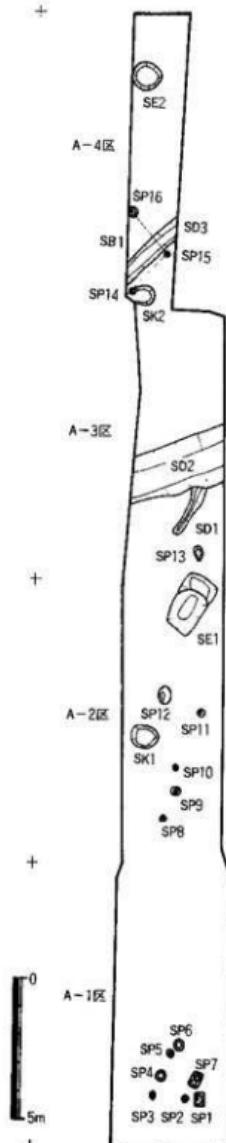


図4 平面図

1) A-1区

7個の柱穴群(S P 1～S P 7)を検出している。

S P 1～S P 7

A-1区の東側に位置する柱穴群である。S P 1は48×36cmの長方形で深さ31cmを測り、内部には長方形の柱根を残す。S P 2～S P 7は円形ないし梢円形を呈し、径26～30cm・深さ6～29cmを測る。

S P 1・S P 6に柱根が遺存することや、S P 3の底部に礎板が認められることから独立柱建物の柱穴群であろうと推定されるが、北側への拡がりが確認できず、建物の方向や規模等は不明である。

柱穴中より土師器片が少量出土しており、いずれも古墳時代中期後半に比定できるものと考えられる。

2) A-2区

井戸(SE1)、柱穴(S P 8～S P 12)、土塙(SK1)を検出した。

SE1

上面で152×114cmの長方形を呈し、深さ40～55cmを測り、北西部で土塙を切り込んでいる。内部には上方から黒灰色粘土、淡灰色粗砂が堆積し、最下層は湧水層に達している。

遺物は上層から、縦内第II様式の土器(6～11)および少量の植物遺体が認められた。

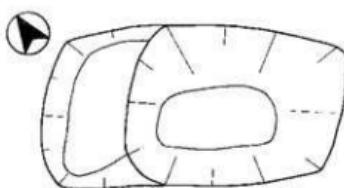
S P 8～S P 12

いずれも径22～30cm・深さ10～14cmを測るもので、S P 12はやや大型で梢円形を呈する。

柱穴中の遺物は、S P 9から須恵器底の小破片が出土したほか、土師器の細片が少量出土した程度である。

S K 1

南北に長い楕円形を呈し、長径92cm・短径80cm、深さ30cmを測る。遺物は上層の黒灰色粘土層から、土師器の細片および種子等が少量出土している。また、最下層は湧水層の淡灰色粗砂層に達していることから、井戸状遺構であった可能性も考えられる。



3) A-3区

溝(S D 1・S D 2)、柱穴(S P 13)を検出している。

S D 1

北西方向に延びS D 2に流れ込む小規模な溝で、幅18~50cm・深さ7~10cmを測る。

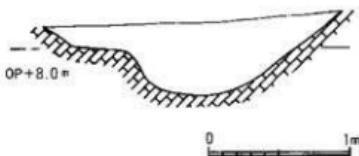


図5 S E 1平断面図

S D 2

北西方向に流れ、上幅190cmを測る。底部からは湧水が多くて、底幅・深さ等の詳細は不明であるが、上層は黒灰色粘土で充填され、下層は淡灰色細砂がレンズ状に堆積している。

遺物は上層より弥生式土器・土師器・須恵器・製塙土器・石製品・種子等が出土しているが、体部に穿孔のある畿内第II様式(5)の壺を除き、大半は細片である。

4) A-4区

掘立柱建物(S B 1)土塀(S K 2)、井戸(S E 2)、溝(S D 3)を検出している。

S B 1

S P 14~S P 16で構成される掘立柱建物である。柱穴はいずれも円形を呈し、径30cm前後・深さ35cmを測り、S P 14には柱根が残る。建物規模はさらに拡がると推定されるが、調査区外へ至るために不明である。遺物は土師器の細片が少量出土した程度で、時期も不明である。

S K 2

A-3区からA-4区にまたがる土塀で、南側は調査区外へ至るが、ほぼ楕円形を呈するものと考えられ、径80cm・深さ10cmを測る。また、南西隅にS D 14が構築されているが、切り合ひ関係からS K 2が新しい時期に比定できる。遺物は土師器の細片が少量出土している。

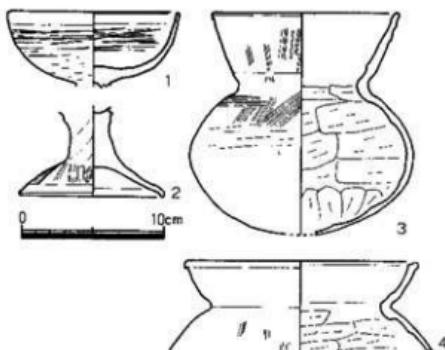


図6 SD3・SE2出土遺物実測図

SD 3

南東から北西方向に延びる溝で、幅60cm・深さ10cmを測る。遺物は庄内式に属する土師器高杯(1・2)、甕等の細片が少量出土している。

IV 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナに10箱程度で、SE1・SE2等の一部の遺構を除き、ほとんどが第6層暗灰色粘土層から出土している。種別は弥生式土器・土師器・須恵器・製塙土器・石製品・植物種子等で、時代別には弥生時代中期前半～後期と古墳時代前期～中期の2時期に分けられる。

以下、器種別に概観し、個々の土器の技法ならびに調整は、文末の一覧表に明示する。

1) 弥生式土器

弥生式土器はSD2・SE1、および包含層から出土している。SD2からは口縁部付近を欠損する壺1点、SE1からはほぼ完形の鉢・甕を含む6点が出土し、いずれも畿内第II様式(以下II様式と記す)に位置づけられる。包含層からはII～V様式の壺・鉢・甕等の破片が出土したが、量的にはII・V様式のものが多く、III・IV様式と考えられるものはごくわずかである。

壺(5・10・16～18)

(5)は球形に近い体部と長い頸部をもつII様式の壺である。体部外面は縦方向のナデで調整した後、下半を横方向のヘラミガキで丁寧に仕上げている。底部側面および周縁には指頭压

SE 2

円形を呈する素掘りの井戸で、上面径106cm・底部径78cm・深さ80cmを測る。内部は上方に黒灰粘土層、下方に灰色シルト層の2層の堆積が認められ、溝水層に達している。

遺物は、黒灰色粘土層より土師器の壺(3)・甕(4)等の破片が出土している。出土遺物から井戸の構築時期は、布留式の新しい時期に比定されるものと考えられる。

痕がみられ、上げ底状となる。体部内面の調整は下半に横方向のヘラミガキを行なうが、頭部にユビナデ、底部に指頭圧痕を残している。

頭部には2帯1組とする複帯構成の直線文を4帯施す。また、頭部下には単帯構成の左開き円弧文を主に施すが、逆向きの円弧文1個、円弧文間に波状文を施す部分が2ヶ所にある。胎土には石英・長石・角閃石を多く含み、淡褐色を呈する。

この壺は穿孔をもつだけでなく、口縁部は欠損している。瓜生堂遺跡や恩智遺跡出土の供獻土器には口縁部を故意に打ち欠くものがあることから、この資料も同様の性格をもつものと推定される。

(10・16)はII様式の壺の底部で、形態・調整・胎土・色調も(5)と同様である。

(17)は直立する頭部から水平近くに屈曲する口縁部をもつ壺である。口縁端部は下方に肥厚し上方へ拡張するが、上端を欠損する。復元口径は約18cmを測る。外面の調整は縱方向の粗いハケ、色調は白色系を呈するため、搬入品ではないかと考えられる。

(18)は「く」の字形に外反する短かい口縁部をもつ。口縁端部は上下に肥厚し、内傾する面となり、四線文が2条めぐる。体部の張りは強く、内面にはヘラケズリによる棱線がみられる。形態・調整の特徴は岡山県の上東・鬼川市II様式の壺に近似するが、胎土には角閃石を多く含み、暗褐色の色調を呈する。
④

鉢(6・19・20)

(6)は大きな底部から内弯ぎみに開くII様式の直口の鉢である。外面下半を粗く削りとった後、ハケ・ヘラ等で粗雑に調整する。底部には(5)の壺と同様の指頭圧痕がみられ、上げ底状である。胎土には大粒の角閃石・長石を含み、茶褐色の色調を呈する。

(19・20)はともにV様式の小型鉢である。(19)は浅い楕形を呈する直口の鉢である。右上がりのタタキで簡略につくり、外面上半および内面をナデで仕上げる。チャート・石英をわずかに含むやや精選された粘土を使用し、明橙色～乳黄色を呈する。(20)は深い体部から屈曲し、上方にのびる短かい口縁部をもつ。体部外面は水平なタタキ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで調整されている。(19)同様精選された粘土を用い、角閃石・長石をわずかに含み、茶褐色を呈する。



図7 壺(5)文様模式図 1:4

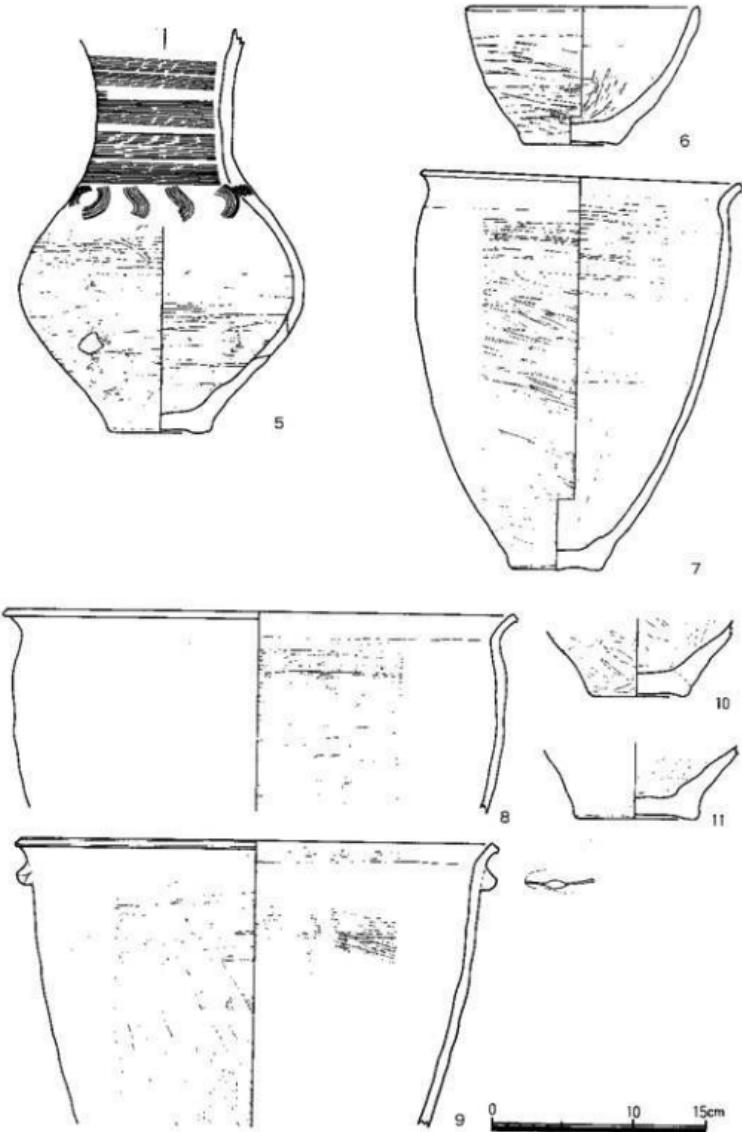


图8 SD2·SE1出土弥生式土器実測図

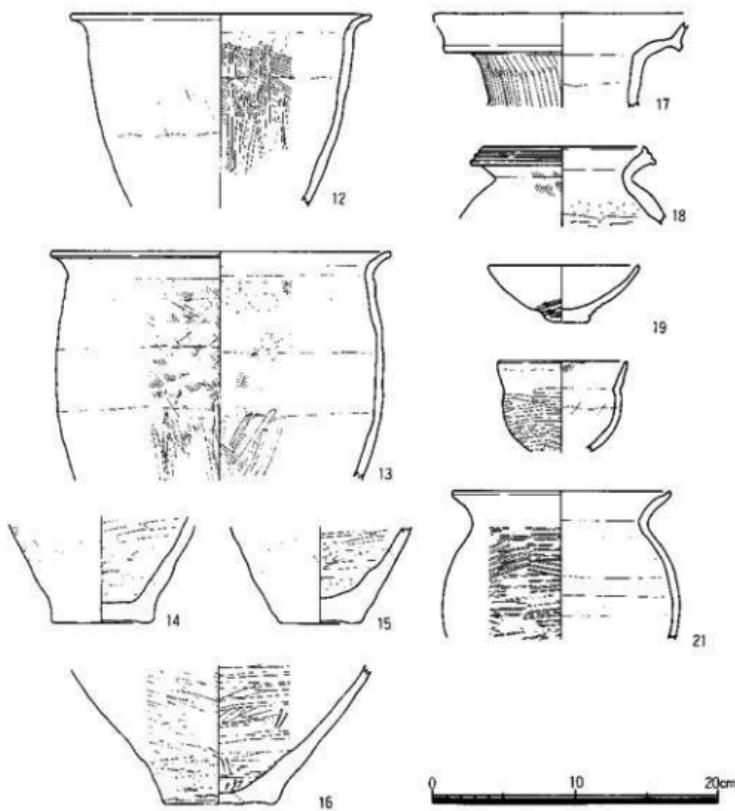


図9 包含層出土弥生式土器実測図

甕 (7~9・11~15・21)

II様式の甕には、口径20cm前後の中型のもの(7・12・13)と、30cmを超える大型のもの(8・9)がある。

(7)は倒鐘形の体部に丸く屈曲する口縁部をもつ。体部外面は縦方向ハケの後斜方向ヘラミガキ、底部側面・周縁部に指頭圧痕がみられ、比較的薄い底部である。内面は縦方向エビナデの後、上半に「河内型甕」の特徴である横方向のヘラミガキを施す。口縁部内外面にはヨコナデ

を施す。全体に器表の磨耗が著しく、胎土には長石・石英・角閃石が多く含み、暗茶褐色を呈する(12)は体部の張りが弱く、短かい口縁部をもつ。体部内外面はハケの後へラミガキで調整しているが、焼成不良のため遺存状態がきわめて悪い。胎土には石英を多く含み、赤褐色を呈する。(13)の体部は若干丸みをおびるため、胴部最大径は口径にちかづく。また、口縁端部は若干下方へ肥厚ぎみとなる。外面ともに口縁部ヨコナデ、体部は斜方向ハケの後下方に縱方向へラミガキを行なう。長石・石英・角閃石等を細粒で多く含み、暗茶褐色の色調で、硬く焼き上げられている。

大型の甕(8)も(13)と同様の形態で、屈曲部内面にゆるい稜をもつ。体部外面斜方向ハケ、内面は縱方向ハケの後横方向へラミガキ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。外面下位には煤が付着する。(9)は体部の張らない器形で、短かい口縁部をもち、扁平な把手を貼り付ける。外面は口縁部ヨコナデ、体部縱方向の粗いハケの後斜方向の細かいハケで調整する。内面の調整は、口縁部に横方向の、体部上位には斜方向のハケを行なう。(8)とともに、内面の接合部には指圧ナデの凹みを残す。

底部(11・14・15)のうち、(11)は大型の甕のもので、調整はナデと粗いハケによる。胎土には石英を多く含み、チャートもみられ、乳黄色を呈する。(14・15)は中型の甕の底部で、内外面とも接合部を指圧ナデの後へラミガキする。(14)は底面にもヘラミガキを施している。また、(15)の外面は器表がすべて剥離し、ヘラミガキの痕跡をとどめるだけである。ともに大粒の長石・石英・角閃石を多量に含み、茶褐色を呈する。

(21)は球形の体部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部はつまみ上げぎみに終わる。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は横ないし左上がりリタタキで調整し、下位をユビナデする。体部内面をナデで仕上げるが、粘土經接合痕を明瞭に残す。胎土には長石・石英・チャートを含み、明橙色～乳黄色の色調を呈する。弥生式土器に含めたが、形態・調整は飛鳥地域出土の庄内甕に類似する。

⑤

2) 古墳時代の遺物

1. 土師器

前期の出土遺物は包含層を含めてごくわずかであり、遺構に伴なうものは S D 3 出土の高杯 2 点のみである。中期の遺物は S E 2 で甕・甌が出土した以外は、すべて包含層より出土している。包含層からは比較的多量の出土をみたが、S E 2 に伴なう時期のものはわずかで、大半が須恵器出現以後の所産である。

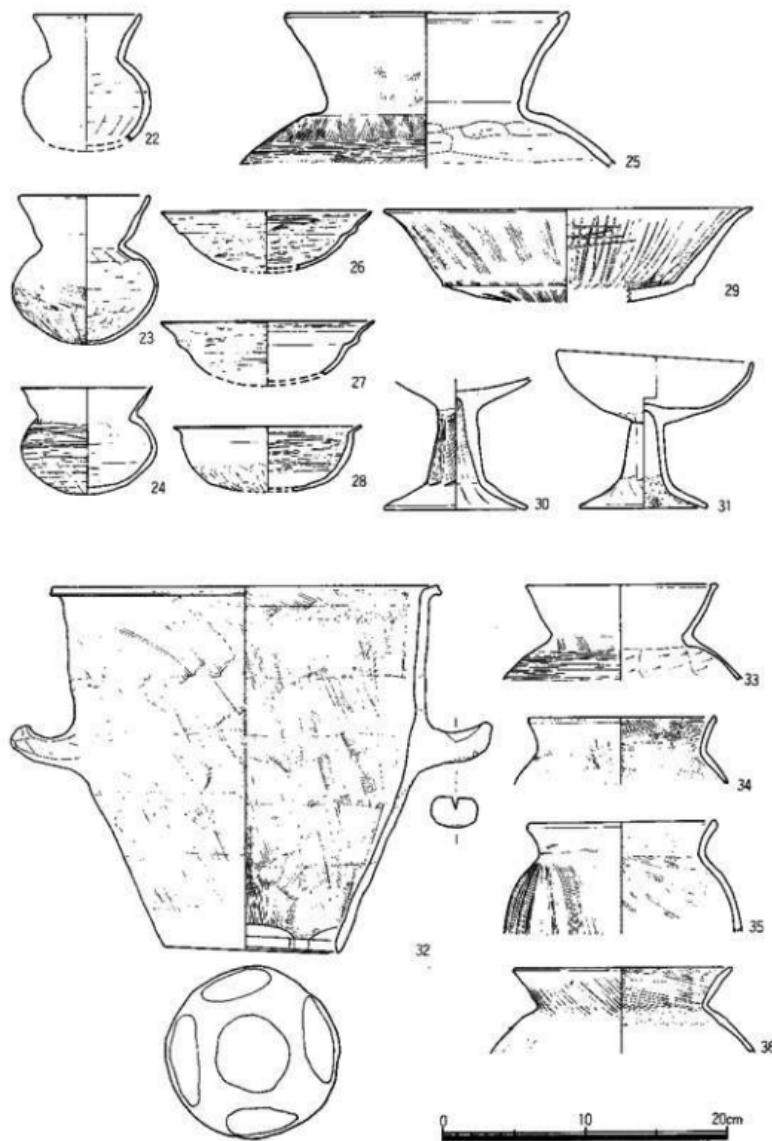


図10 土器実測図1

壺(図6-3、22~25)

(3)はやや扁平な球形を呈する体部から屈曲し、上外方へ伸びる直口壺である。口縁部外面は縱方向のハケの後ヨコナデ、体部は斜方向のハケの後ナデを施す。口縁部内面ヨコナデ、体部内面は上位では横方向、下位では縱方向のヘラケズリを施す(S E 2出土)。

包含層出土のものでは小型壺(22~24)、大型壺(25)の4点を図示している。(22)は底部を欠損するが、口縁部は球形の体部から屈曲して上外方へ外反する。全体に器壁が厚く、調整も粗雑である。(23)は頸部より屈曲し、斜上方へ内弯ぎみに伸びた後外反して口縁部を作っている。体部はやや扁平な球形を呈し、底部を除いた外面には煤の付着が認められる。(24)は「く」の字形に鋭く屈曲し、斜上方へ伸びる口縁部をもつもので、(22・23)とは形態および外面調整を異にし、時期的にも先行するものである。

(25)は大型壺で、頸部より丸く屈曲し、上外方へ外反して高く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部の一部に煤の付着が認められる。

鉢(26~28)

(26・27)はともに浅い丸底の体部に、2段に屈曲して斜上方に開く口縁部がつく小型の鉢である。双方ともに内外面を細かい横方向のヘラミガキにより、丁寧に仕上げている。

(28)は平坦な底部よりゆるやかに内弯して立ち上がった後、斜上方に折れる口縁部をもつものである。比較的丁寧な作りで、外面には黒斑が一面に認められる。

高杯(図6-1・2、29~31)

(1)は椀形の杯部を残す。外面は下位ヘラケズリの後横方向の細かいヘラミガキ、内面はナデの後上位を横方向の細かいヘラミガキを施す。胎土は良好で、淡茶褐色の色調を呈し、外面下位に煤の付着が認められる。(2)は脚部以下が残存する。柱状部外面はナデ、据部は縱方向のヘラミガキの後、据端部ヨコナデ。内面はナデの後据端部をヨコナデする。胎土は良好で、淡茶褐色の色調である。ともにSD 3からの出土である。

包含層出土のものには、平坦な杯底部から段を作つて斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部を持つ(29)と、杯部が椀形を呈する(30・31)が出土している。(29)は全体にシャープで丁寧な作りである。調整は外面ハケ、内面には放射状ヘラミガキ暗文を施している。(30・31)は柱状部が長めで、縱方向のハケの後ナデを行なうもので、ハケ原体のあたりが屈曲部に顯著に認められる。

甌(32)

図示した完形品以外に、底の細片および把手などが数点出土している。

(32)の口縁部は筒状の胴部から外反し、内傾する面を作る。底部は平坦で、中央に円孔を、

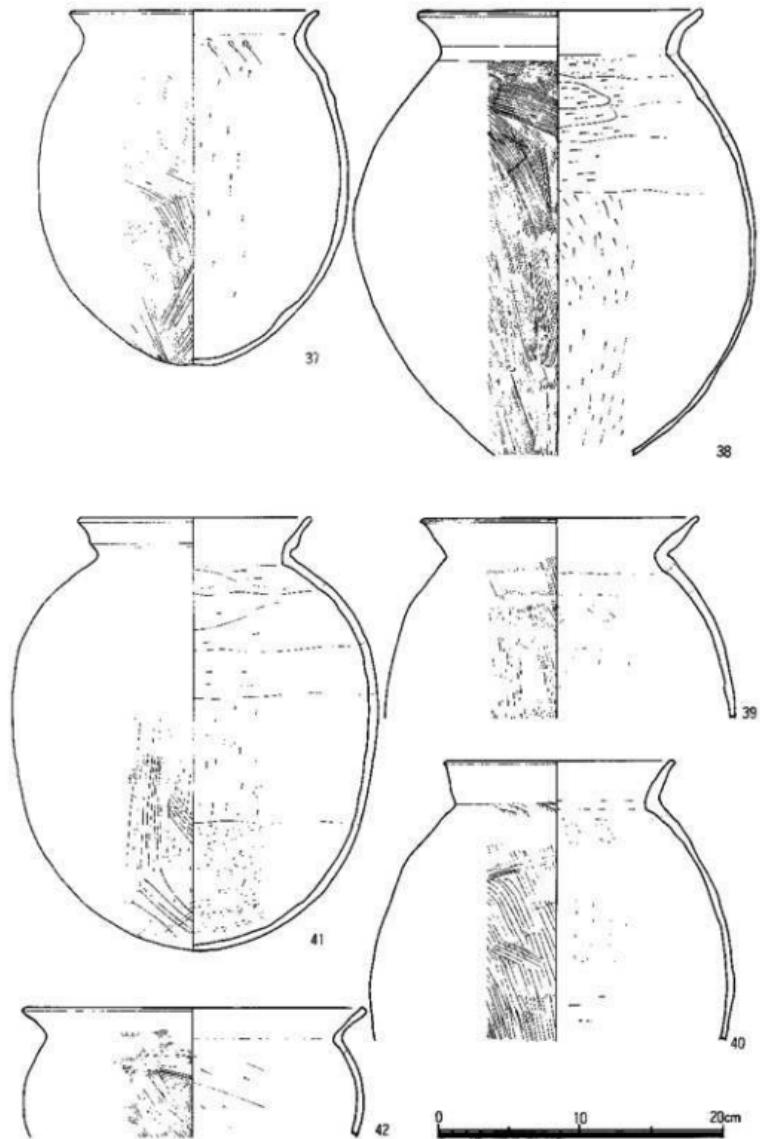


図11 土師器実測図2

その周囲に4個の楕円孔を施させている。把手は牛角形で上面中央部にヘラによる切り込みが認められる。

甕(33~41)

布留式の特徴を示す(33)以外はすべて口縁部が「く」の字形に外反するもので、完形品の3点を含め、比較的良好な資料を検出している。

(37~40)は甕(32)とともに、A-3区の包含層より一括で出土した。(37)以外はやや大型で、体部は長卵形を呈し、最大径を体部中位に持つ。体部外面は全体にハケ調整が行なわれ、小型甕では頭部以下の体部を上位・中位・下位の順に3分割し、大型甕では体部中位が2段で4分割の調整を行なっている。また部分別のハケ調整は、体部上位には右傾のものが多いために比べ、中位では垂直ないし斜方向に一定し、下位以下は単位の長いハケを底部まで一気に施す特徴を呈している。このように体部外面を一定方向のハケで調整する甕は、船橋遺跡の0-N^⑥・0-V^⑦に共通して認められ、布留式の新段階の甕とは技法が異なり、6~7世紀の長胴甕の系譜に移行するものと考えられる。

(41)は口縁部が2段に屈曲し、体部上位から強く張り出るもので、底部はやや扁平な丸底を呈する。このような甕は近接する八尾南遺跡に類似があり、古式の須恵器と共に伴するもので、前記の遺物群よりは古朴に位置づけられる。

(42)は比較的大きな口縁径を持つもので、甕と考えるよりは船橋遺跡0-N^⑧・0-V^⑨等に見られる鉢、あるいは把手の付く鍋の器形に近いものと考えられる。

2. 須恵器

須恵器はS D 2等の一部の遺構を除いては大半が包含層からの出土で、蓋杯・高杯(有蓋・無蓋)・埴・壺・甕等が出土している。包含層出土の遺物は、まとまりを有したものではないが、時期的には比較的限定されたものと考えられる。

蓋杯(43~60)

全地区より普遍的な出土が認められたが、蓋と身が別々に出土していくセッタ關係の明らかなものはない。

杯蓋(43~46)は器高が低く天井部が平らなもので、口縁部が内傾するもの(43・45)、平面をなすもの(44)、丸くおさめるもの(46)がある。(47~57)は器高が高く天井部が丸みをもち、口縁端部が内傾するものである。調整は丁寧で、天井部のヘラケズリは稜近くまで施している。クロ回転は左回りが大半を占める。

杯身は底部が平らなもの(52~57・60)と丸いもの(58・59)があり、口縁端部の形態は内傾し

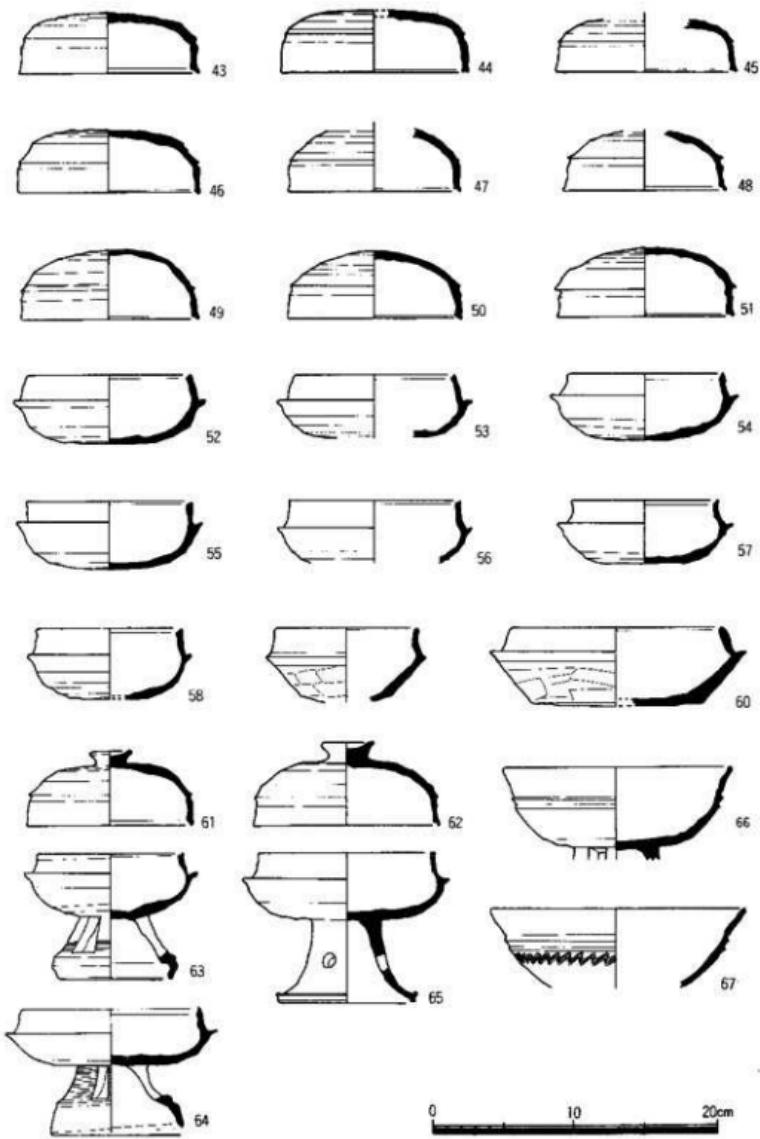


図12 猛器実測図 1

て平面をなすものと段を有するものに二分される。(59)は小型で受部が短かく、底部に静止ヘラケズリが行なわれているもので、陶邑TK 103号窯の出土例に近似する。(60)は口径縫14.6cm・受部径17.7cmを測る大型品で、底部は水平で体部外面には不整方向のヘラケズリが行なわれている。このように体部外面に不整方向のヘラケズリを施す例は、最古式に位置づけられているTK 85号窯・TK 73号窯・TK 305号窯で認められるが、ヘラケズリが体部上位にまでおよぶ例や、体部が丸みをもたず斜上方に伸びるものは陶邑内では類例を見ない。

高杯蓋(61・62)

大小の二種が出土している。双方ともに天井部は丸みがあり高く、中央に窪みを有するつまみが付く。口縁部の形態は、(61)は内寄ぎみで垂直に下り、(62)は外反して端部に至るが、口縁端部はともに内傾する面を有する。

有蓋高杯(63~65)

脚部の三方に台形の透しを穿孔する(63・64)が出土している。(63)は丸くて深い杯底部をもち、脚部は下方へなだらかに拡がり、端部付近でわずかに外傾した後外反して端部に至るものである。(64)は平らな杯底部をもち、脚部下方へ外反して開き、台形状の棱を作った後内寄ぎみに開くもので、脚部には回転カキ目を施している。また、(63)と比較すれば新相を呈するものと考えられる。(65)は大型のもので、平らで深い杯底部をもち、脚部は太く外反して下り、斜上方に屈曲した後再び外反して端部に至る。ON 18-II号窯の出土例に類似するものがある。^{参考}

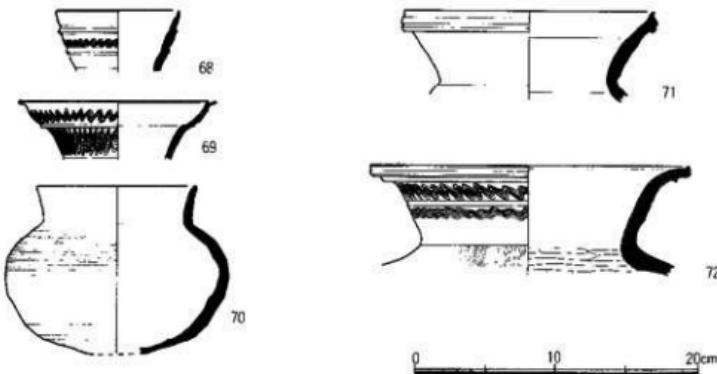


図13 須恵器実測図2

無蓋高杯(66・67)

口縁部の形態は(66)は丸みを持って立ち上がり、(67)は外傾して立ち上がる。(66)は灰かぶりのため明瞭ではないが、双方ともに2条の凸線帯の下方に波状文を施す。口縁部の形状から、(67)が新相と考えられ、陶邑I型式5段階に位置づけられる。

④

甕(68・69)

口縁部のみの破片であるが、斜上方に立ち上がるものの(68)とラッパ状に拡がるもの(69)が出土している。(68)は2本の凸線帯の間に4本1条の波状文を施している。(69)は頸部上半に15本1条とする密な波状文、口縁部には5本1条の波状文を施している。前者は陶邑KM239号窯に類例があり、後者は陶邑I型式の3段階あるいは4段階に比定される。

⑤

壺(70)

口縁部がゆるやかに外反して拡がる短頸壺である。肩部は口頸基部より内窵しながら外下方に張り出するもので、外面上半に回転カキ目、以下は回転ヘラケズリを行なう。

甕(71・72)

全地区より普遍的な出土を見たが、全体に細片が多く、図示し得たものは小型・大型の2点のみである。

小型の甕(71)は口頸基部より外傾しながら立ち上がり、頸部端で外下方に屈曲して口縁部に至る。頸部は回転カキ目の後、全体に回転ナデを施している。

大型の甕(72)は口頸基部より外傾し、頸部の凸線帯を境として上下に6本1条の波状文を施した後、断面三角形の凸線帯を作る。調整は

外面肩部に縱方向のタタキを施し、他は回転ナデを行なう。外面には自然釉が認められるが、全体に丁寧な作りである。陶邑I型式3段階ないし4段階に比定される。

⑥

その他

他にヘラ描き記号文をもつものを2点検出している。

(A)は脚部の三方に台形の透しをもつ有蓋高杯の破片で、杯底部に「—」印を施してある。また(B)は杯身(54)で、底部に「—」印の記号をもつ。

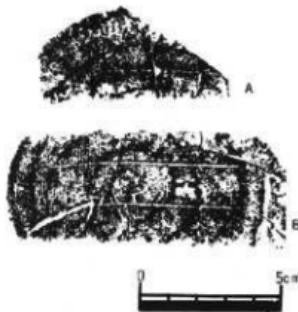


図14 ヘラ描き記号文拓影

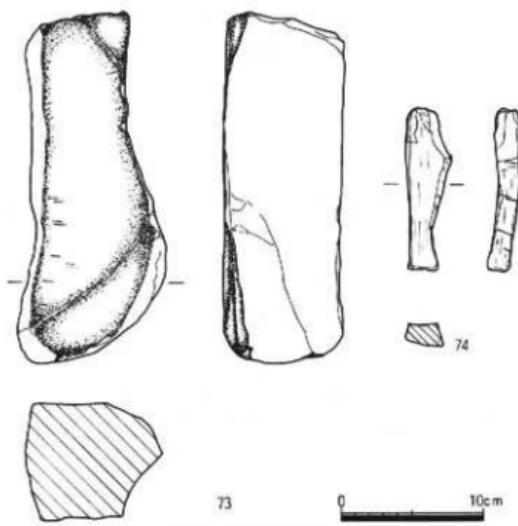


図15 砥石実測図

3) 石製品

砥石(73・74)

2点ともA-2区の包含層より出土した。

(73)は大型で、他の石製品を転用したと考えられるものである。3ヶ所に使用痕が認められ、石材は緑灰色を呈する砂岩である。

(74)は小型のもので、長期間の使用により中央部が窪み、4面に使用痕をもつ。石材は灰青色を呈する泥岩である。

4) 製塙土器

製塙土器は包含層を中心に178片が出土し、そのうち大型の破片13点を図示している。包含層から出土したものはその大半が、包含層中にブロック状に堆積している灰層に集中した状態であったため、地表面で直接わら等の植物を燃やすことにより、煎熬を行なっていたと推定される。このような場所は、A-1区・A-2区の各1ヶ所で確認している。

形態は、楕円を呈する(1)以外すべて薄手丸底式である。丸底式のものは口縁部の特徴から、直立するもの(2・3・5・6・11)、わずかに外反するもの(9)、内傾するもの(4・12)の3種に大別できる。

外面の調整技法には、指頭圧痕や粗雑なナデを残すもの(1~8)、平行ないし斜方向のタタキを施すもの(9~13)がある。内面では、口縁部付近および底部は指頭圧痕とナデ調整、体部は大半が貝殻によるケズリで、他にシボリ目を残すもの(6)や底部と体部に貝殻の条痕を残す(8)がある。

色調は火熱を受けて灰白色や淡黄色を呈するものが大半であるが、(8)のように茶褐色を呈するものも認められる。

V 製塙土器の胎土観察

製塙土器の胎土について、奥田尚氏（八尾市立刑部小学校教諭）の観察結果を以下に掲載する。

1) 胎土の観察方法

胎土は梗・砂等の肉眼や実体鏡で観察できる構成粒子と、微粒の粘土粒子で構成されている。観察では、肉眼と実体鏡30倍で区別・同定できる粒子を構成粒子とし、粒子の判断ができない微粒を基質とした。肉眼においても、実体鏡下においても、岩石種として花崗岩・チャート・片岩類・蛇紋岩・鉱物種として石英・長石・雲母・角閃石を同定の対象とした。肉眼での実測は、1mm単位のものさしを利用し、実体鏡下では、粗粒・中粒・細粒・微粒の4段階に区分した。量的には、非常に多い・多い・わずか・ごくわずかの4段階に区分した。粒子のまるさについては、角・亜角・亜円・円の4段階に区分した。

以上の区分基準をもとにして、構成粒子の観察を行なった。

2) 胎土の観察結果

(1~13)の13資料の観察結果について述べる。

(1)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、チャートと石英の鉱物が見られる。チャートは淡褐色を呈し、3個認められる。粒形は亜角で、粒径は1.5mmから1.0mmである。石英は灰色透明を呈し、1個のみ認められる。粒形は角で、粒径は1.5mmである。基質は淡黄土灰色を呈し、赤色酸化鉄を多く含む。粒径は1.0mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・石英・角閃石の鉱物が見られる。石英片岩は無色透明を呈し、ごくわずかである。片状構造が認められ、粒形は亜円、粒径は中粒に及ぶ。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は中粒に及ぶ。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

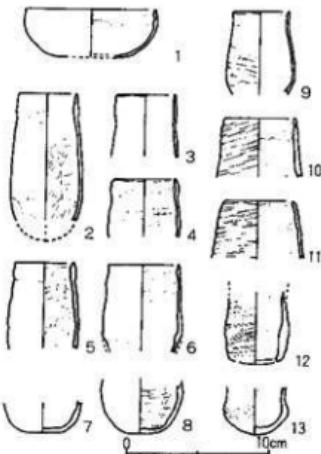


図16 製塙土器実測図

(2)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。基質の色は淡灰黃色を呈し、茶褐色の酸化粒を多く含む。粒径は0.2mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、石英の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は中粒に及ぶ。

(3)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は細粒であり、同定しがたい。基質は乳白色を呈し、緻密である。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・蛇文岩の岩石、石英・白雲母の鉱物が見られる。石英片岩は淡乳白色を呈し、わずかに1個のみ認められる。片状構造が認められ、粒形は亜円で、粒径は中粒である。蛇文岩は淡緑色半透明を呈し、わずか1個のみである。粒形は角で、粒径は中粒である。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。白雲母は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は微粒である。

(4)

肉眼観察によると胎土の構成粒子には、石英と白雲母の鉱物が見られる。石英は無色と白色透明で、いずれもわずかである。粒形は亜角で、粒径は1mmに及ぶ。白雲母は無色透明で金属光沢を呈する。粒形は角、粒径は微粒で、わずかである。基質は灰白色を呈し、赤色酸化粒が見られる。

実体鏡30倍での観察によると、チャート・石英・白雲母の鉱物が見られる。チャートは黒色透明を呈し、わずか1個のみ認められる。粒形は角があるみをおびた亜円で、粒径は中粒である。石英は白色と無色透明を呈し、いずれもわずかである。前者の粒形は亜角で、粒径は細粒である。後者の粒形は亜円から円で、粒径は中粒から細粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は微粒である。基質中には黑色粒が多く見られる。粒径は細粒に及ぶ。

(5)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は、チャートと石英の鉱物である。チャートは茶褐色を呈し、わずかに1個のみ認められる。粒形は亜角で、粒径は1.0mmである。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は1.5mmに及ぶ。基質は淡黄土灰色を呈し、赤色酸化粒の微粒が認められる。

実体鏡30倍での観察によると、石英・白雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は中粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒から微粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(6)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英と長石の鉱物が見られる。石英は白色透明を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は1.0mmに及ぶ。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は亜角で、粒径は2.0mmに及ぶ。基質の色は灰褐色を呈する。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・石英・長石・白雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英片岩は無色透明を呈し、わずかに1個認められる。片状構造が認められ、粒形は角で、粒径は中粒から細粒である。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は角で、粒径は中粒から細粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で粒径は微粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(7)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英・長石・黒雲母が見られる。石英は無色または乳白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角で、粒径は4.0mmから0.5mmである。長石は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。黒雲母はバーミキュライト化し、金色を呈する。周囲は丸みを呈し、板状でわずかである。粒径は1.0mmに及ぶ。基質の色は灰色である。

実体鏡30倍での観察によると、花崗岩?片・石英・長石・黒雲母・角閃石の鉱物が見られる。花崗岩?片は長石と石英からなり、1個認められる。粒形は角で、粒径は中粒である。石英は無色または乳白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角で、粒径は粗粒から細粒のものまである。長石は乳黄色を呈し、わずかである。粒形は亜角から円をなし、粒径は細粒である。黒雲母はバーミキュライト化して金色の金属光沢を呈し、わずかである。周囲は丸みを呈し、板状である。粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は微粒である。

(8)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は3.0mmに及ぶ。基質の色は黄土褐色である。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石・雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。雲母には無色透明で金属光沢

を呈する白雲母と、黒雲母がバーミキュライト化し金色を呈するものがある。前者は多く、粒形は角で、粒径は細粒から微粒であり、微粒のものが多い。後者はごくわずかであり、粒形は角がまるくなり板状を呈する。粒径は微粒である。角閃石は黒色を呈し、粒形は角で、粒径は細粒におよぶ。

(9)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、長石が見られる。長石は白色を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は2.5mmに及ぶ。基質の色は乳白色であり、緻密である。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石・黒雲母の鉱物が見られる。石英は白色か無色透明で、いずれもわずかである。粒形は亜角で、粒径は中粒から細粒である。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は亜角で、粒径は細粒である。黒雲母は黒色で金属光沢を呈し、多い。粒形は角のわずかにとれた亜角で板状である。粒径は細粒である。

(10)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は、細粒であるため、同定しがたい。基質の色は淡黄土灰色を呈する。赤色酸化粒がわずかに見られる。

実体鏡30倍での観察によると、縞雲母片岩、石英片岩、石英・角閃石の鉱物が見られる。縞雲母片岩は、縞糸状光沢の縞雲母が片状構造の方向に並んでいる。粒形は亜円で、粒径は中粒であり、ごくわずかである。石英片岩は無色透明を呈し、片状構造が認められる。粒形は亜角で、粒径は中粒で、ごくわずかである。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(11)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英・長石・黒雲母の鉱物が見られる。石英は無色、あるいは白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角から亜円で、3.0mmに及び、2.0mm以下のものが多い。長石は乳黄色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。黒雲母はバーミキュライト化し、金色を呈し、少ない。粒形は角がとれてまるく、板状を呈し、粒径は0.5mmに及ぶ。基質は黄土色を呈する。

実体鏡30倍での観察によると、チャート、石英・長石・角閃石の鉱物が見られる。チャートは茶褐色を呈し、わずか1個見られる。粒形は亜角で、粒径は中粒である。石英は無色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は粗粒に及ぶ。長石は乳白色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は細粒である。

(12)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、花崗岩？片と長石の鉱物が見られる。花崗岩？片は長石と石英からなり、わずかである。粒形は角のわずかにとれた亜角、粒径は2.0mmに及ぶ。長石は乳白色を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。基質は灰黒色を呈し、細粒の粒子が見られる。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は粗粒である。長石は白色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は中粒に及ぶ。

(13)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、絹雲母片岩と石英の鉱物が見られる。絹雲母片岩は2個認められ、いずれも片状構造が見られ、片状構造の方向に絹雲母が配列する。1個は粒形が円で、粒径が3.5mmである。もう1個は粒形が角で、粒径が2.0mmである。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.5mmに及ぶ。基質は淡灰褐色を呈し、孔が多い。孔径は0.5mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、絹雲母片岩・石英片岩、石英・黒雲母・角閃石の鉱物が見られる。絹雲母片岩は絹糸状光沢を呈し、片状構造が認められ、わずかである。粒形は円で、粒径は粗粒である。石英片岩は無色透明を呈し、片状構造が見られ、ごくわずかである。粒径は中粒である。黒雲母は黒色塊状を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は粗である。黒雲母片岩の岩片である可能性もある。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は中粒である。

3) 胎土の特徴と推定される産地

(1)から(13)までの13試料の胎土中の構成粒子の岩石種・鉱物種別にまとめたのが表1である。岩石的な特徴からみれば、石英片岩・絹雲母片岩等の片岩類を含む試料は、(1)・(3)・(6)・(10)・(13)で、(3)を除いて他はすべて角閃石を含む。上記以外でチャートを含む試料は(5)・(11)であり、いずれも角閃石は認められない。鉱物的な特徴から見れば、(7)・(8)の試料は石英が多く、長石・雲母・角閃石を含む。

以上のことから

I類：片岩類・石英を含み、長石・雲母・角閃石は認められる場合と認められない場合がある……………(1)・(3)・(6)・(10)・(13)

II類：チャート・石英・長石・雲母が含まれ、角閃石は認められない………(5)・(11)

III類：石英・長石・雲母・角閃石を含む……………(7)・(8)

の3種に類別できる。チャートが認められないが、II類に類似するものは(9)の試料である。

(4)の試料は長石・角閃石が認められず、チャートを含むことから、II類に類似する。(2)と(12)の資料はI・II・III類のいずれにも属さない。

片岩類を含むI類は、片岩類の岩片を産する地域で製作されたと推定される。片岩類は河内一帯の砂層中には認められず、紀ノ川流域の三波川帯の結晶片岩類の分布する地域に多く見られる。いずれの片岩類の粒子もまるみをおびていることから、角が磨滅した岩片の産する地域のものである。この条件を満たすような場所としては、紀ノ川の下流域が推定される。よって、I類の製作された地域は、紀ノ川の下流域であると推定される。

チャート・石英・長石・雲母が含まれ、角閃石の認められないII類は、花崗岩類の産する地域であるが、角閃石を含まない花崗岩粒が認められることから、少なくとも八尾近辺、すなわち出土地近辺で製作されたものではないと推定される。

III類は石英が多く、角閃石を含むものと含まないものがある。出土地近辺の砂層中には石英が多く角閃石がわずかに認められることがから、試料(7)・(8)の胎土の構成粒子から見れば、出土地近辺で製作されたものと推定される。

他の試料については、推定しがたい。

表1 製塙土器の胎土分析表

試料番号	内面による観察	実体鏡による観察						基質の色、その他の
		白雲石 チャート 石英 長石 雲母 角閃石	花崗岩 片岩 花崗岩 片岩 花崗岩 片岩	白雲石 チャート 石英 長石 雲母 角閃石	白雲石 チャート 石英 長石 雲母 角閃石	白雲石 チャート 石英 長石 雲母 角閃石	白雲石 チャート 石英 長石 雲母 角閃石	
I-1	△	△	△	△	△	○	△	淡青土灰色、赤色鉻化鉄多い。
-2	-	△	-	-	-	○	-	淡青土色、赤色鉻化鉄あり
I-3	-	-	-	-	△	△	△	孔洞、鐵質
II-4	-	○	○	△	-	○	○	淡青色、赤色鉻化鉄あり
II-5	△	△	-	-	△	○	△	淡青土灰色、赤色鉻化鉄あり
I-6	-	○	○	-	△	○	△	灰褐色
II-7	■	●	○	○	△	○	○	灰色、部分により赤褐色
II-8	●	-	-	-	△	●	●	赤褐色
II-9	-	○	-	-	-	○	●	孔洞色
I-10	-	-	-	-	△	△	○	淡青土灰色、赤色鉻化鉄あり
II-11	-	●	●	○	△	●	●	角閃石色、赤色鉻化鉄あり
-12	○	-	○	-	-	△	●	淡青色
I-13	-	△	○	-	-	○	△	淡青褐色、孔洞多い。

VI まとめ

既述したように、調査途中で遺構を保存する処置を講じたことから、調査地の全様を知り得るまでは至らなかった。しかし試掘結果が示すように、調査地全域に包含層の拡がりが確認され、木周知であった木の本遺跡の一端が部分的ではあるが明らかにされた。

調査の結果、弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の遺構が検出され、複合遺跡であることが判明した。その中でも特に弥生時代中期前半の遺構の存在は、八尾市南西部に新資料を加えたばかりでなく、近接する八尾南遺跡³⁵や北西約2kmに位置する龜井遺跡との同時期の有機的な関連を考える上でも、重要な位置を占めるといえよう。

今回、2時期の遺構を検出した青灰色シルト層は、調査区全域に拡がる土層で、おそらく調査地の北方に位置する旧大和川に関連した小河川の氾濫による堆積土と推定される。また、当遺跡の北方に位置する跡部遺跡³⁶(春日町1丁目)でも、同質の土層で弥生時代前期と庄内式の時期の遺構を検出していることから、青灰色シルト層は長期間安定した土層で、同水系一帯に拡がっていたと推定される。

一方、SD2から出土した畿内第II様式の壺には体部下半に穿孔があり、供獻上器であると推定される。これらの弥生時代中期前半の資料は、単に墳墓の存在を示唆するだけでなく、この時期に当遺跡一帯が水稻耕作に適した低湿地であったために開発され、墓域をも備えた大集落を形成していたものとも理解できる。また、近接する八尾南遺跡では弥生時代中期の資料を欠如することから、これらの事柄がそれを埋めるものと推測されよう。

5世紀後半の遺構としては掘立柱建物を検出している。この時期は、八尾南遺跡³⁷や長原遺跡³⁸と併存するもので、地域的にも近接する関係にある。このように、この時期の集落の急激な増加は河内平野に一般的に認められる現象で、今回の調査でも検出したように、薄手丸底式の製塙土器の出現と一致している。これは一部で指摘されているように、社会情勢の変化が多量の塙の消費を促したものではないかとする事柄を裏付ける資料と考えられる。一方、製塙土器の產地については船土の観察でも明らかにされたように、他地産のものが圧倒的多数を占めることが判明した。このことは単に製塙土器を搬入品として扱えるだけでなく、社会情勢の一端と考えられる古墳造営等の大土木工事に伴なう多数の人の移動に関連して、持ち込まれた可能性も今後考えなければならない問題であろう。

以上、調査結果から概略を記したが、今回の調査は遺跡の一部を発掘したに過ぎず、多くの問題点を残したことは否定し難い。今後これらの諸問題を解明することは、八尾市南西部の一部のみにとどまらず、中南河内の歴史を知るうえでも重要であると考えられる。

〔注記〕

- 1 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」 1981年
- 2 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡Ⅲ」 1981年
- 3 瓜生堂遺跡調査会「恩智遺跡」 1980年
- 4 岡山県教育委員会「川入・上東」 1973年
- 5 安達厚二・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌60-2』 1969年
- 6 平安学園考古学クラブ「船橋II」 1962年
- 7 ①前掲書
- 8 ⑥前掲書
- 9 大阪府教育委員会「陶邑III」 1978年
- 10 ⑨前掲書
- 11 ⑨前掲書
- 12 ⑨前掲書
- 13 大阪府教育委員会「陶邑I」 1976年
- 15 ⑬前掲書
- 15 ⑬前掲書
- 16 ⑬前掲書
- 17 ⑬前掲書
- 18 大阪府教育委員会「小島東遺跡」「岸町遺跡群発掘調査概要」 1978年
- 19 ①前掲書
- 20 (財)大阪文化財センター「龜井・城山」 1980年
- 21 本誌所収第6章
- 22 ①前掲書
- 23 (財)大阪文化財センター「長原」 1978年

Ⅷ 出土遺物観察表

1) 弥生式土器

番号	器種 出土位置	法 直(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・粘土・焼成・備考
5	盆 SD 2	最大径 30.1 底 径 6.8	球形に近い体部から、あまり細まらず底部に餘る。底部は長く突出する。体部下位に施成跡から打ち欠く孔(深2.1×幅1.6mm)をもつ。 既括文を施す。頸部には2巻1組の直線文を4帯。肩部には円弧文を14帯が、間に波状文を施す部分や進向のものもあり、不規則である。	外面 瓶方向ハケの後ヨコナデ。文様帯以下は丁寧な瓶方向へラミガキ。底部側面には施成圧痕の凹みが顕著に残る。 内面 ユビナデの後頸部上位ヨコナデ、体部中位以下瓶方向へラミガキ。底部・肩部・底部にはユビナデの凹みが残る。	色調 淡茶褐色 粘土 粘土 焼成 良好
				外側 口縁端部ヨコナデ。体部斜方向へハケの後横方向へラミガキ。底部側面および縁端部ヨビナデ。 内面 口縁端部ヨコナデ。体部下位瓶方向ハケの後放射状ヘラナデ。上位ヨタナデ。	色調 基褐色 粘土 粘土 焼成 良好
6	盆 SE 1	口 径 16.1 底 径 6.5 底 高 9.8	突出する厚めの底盤から、斜上方へ内側に開く直口の跡。口縁端部は丸く終わる。外表面中央はわずかに凹む。	外側 口縁端部ヨコナデ。体部斜方向へハケの後横方向へラミガキ。底部側面および縁端部ヨビナデ。 内面 口縁端部ヨコナデ。体部下位瓶方向ハケの後放射状ヘラナデ。上位ヨタナデ。	色調 基褐色 粘土 粘土 焼成 良好
7	瓶 SE 1	口 径 22.0 底 径 6.2 底 高 28.1	張りの少ない体部から若干くびれた後、斜上方へ外反する瓶部。口縁端部は丸く終わる。瓶部はわずかに突出し、厚い。	外側 口縁端部ヨコナデ。体部上位横方向へラミガキ。中・下位瓶方向へラミガキ。底部側面ナデの後、側面のみナデ。 内面 口縁端部ヨコナデ。体部上位横方向へラミガキ。以下底盤までユビナデの凹み。	色調 暗茶褐色 粘土 0.5~5mmの長石・石英・角閃石を多く含む。 焼成 良好
8	大平腹 SE 1	口 径 35.6	若干張りをもつ体部からくびれ、内にやわらい模を作り、斜上方へ外反する口縁部。口縁端部はごくわずか下に肥厚し、内側する狭い跡をもつ。	外側 口縁端部ヨコナデ。くびれ部指圧ナデ。体部斜方向へハケ。 内面 山鱗部および体部上位にユビナデ。その後口縁部ヨコナデ、体部斜方向ハケの後横方向へラミガキ。	色調 暗赤褐色(外側) 淡茶褐色(内面) 粘土 細かい角閃石を含む。 焼成 良好
9	切子付大型 SE 1	口 径 33.2	徐々に広がる体部から、斜上方へ折れ曲がり口縁部。口縁端部はごくわずか下に肥厚し、内側する狭い跡をもつ。 (口縁底内面下につまみ(底1.6×横5.0cm)を貼り付ける。	外側 口縁端部のみヨコナデ。体部下位横方向へハケ。中位以上斜方向へハケ。その後上位に横方向へラミガキ。肥厚の側面は指圧ナデ。 内面 ユビナデの後横方向ナデ。体部に斜方向ハケも認められる。	色調 暗茶褐色(外側) 粘土 内面は灰黒 粘土 長石・石英・安息・角閃石多く、7mmにおよぶ花崗岩片を含む。 焼成 良好
10	豆 SE 1	底 径 6.1	どっしうした厚い底部。内側してゆるやかに開く。外表面中央はわずかに凹む。	外側 底側面指圧ナデの後斜方向へラミガキ。 内面 複合部指圧ナデの後ハケ。その後斜方向へラミガキ。	色調 綠灰褐色 粘土 長石・石英・安息・角閃石多く、7mmにおよぶ花崗岩片を含む。 焼成 良好
11	甌 SE 1	底 径 8.2	高立ちした後急角度で立ち上がる大型甌の底部。底面の縁脚は薄く、外底面は凸が多く不安定である。	外側 瓶方向粗いハケの後ナデ。底側面のみユビナデ。 内面 接合部指圧ナデの後ナデ。	色調 乳白色 粘土 石英多く、チャートを含む。 焼成 良好 甌の付着がわずかにみられる。

番号	基土位置	種類	法 像(cm)	形 态 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成・備考
12	要 A-2区 包含層	口 釜	20.9	丸く聞く体部から、斜上方へ丸く外及する口縁部。口縁端部は大きく終わる。	外面 口縁部ヨコナデ、体部斜方向ハケ→ヘラミガキ等が認められるが不明瞭。 内面 口縁部ヨコナデと思われるが不明瞭。体部ユコナデの後斜方向ハケ、その後斜方向ヘラミガキ。	色調 淡赤褐色 胎土 石英多く、チャートを含む。 焼成 やや不良 二次加熱のため、表皮剥離薄い。
13	要 A-2区 包含層	口 釜	23.8	体部からわずかにくびれ、斜上方へ丸く外及する口縁部。(口縁端部は下へわざかに肥厚し、丸みのある面をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。体部斜方向ハケの後下位に腹方内ヘラミガキ。 内面 口縁部ヨコナデ。横合部押圧ナデの後斜方向ヘラミガキが認められる。	色調 黑茶褐色 胎土 長石・石英・角閃石細粒で多く含む。 焼成 良好 内外面に気泡有。
14	要 A-2区 包含層	底 釜	7.0	直立した後急角度で立ち上がる壁の底部で、外底面はわざかに凹む。器壁は厚めである。	外面 横合部押圧ナデの後斜方向ヘラミガキ、底面もヘラミガキ。 内面 横合部押圧ナデの後斜方向ヘラミガキ。	色調 黒褐色 胎土 角閃石多量に含み、通5mmにおよぶ長石を含む。 焼成 良好
15	要 A-2区 包含層	底 保	5.5	直立度で立ち上がる壁の底部で、外底面はわざかに凹む。器壁はきわめて厚い。	外面 斜方向ヘラミガキの底跡をわざかに認める。 内面 横合部押圧ナデの後斜方向ヘラミガキ。	色調 黒褐色 胎土 長石7mm以上が長石、角閃石多量に含む。 焼成 良好 外表面度すべて剥離。内面に黒わざかに付着。
16	要 A-2区 包含層	底 釜	7.6	直立した後ゆるやかに大きく聞く壁の底部。器壁は厚めである。	外面 底面横合部ナデの後ハケ。その後後左斜方内ヘラミガキ。 内面 斜方向ヘラミガキ。	色調 粘灰褐色～茶褐色 胎土 長石・石英・角閃石多量に含み、厚5～6mmの花崗岩質を観察する。 焼成 良好
17	要 A-2区 包含層			直立する底部から本平ちかくに屈曲する口縁部。口縁端部は上方へ弧張りし、外傾する面をもつが上端部を欠損する。また、口縁下端部は大きく肥厚するため、口縁側面には凹窓状の凹みがみられる。	外面 口縁部ヨコナデ。斜部斜方向組ハケ。 内面 口縁部ヨコナデ。腹部ナデ。	色調 乳白色～明褐色 胎土 石英多量に含み、チャートを多数有。 焼成 良好 内面口縁部に付着。
18	金 A-2区 包含層	口 釜	11.3	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方へ聞く如かい口縁部。口縁端部は上下に凹窓し、内傾する広い面をもつ。器壁はきわめて厚い。 口縁部に凹窓文を2条施す。	外面 口縁部ヨコナデ。くびれ部に組方向ハケが認められるが、以下は不明瞭である。 内面 口縁部ヨコナデ。体部指組ナデ、下端に着力部ヘラケズリ(右→左)が認められる。	色調 暗茶褐色 胎土 石英・石炭・雲母・角閃石多く、花崗岩も含む。 焼成 良好 外多量に付着。外表面わざかに剥離する。
19	錫 A-2区 包含層	口 釜 底 釜 器 高	10.5 2.9 4.1	突出する底部から、斜上方へ内窓がみに開き、浅い楕円形を呈する直口の縁、瓶底なつくりで、底部には押しつぶされたような部分もある。	外面 橫クタキの全体部上位、底面をナデ。 内面 ナデ。	色調 明褐色～乳白色 胎土 粘土、チャート、石英をわざかに含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
20	38 A-4区 包含層	口 径 9.0 縦 高 8.3	上方へ丸く開曲する口縫部。口縫部は丸く終わるが、底下外へ尖りぎみとなる。体部は上方に最大径をもつ。	外側 口縫部ヨコナデ。体部粗い横タヌキ。 内面 口縫部ヨコナデ。体部はナナフ。	色調 茶褐色 胎土 精良、長石・角閃石を含む。 焼成 良好 口縫部に爆付有
21	甕 包含層	口 径 15.1 最大径 8.3	「く」の字形に開曲し、斜上方へ外反する口縫部。口縫部は上へおきめ、丸みのある面をもつ。体部は球形にらかいであろう。	外側 口縫部ヨコナデ。体部横タヌキの後下位にユビナデ。 内面 口縫部ヨコナデ。体部はナナフ。	色調 咖褐色～乳黄色 胎土 長石・石英、チャートを含む。 焼成 良好 外側に斑付有。 胎土粗粒合併が明瞭である。

2) 土師器

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
1	高杯 SD 3	口 径 11.8	深い楕円形の杯部のみ造作。口縫部は薄くなり、丸く終わる。	外側 下部へラケズリの後全体を横方向細かいヘラミガキ。その後口縫部ヨコナデ。 内面 ナデの後上位を横方向細かいヘラミガキ。その後口縫部ヨコナデ。	色調 淡茶色 胎土 さわめて精良 焼成 良好 外側下位に爆付有。
2	高杯 SD 3	口 径 10.0	中実で幾重の柱状部から、外下方へ内凹ぎみに傾びる長い口縫部。口縫部は下へわずかに肥厚し、外傾する面となる。	外側 柱状部ナデ。複数放射状ヘラミガキの後縫部ヨコナデ。 内面 ナデの後縫部ヨコナデ。	色調 乳白色 胎土 3mm以上より石英多く、チャート含む。 焼成 良好
3	高口盃 SE 2	口 径 12.8 最大径 15.6 縦 高 15.7	丸く屈曲し、上外方へ内凹ぎみに傾びる口縫部。口縫部は外へ肥厚し、内傾する凹面をもつ。体部は大きく開く扇形のみ造作。	外側 口縫部腹方向ハケの後ヨコナデ。体部斜方向ハケの後ナデ。 内面 口縫部ヨコナデ。体部上位横方向ヘラケズリ(左→右)、下位横方向ヘラケズリ(下→上)。	色調 乳白色 胎土 精良 焼成 良好
4	甕 SE 2	口 径 16.0	丸く屈曲し、上外方へ内凹して傾びる口縫部。口縫部は丸いが、外へ若干尖りぎみとなる。体部は球形。	外側 尻部は腹方向ハケの後口縫部ヨコナデ。 内面 尻部横方向ヘラケズリ(左→右)。	色調 乳白色 胎土 1mm前後の石英多く、チャートを含む。 焼成 良好
22	小型甕 A-2区 包含層	口 径 7.3 最大径 9.0 縦 高 9.0	丸く屈曲し、上外方へ外反する口縫部。口縫部は丸いが、外へ若干尖りぎみとなる。体部は球形。	外側 体部上位までヨコナデ。以下 の体部は指圧ナデの後ナデ。 内面 口縫部ヨコナデ。体部上位横 方向ヘラケズリ(左→右)の後 ナデ。下位はユビナデ。	色調 乳褐色 胎土 チャート・石英の細粒 がわずかに認められる。 焼成 良

番号	器種 出土状況	法藍(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
23	小型壺 A-2区 包含層	口 径 9.3 最大径 10.3 器 高 10.5	内にゆるい模をもち、斜上方へ内寄りに伸びた後外反する口縁部。口縁部は丸く終わる。体部はやや上位で張る肩形。	外面 放射状ハケの後体部上位までヨコナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部中位横方向へラケズリ(左→右)。以下の体部には指圧压痕の凹みが顯著にみられる。	色調 黄褐色 胎土 キャート・石英の細粒を含む。 焼成 良好 内外面に多量の塗付有。
24	小型丸壺 A-1区 包含層	口 径 9.1 最大径 9.5 器 高 9.7	内にゆるい模をもち、「く」の字形に屈曲し、斜上方に伸びる口縁部。中位で一旦ふくらんだ後、漏斗付近で外反ぎみとなり、口縁部は薄く尖る。体部はさわめて直麗な球形。	外面 口縁部ヨコナデ。体部中位以下斜方向へラケズリ(右下→左上)。上位斜方向ハケの後横方向へのラミガキ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部横方向へラケズリ(左→右)の後、横方向へラミガキ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良。石英の細粒を散見する。 焼成 良好
25	直口壺 包含層	口 径 19.6	丸く膨出し、上外方へ外反して伸びる口縁部。口縁部は内に厚壁し、内側なる平底面となる。体部は大きく開く肩部のみ造詣。	外面 橫・斜方向ハケ。その後部上位までヨコナデ。肩部下位には横方向ハケ。 内面 口縁部ヨコナデ。肩部横方向へラケズリ(左→右)。	色調 黄褐色 胎土 精良細密。長石・石英の細粒を含む。 焼成 良好 口縁部に塗付有。
26	瓶 A-2区 包含層	口 径 14.6	2段に屈曲し、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は薄く尖る。体部はさわめて直麗な球形。	外面 体部筋にナデの後全体を横方向回かいヘミガキで丁寧に仕上げる。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 良好 内面の一部に塗付有。
27	瓶 A-2区 包含層	口 径 14.8	26と同じ器形であるが、器内部内面の模はより鋭く、体部も深めとなる。	外面 橫方向回かいヘミガキで丁寧に仕上げる。 内面	色調 淡赤褐色～乳白色 胎土 精良 焼成 良好
28	瓶 包含層	口 径 13.1	体部から斜上方に折れる鋭かい口縁部。口縁部は丸く終わる。体部は半球形を呈し、底部はわずかに平坦な面をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。体部下位横方向へラケズリ(下→上)の後全体をナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部丁寧なナデ。	色調 外面黒帯 淡赤褐色(内面) 胎土 精良 焼成 良好
29	高杯 A-1区 包含層	口 径 20.7	平坦な杯底部から屈曲し、段をつくり斜上方へ外反して伸びる長い口縁部。	外面 ナデの後放射状ハケ。部分的にヨコナデを施し、ハケを消す。 内面 ナデの後放射状ハミガキ、一部に横方向へラミガキもみられる。	色調 黄褐色(外)、 乳白色(内) 胎土 精良、長石・石英、漂母、角閃石の細粒をわずかに含む。 焼成 良好
30	高杯 A-3区 包含層	幅 径 10.0	内寄して聞く杯底部をわずかに残す。柱状部は比較的長めで、屈曲して下方に聞く部に鋭く。脚縁部は薄くなり、やや角ぼって終わる。	外面 杯底ナデ。柱状部縱方向ハケの後ナデ。筋部ナデ。底面部には、ハケ原体の压痕が顯著にみられる。 内面 杯部丁寧なナデ。底面部推圧ナデの後擦部ナデ。柱状部には紋り板がみられる。	色調 乳褐色 胎土 精良 焼成 良好 外表面全体および内面の一部に塗付有。

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考	
31	高杯	口 径 13.8 高 度 8.9 器 高 11.3	浅い半球形の杯部で、口縁部は丸く終わる。体部はゆるやかに膨らみ、丸く屈曲して底部に統一する。表面にはやや角がある。	外側 内面	杯部ナデ、底部指圧ナデ。 柱状部、弧状ナデ。 杯部ナデ。柱状部較った後ナデで削す。端部指圧ナデの横 横方向へヶ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良、径5mmに及ぶ長 石、石英をわずかに含む。 焼成 良好
32	瓶	口 径 27.0 底 径 12.2 器 高 26.0	丸く屈曲する刃立い口部。口縁部 は下へ若干厚厚し、内側にある溝と なる。体部上位は筒形で、内下方へ 弧形的に下がり、子房や先端に残る。 体部中位に、上部にへたりによる切り 込みのある舟形の把手を2個付す。 両面中央に円孔を、その周囲に4箇 の側円孔を備わせる。	外側 内面	斜方ヶの後口縁部ヨコナ デ、下の上下面・底側面、 表面ナデ。口縫部と体部の境 には拘束接合部が顯著にみられ る。	色調 明棕色 胎土 精良、石灰・チャート を散在する。 焼成 良好 胎土拘束接合部が顯著にみられ る。
33	甕	口 径 13.3	「く」の字形に屈曲し、上外方へ外反する口縁部。口縁部は内 方に厚厚し、内側にある溝となる。 体部は大きく開く屈曲のみ造作。体部の 笠壁はきわめて薄い。	外側 内面	口縁部ヨコナデ。肩部斜方 ヶの後横方向へヶ。 口縫部ヨコナデ。肩部横方向 ヘラヶ(左→右)。	色調 淡茶褐色(外側) 淡赤褐色(内面) 胎土 精良、花崗岩を散在し、 角閃石の繊維を含む。 焼成 良好
34	甕	口 径 13.1	丸く屈曲し、上外方へ外反する口縁部。 口縁部は上位にこくわすか肥 厚し、丸味のある溝となる。 口縁部に1条の沈痕がある。	外側 内面	斜方の後斜方斜方へヶ。その 他の縫部ヨコナデ。 肩部の接合部を指圧ナデの後 横あるいは斜方斜方へヶ。	色調 乳白色 胎土 精良 焼成 良好
35	甕	口 径 13.0	丸く屈曲し、上外方へ外反する口縁部で、上位で厚厚を増す。口縁部 は丸味のある溝となる。体部は丸く 屈曲する上位のみ造作。	外側 内面	肩方向ヶの後くびれ部まで ヨコナデ。 側あるいは斜方斜方へヶの後口 縫部ヨコナデ。体部にはみ ビナデ。	色調 乳褐色 胎土 精良、わずかにチャー トを含む。 焼成 良好 口縫部と体部の接合部が明瞭 である。 外面に横付帯。
36	甕	口 径 15.4	「く」の字形に屈曲し、斜上方へ外反 する口縁部。上位で厚厚を増す。口 縁部は滑らかに丸く終わる。体部 は直線的に開く上位のみ造作。	外側 内面	左上がりタキで口縫部を作 り出した後ヨコナデ。肩部斜 方斜方へヶの後ナデ。 口縫部斜方斜方へヶ。肩部の接 合部を西面ナデの後斜方へ ラヶ(右→左)。	色調 黄褐色 胎土 精良、わずかにチャー ト、石英を含む。 焼成 良好
37	甕	口径(長)18.0 (短)16.0 底大径 21.8 器 高 25.0	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方に 外反する口縁部。口縁部は丸く終 結する。体部の張りは強く、若干尖 りの丸底をもつ。	外側 内面	口縫部ヨコナデ。体部斜方斜 方へヶの後肩部のところどころ にみビナデ。 口縫部ヨコナデ。体部斜方斜 方へラヶ(下位→上位)の後ナデ 底部には指頭圧痕がみられる。	色調 淡灰褐色 胎土 精良、チャートを含む。 焼成 良好 外側に横付帯 土圧のためか器形はゆがむ。
38	甕	口 径 19.6 底大径 28.0	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方に 外反する口縁部。口縁部は丸く終 結する。体部は瓶長の形状を呈する。	外側 内面	体部上位斜方斜方、下位斜方 斜方へヶの後口縫部ヨコナデ。 口縫部ヨコナデ。体部のヘラ ヶ(右→左)は下位(下→上)、中位 (右下→左上)、上位(右→左) の順に行なう。	色調 淡黄褐色 胎土 精良、徑1~2mmの石英多く 含む。 焼成 良好 外側 下位に多量の横付帯、 裏面の質耗著しい。

番号	器種 出土位置	草量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
39	甕 A-3区 包含層	口径 18.9 最大径 26.0	「く」の字形に屈曲し、斜上方にまっすぐ伸びる口縁部で、上位では薄くなる。口縁部は外へつまみ、丸く終わる。体部はゆるやかに聞く上位のみ盛容するが、長削型になるからしない。	外側 口縁部ヨコナデ。体部斜方向の後退方向ハケ。その後摺合部にヨコナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後ハケか。摺合部が明顯である。	色調 深青色(外側) 深灰褐色(内側) 胎土 石英多く、チャートを含む。 焼成 良好 内外面下半に煤付層。 内面表皮の模様若しい。
40	甕 A-3区 包含層	口径 15.9 最大径 26.0	丸く屈曲し、上方方へ外反ぎみに伸びる口縁部。口縁部は下に肥厚し、外傾する丸味ある曲となる。体部はゆるやかに聞く上位のみ盛容するが、長削型になると考え方される。	外側 口縁部ヨコナデ。体部斜方向直ハケの後肩部上部までヨコナデ。 内面 ヨコナデヨコナデ。体部横方向ヘラケズリ(右→左)の後ヨコナデか。	色調 黄褐色 胎土 良、石英、石墨、火砂、火砂のチャートを多く含む。 焼成 良好 内面表皮腐蝕する。
41	甕 A-3区 包含層	口 径 16.0 最大径 25.6 容 器 30.8	体部から一くじれし、ふくらんだ後上方へ外反ぎみに伸びる口縁部。容器は丸く終わる。体部は上位から下位まで強く弧の彎形の削部と深い底部とからなる。	外側 体部斜方向ハケの後肩部直ハケ。その後口縁部から体部上部までヨコナデか。裏部ちかくに先による厚壁がみられる。 内面 ヨコナデヨコナデ。体部斜方向ヘラケズリ(下→上)の後上位に横方向ヘラケズリ(左→右)。体部中位まで指輪状。	色調 黄褐色 胎土 良、チャート含む。 焼成 良好 外面下半に煤付層し、外面下半の表皮模様若しい。
42	甕? A-3区 包含層	口 径 23.5 最大径 23.9	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方へ外反するが縫隙部で、上位で厚壁を増す。口縁部は外傾する曲をもつて、わざかにつまみ上げぎみに終わる。体部は上方のみ盛容するが、上位で強く張るため、低平な彎形になると考え方される。	外側 斜方向ハケの後口縁部ヨコナデ。 内面 ヨコナデヨコナデ。体部斜方向ヘラケズリ(右→左)の後ナデ。	色調 孔褐色～赤褐色 胎土 精良 焼成 良好 ヨコナデ内面および体部内面に煤付層。

3) 須恵器

番号	器種 出土位置	草量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
43	蓋杯(蓋) A-1区 包含層	口 径 12.6 縦 径 12.0 高 高 4.3	口縁部は短く外傾して下った後、小さく外反して済部付近で外方向に開いて縫隙部とする。口縁部はわずかに段を有し、内傾する凹面を呈する。縫は短くて浅く、口縁部との境に凹面を作る。天井部は低く平らで中央には、凹輪ヘラケズリによる沈線が認められる。	外側 天井部は接端より0.9cm以上は凹輪ヘラケズリ。他は圓転ナデ。 内面 天井部中央一定方向ナデ。他は圓転ナデ。	色調 青灰色(外側) 淡青色(内側) 胎土 密、白、白色の小砂粒を含む。 焼成 良好堅緻。 ヨコ圓転左回り。
44	蓋杯(蓋) A-1区 包含層	口 径 13.0 縦 径 12.4	口縁部は短く外傾して下った後、小さく外反して済部へ至る。縫部付近で外方向に開く。口縁部はやや内傾し、水平面を作る。縫は短く丸い。天井部は高く平らである。	外側 天井部は接端より0.4cm以上は凹輪ヘラケズリ。 内面 天井部は不規方向ナデ。他は圓転ナデ。	色調 方灰色 胎土 密、0.1~0.2mmの白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 ヨコ圓転左回り。
45	蓋杯(蓋) A-1区 包含層	口 径 12.4 縦 径 12.0	口縁部は短く外傾して下った後、小さく外反して済部へ至る。口縁部はやや内傾し、凹面を作る。縫は短くて深く、口縁部との境に小さな内面を作る。	外側 天井部は接端より0.5cm以上は凹輪ヘラケズリ。他は圓転ナデ。 内面 凹面ナデ。	色調 灰灰色 胎土 粗、0.1~0.2mmの白色の砂粒を含む。 焼成 良好半緻。 ヨコ圓転左回り。

番号	基 山 上 位 置	種 類	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調 、粒上、 地成、備考
46	蓋杯(素)	口 逆 後 逆 側 高	12.6 12.5 4.4	口縁部は短かく外傾した後、垂直に下って端部に至る。口縫端部は内傾して下面を呈する。底は短かくて丸く、口縫部との境には凹面状を作り、天井部は比較的丸い。	外面 天井部は横端より1.4cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 天井部一定方向のナデ。他は回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 疎、白色の小砂砾を散見する。 地成 良好堅緻 ロクロ回転右回り。
	A-1区 包含層					
47	蓋杯(素)	口 逆 後 逆	12.0 11.8	口縫部は短かく外傾した後、直方に下り、口縫部附近でわずかに外反する。口縫端部は内傾する凹面を作る。底は短かくて丸く、口縫部との境には凹面状の凹みを作る。	外面 天井部は横端より1.5cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 天井部一定方向のナデ。他は回転ナデ。	色調 淡灰色 粒上 粗、1-3mmの白色砂粒含む。 地成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。 外表面端以下に暗色の自然筋わずかに付着。
	A-2区 包含層					
48	蓋杯(蓋)	口 逆 後 逆	11.2 10.7	口縫部は短かく外傾して下った後、すぐに外反して端部に至る。底は短かくて丸く、口縫部との境には凹面状の凹みを作る。	外面 天井部は横端より1.3cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 疏、0.1-1mmの白色砂粒含む。 地成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
	包含層					
49	蓋杯(蓋)	口 逆 後 逆 側 高	12.4 12.1 4.9	口縫部は短かく外傾した後、外反して端部に至る。口縫端部は内傾して底を有する。底は短かくて丸い。天井部は高く丸い。	外面 天井部は横端より1.2cm以上は回転ヘラケズリ。天井部は回転カキ目。他は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 疏、白色の小砂砾を散見する。 地成 良好堅緻 ロクロ回転右回り。
	A-2区 包含層					
50	蓋杯(蓋)	口 逆 後 逆 側 高	12.1 11.8 4.7	口縫部は短かく外反して端部に下った後、少しき2度外反して端部に至る。底は短かくて丸い。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は横端より0.7cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 やや密、0.1-0.2mmの白色の砂粒を含む。 地成 良好堅緻 ロクロ回転右回り。 天井部外表面丸かぶり。
	A-2区 包含層					
51	蓋杯(蓋)	口 逆 後 逆 側 高	12.2 12.6 4.8	口縫部は短かく外傾した後、直方に下りて底部附近でわずかに外反する。底は短かくて丸く、口縫部との境には凹面状の凹みを作る。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は横端より1.5cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 やや密、小砂砾を散見する。 地成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。 黑色粒の発生あり。
	包含層					
52	蓋杯(身)	口 逆 受部低 部 高	11.5 13.5 4.8	口縫部は内傾して立ちあがり、中半でふくらみをもつ。底部附近で小さく内凹する。口縫端部は内傾する凹面を有する。受部は外上方へのび、たちあがりとの境に比較的丸い。	外面 底部は受部端より1.9cm以下は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 底部不整方向ナデ。他は回転ナデ。	色調 淡白色 粒上 やや密、0.1-3mmの白色砂粒含む。 地成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
	包含層					
53	蓋杯(身)	口 逆 受部逆	11.1 13.5	口縫部は内傾して立ちあがりする。口縫端部は内傾して段を有する。受部は外上方へのび、たちあがりとの境に比較的丸い。	外面 底部は受部端より1.6cm以下は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粒上 密、良好堅緻 地成 ロクロ回転左回り。
	包含層					

番号	種出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
54	蓋杯(身)	口 径 10.6 受部径 13.0 器 高 4.6	口縁部は内傾した後、端部ちかくで垂直にのびる。口縁端部は内傾する面を有する。受部は外上方へのび、端部は丸い。底部は深く、中央は半らである。	外側 底部は受部端より1.6cm以下は回転へラケズリ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗青灰色 粘土 やや密、0.1~1mmの白色砂粒含入。 焼成 良好堅致 ロクロ回転左回り。 受部上面に薄く灰かおり。 外表面に「...」のヘラ記号。
A-1区 包含層					
55	蓋杯(身)	口 径 11.6 受部径 13.2 器 高 4.9	口縁部はほぼ直立してのびる。口縁端部は内傾して段を有する。受部は外上方へのび、端部はやや丸い。底部は深く、中央は半らである。	外側 底部は受部端より2.0cm以下は回転へラケズリ。他の回転ナダ。 内面 底部不規方向ナダ。他の回転ナダ。	色調 淡灰色 粘土 密、不良、甘く軟質。 ロクロ回転左回り。
A-1区 包含層					
56	蓋杯(身)	II 横 11.9 受部径 12.2	口縁部は内傾した後、垂直ぎみにのびる。口縁端部は内傾して段を有する。受部は外上方へのび、端部はやや丸い。	外側 端部は受部端より1.6cm以下は回転へラケズリ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗黒色 粘土 密、0.1~3mmの白色砂粒含入。 焼成 良好堅致 ロクロ回転右回り。
A-3区 包含層					
57	蓋杯(身)	口 径 10.1 受部径 12.2 器 高 4.6	II 縁部は高く、内傾した後端部付近を有する。口縁端部は内傾し、段を有する。受部は外上方へのび、端部はやや丸い。底部は比較的の深く半らである。	外側 底部回転へラケズリ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	暗青灰色 粘土 やや密、0.1~1mmの白色砂粒含入。 焼成 良好堅致 ロクロ回転左回り。
A-1区 包含層					
58	蓋杯(身)	口 径 10.0 受部径 11.6	II 縁部は内傾して高くなる。口縁端部は内傾して段を有する。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	外側 底部は受部端より1.2cm以下は静止へラケズリ。底部ナダ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色 粘土 やや密、0.1~3mmの白色砂粒含入。 焼成 良好堅致 ロクロ回転左回り。
A-2区 包含層					
59	蓋杯(身)	II 横 10.0	II 縁部は内傾した後、ゆるやかに外反して立ち上がり、端部は丸い。受部は短く水平にのび、端部は深く、断面三角形を呈する。	外側 底部は受部端より0.6cm以下は静止へラケズリの後不定方向ナダ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色(外側) 灰色(内面) 粘土 密 焼成 良好堅致 ロクロ回転不明。 内面底部緑灰色の自然釉
包含層					
60	蓋杯(身)	口 径 14.6 受部径 17.7	II 縁部は強く内傾して立ち上がり、端部付近で小さく内折し、端部は丸く終わる。受部はほぼ水平にのび、端部はやや丸い。底部は半らである。	外側 底部は受部端より0.6cm以下は静止へラケズリ。底部ナダ。他の回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色。底部赤茶色 粘土 密 焼成 良好堅致
三合層					
61	高杯(蓋)	口 径 11.7 受部径 11.4 器 高 5.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	II 縁部は短く外反した後、歪みがみに下り端部に逆る。口縁端部は強く内傾して凹面を作る。他の端部は丸く終わる。口縁部との間に凹面を作る。天井部中央には、外反して立ち上がり中央上面に凹面を呈するつまみを有する。	外側 天井部は短端より1.0cm以上は回転へラケズリ。つまみは粘り付けの複数ナダ。他の回転ナダ。 内面 天井部は回転ナダの後一定方向のナダ。他の回転ナダ。	色調 暗灰色 粘土 密、小砂粒を散見する。 焼成 良好堅致 ロクロ回転右回り。
SD 2					

番号	器種	出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
62	高杯(面)	A-3区 包含層	口 径 12.9 根 径 12.7 高さ 5.9 つまみ桙 3.6 つまみ高 1.1	口縁部はやや外傾して下り、中位で外反して端部に至る。口縁部は内傾して段を有する。桙は短かく、やや丸い。尖状部中央には、比較的大きく外反して桙央上面に凹みを呈するつまみを有する。	外側 天板部は底端より 1.9cm以上は回転ヘラケズリ、つまみは鋸り付けの後ナデ。他の回転ナデ。 内側 回転ナデ。	色調 淡灰色(外山) 青灰色(内面) 粘土 粘土 焼成 0.1~0.2mmの小砂粒を多量に含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔あり。
63	有蓋高杯	A-2区 包含層	口 径 10.3 受部径 8.0 桙部径 4.3 桙 高 8.8	口縁部は内傾した後、直立ぎみにのびる。口縁部は内傾して段を有する。受部は外方に膨らむが底部は丸くない。桙部は下方へならかに底があり、桙部附近でわずかに外傾した後、外傾して端部に至る。桙部は丸い。脚部に円形のスカシを三方に穿つ。	外側 受部端より 2.4cm以下は回転ヘラケズリ。一部に回転カキ目。脚部下半回転カキ目。他の回転ナデ。 内側 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 粘土 0.1~0.2mmの小砂粒を多量に含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔あり。 杯底部にスカシ切り取りの跡のヘラ痕あり。
64	有蓋高杯	A-2区 包含層	口 径 12.3 受部径 14.9 桙部径 9.2 桙 高 5.0 根 高 8.8	口縁部はやや外反した後、内傾して端部に至る。口縁部は内窓し、急角。桙部は下方へ内傾する凹部を有する。脚部は大きく、下方へ外傾して開いて右形の腰を呈する。内窓及び窓に開いて丸く終わる端部に至る。脚部に縦長い台形のスカシを三方に穿つ。	外側 受部端より 2.1cm以下は回転カキ目。脚部上半回転カキ目。他の回転ナデ。他の回転ナデ、回転ナデ。 内側 回転ナデ。	色調 青灰色。 粘土 やや密 0.1~0.2mmの小砂粒多量に含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔あり。 杯底部にスカシ切り取りの跡のヘラ痕あり。
65	有蓋高杯	A-2区 包含層	口 径 12.3 受部径 14.4 桙部径 9.4 桙 高 5.7 根 高 10.7	口縁部は内傾して直立のびる。口縁部はほぼ水平にのび、受部は斜め上に開く。受部は斜め上に開く。底部は丸くなく、底部附近で明瞭な外反して下り、底部附近で明瞭な外反して下り、底部附近で明瞭な外反して下り、底部は丸い。脚部に直径 1.1cm の内窓スカシを三方に穿つ。	外側 受部端より 1.6cm以下は回転ヘラケズリ兼回転ナデ。他の回転ナデ。 内側 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 粘土 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔無。
66	無蓋高杯	A-1区 包含層	口 径 15.8	口縁部は直ぐ外傾しながら立ち上がり、底部付近で外傾して端部に至る。口縁部は丸い。底部は平らな面を有し、内窓して立ち上がり、中間に 2 条の凸縁帯を作って立ち上がる。凸縁帯の下方には浅模様が認められるが、全体に底から受けているため、模様の単位は不明である。脚部にスカシを穿つ。	外側 全体に底から受け、調整不明。 内側 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 やや密 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔不明。 杯底外周面に暗緑色の自然釉が沿流。
67	無蓋高杯	包含層	口 径 17.8	口縁部は直ぐ外傾しながら立ち上がり、底部付近を欠損するが、内窓ぎみに外傾して 5 本 1 組の波紋状を施した後、2 本の凸縁帯を作り口縁部に至る。	外側 回転ナデ。 内側 底から受けのため調整不明。	色調 黒灰色 粘土 密 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔不明。 内面底から受け。
68	透?	A-2区 包含層	口 径 8.6	口縁部は斜上方に立ち上がり、2 本 1 組の凸縁帯の間に 4 本 1 組の波紋状を施した後、やや内窓ぎみに直立して端部に至る。口縁部は丸く終わる。	外側 回転ナデ。 内側 回転ナデ。	色調 黑色 粘土 密 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔不明。
69	透?	A-2区 包含層	口 径 14.0	脚部は外反して立ち上がり、15 本 1 組の波紋状を施し、その上に 1 本の凸縁帯をめぐらせて口縁部に至る。口縁部は内窓して 5 本 1 組の波紋状を施した後、外反して段を有する環部に至る。	外側 回転ナデ。 内側 底から受けのため調整不明。	色調 黑色 粘土 密 焼成 良好堅緻 ロクロ回転孔不明。

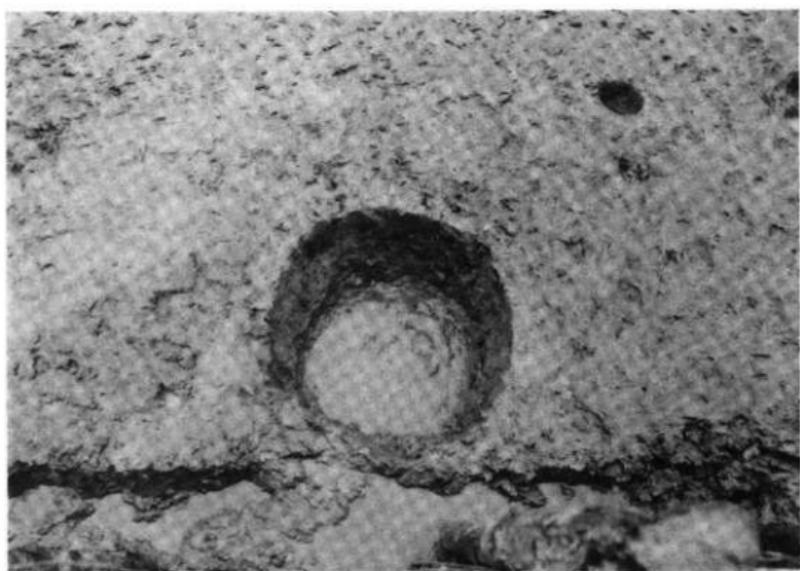
番号	品種 出土位置	法規(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒上・地成・備考
70	セイ A-2区 名古屋	口 11.2 根 14.9	口根部は口頭基部より小さく外反して立ちあがる。口縁部は丸く終わる。側面は口頭部より内寄しながら下方に盛り出す。底部は尖らず、内寄りみに外傾する。	外側 口縁部回転ナデ。肩部上位回転カキ目、中位四輪ナデ、下位圓転ヘラケズリ。 内面 円転ナデ。	色調 灰色 粒上 細 地成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
71	セイ A-2区 名古屋	口 11.5	口頭部より外傾しながら立ち上がり、側面は外下方に屈曲して口縁部に至る。口頭部は少し内寄した後、中位から内側ざみに立ち上がり、丸く折る輪廻に至る。	外側 頭部に回転カキ目その後、全体を斜転ナデ。 内面 圓転ナデ。	色調 灰色 粒上 やや密、0.1~0.2mmの白色小砂粒を多く含む。 地成 良好堅緻 ロクロ回転不明。
72	セイ 名古屋	口 22.4	口頭基部より外傾しながら立ち上がり、凸輪帶を頂として上下に6本1条の溝状紋を施した後、大きく外反して断面へ舟形の凸輪帶をめぐらす。口頭部は断面上方に立ち上がった後、小さく外反して尖りぎみに終わる輪廻に至る。	外側 扇部に両方向の平行タタキ。 内面 他は圓転ナデ。 肩部不定方向ナデ。屈曲部静止ヘラケズリの復回転ナデ。	色調 灰色 粒上 やや密 地成 良好堅緻 ロクロ回転不明。 口頭部に暗緑色の自然色。口部灰かぶり。



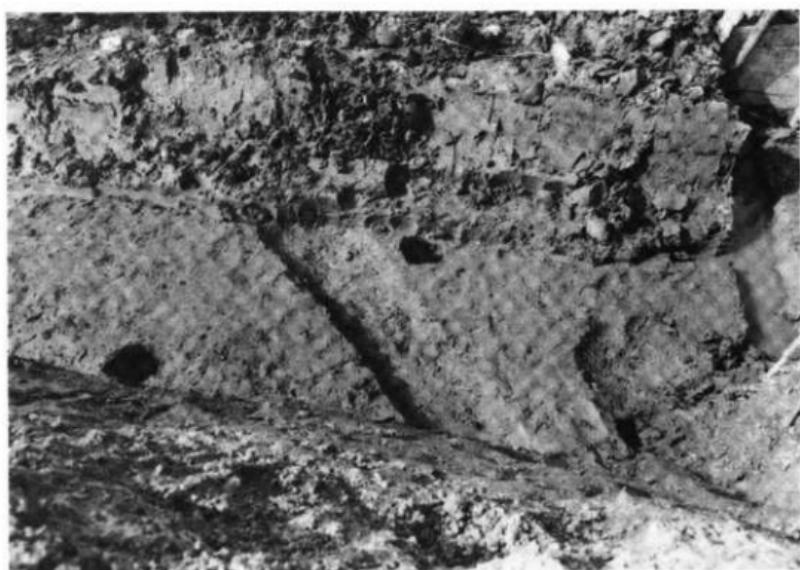
調査地全景（東より）



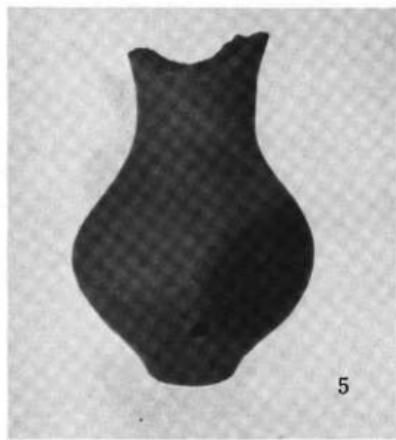
S P 6 柱根検出状況（西より）



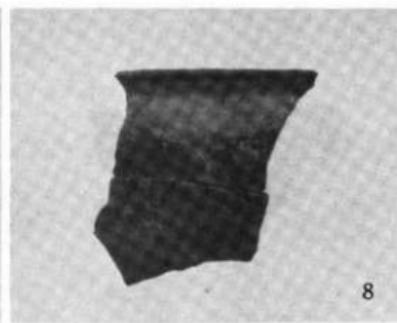
SK 1 検出状況（南より）



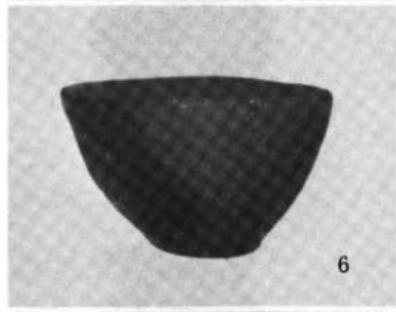
SB 1・SD 3 検出状況（南より）



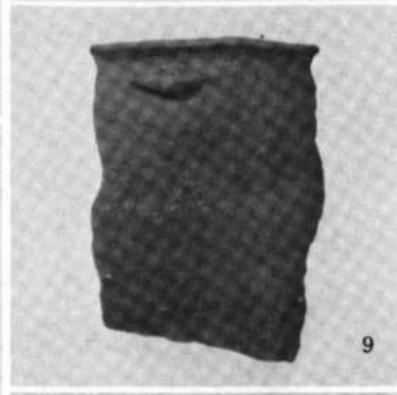
5



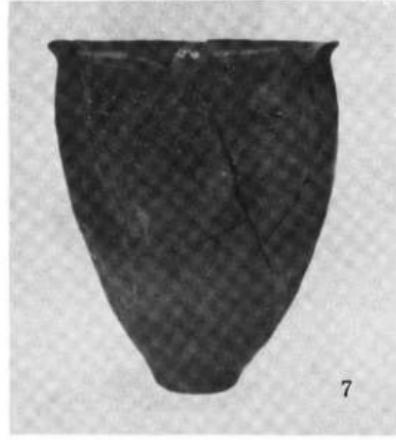
8



6



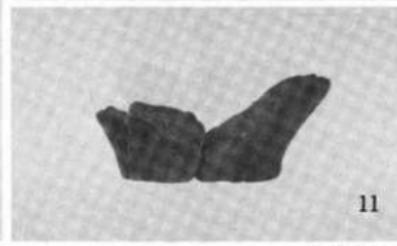
9



7

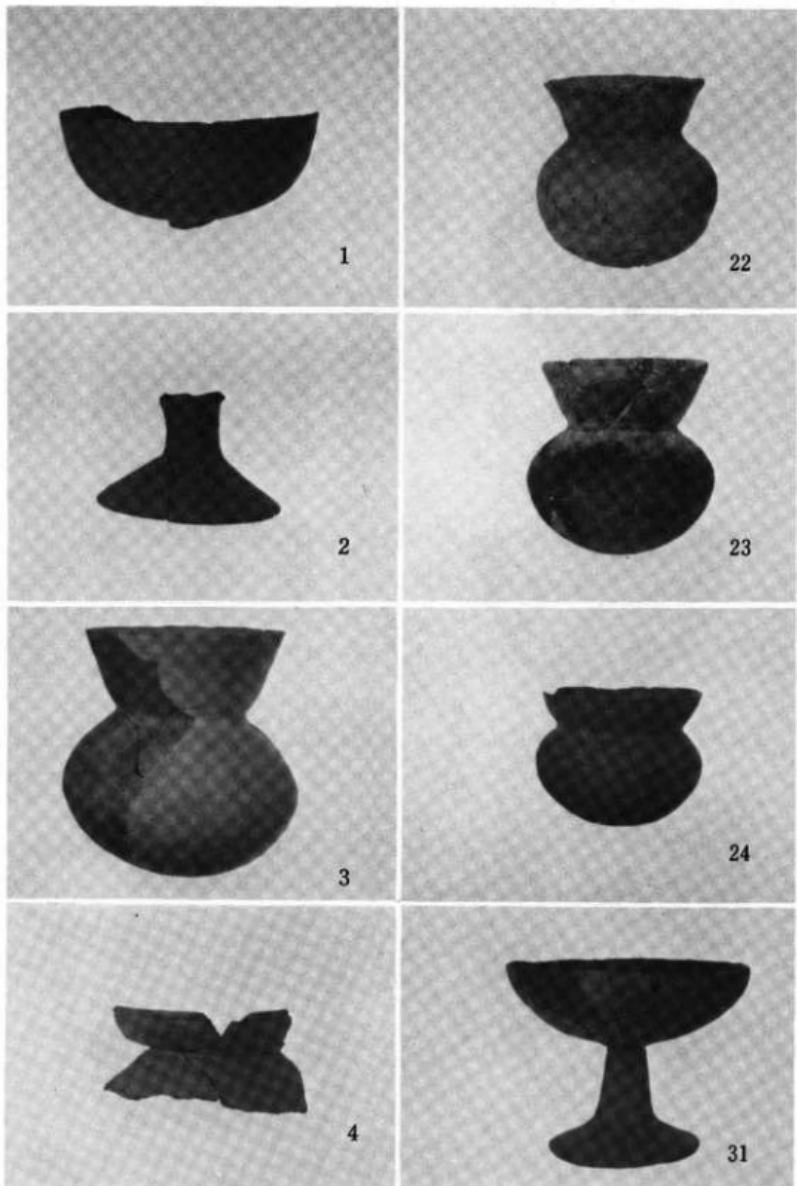


10



11

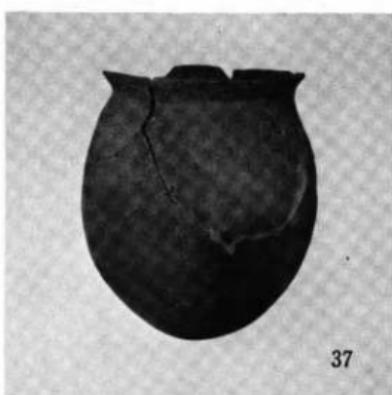
弥生式土器



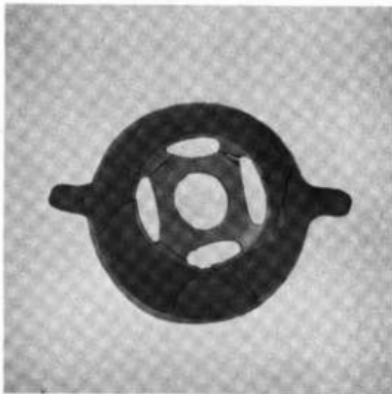
土師器



32



37

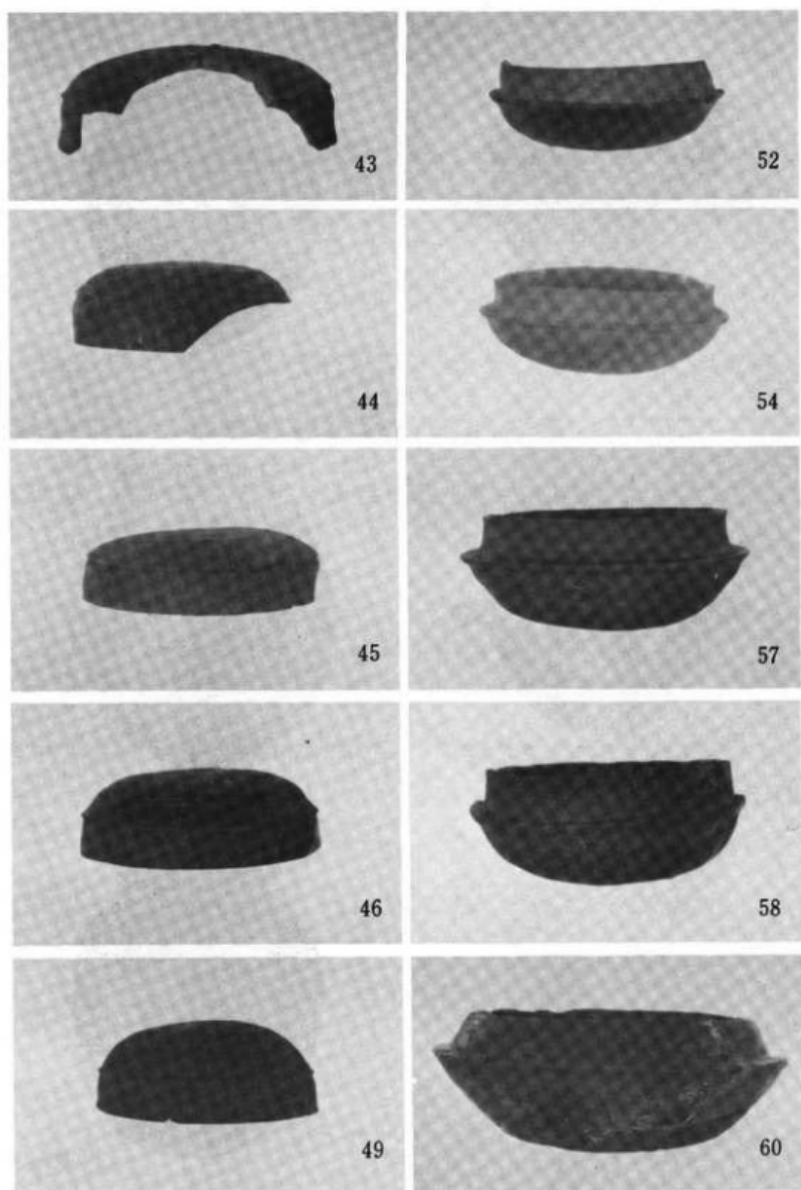


38



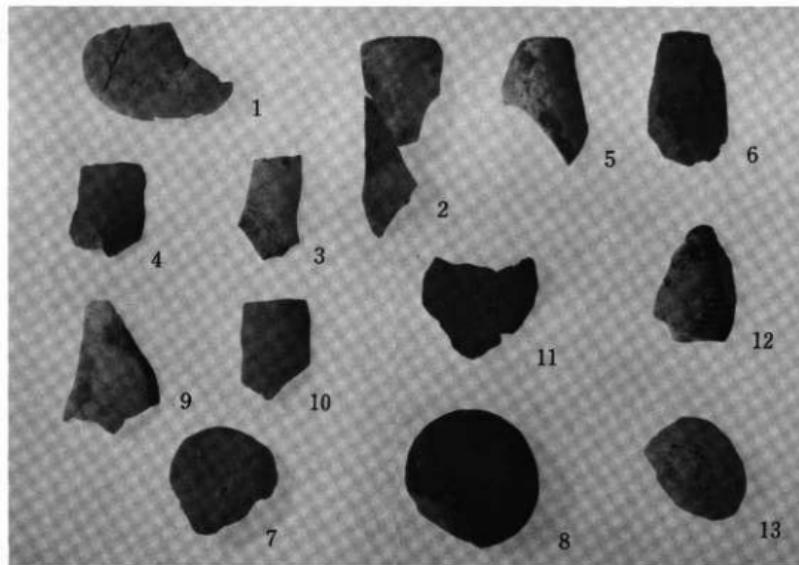
41

土師器



須恵器





製塙土器



同上 内面

第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市西木の本4丁目11番地において実施した、防衛省宿舎建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年6月3日から7月11日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、米田敏幸・原田昌則が現地を担当した。なお、調査にあたっては中野慶太・野田雅彦・仰花田建設の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のはか成海佳子・池田まゆみ(遺物尖削・トレース)があたり、執筆はI・IIを米田敏幸、IIIは成海佳子が担当した。

本 文 目 次

I 調査の目的と経過	111
II 調査の概要	118
1) 層序と年代	118
2) 平安時代埋没水田址の調査	118
3) 古墳時代遺構面の調査	115
III 出土遺物観察表	120

挿図目次

図1 調査地周辺図.....	111
図2 トレンチ設定図.....	112
図3 土層模式図.....	113
図4 水田上面出土遺物実測図.....	114
図5 SK1 平断面図.....	115
図6 SK1 出土須恵器実測図.....	116
図7 平面図(折込).....	117~118
図8 SK1 出土土師器実測図.....	119

図版目次

図版1 調査地全景 古墳時代遺構面	図版3 水田全図 水田拡張区
図版2 土坡遺物出土状況 同上 完掘	図版4 上坡出土遺物

第4章 八尾南遺跡（西木の本4丁目11番地）

I 調査の目的と経過

八尾南遺跡は八尾市木の本・西木の本・若林町に所在する縄文時代から鎌倉時代に至る複合集落遺跡であり、昭和53年～54年にに行なわれた地下鉄谷町線建設に伴なう事前発掘調査により、古墳時代を中心とする数多くの造構群が検出され、当遺跡が河内古代史を復元する上で重要な位置を占めていることが明らかとなった。

西木の本4丁目はこの八尾南遺跡の北辺部にあたり、昭和55年度の八尾南遺跡範囲確認調査で、この地点に平安時代の水田址および古墳時代の遺物包含層が存在することが確かめられていた。ところが、西木の本4丁目の旧陸軍省兵舎跡地に防衛庁防衛施設局より、昭和56年度に自衛隊八尾駐屯地の宿舎の建設を計画したいとの申し出があり、この旨が文化庁長官に通知された。これによって文化庁・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会は予想される地下造構の保存について防衛庁と再三にわたる協議を行なった結果、宿舎建設に先立って事前に記録保存を行なうことを決定した。八尾市教育委員会は昭和56年7月3日より、約1ヶ月半にわたる発掘調査を施行した。



図1 調査地周辺図

発掘調査は、基礎工事によって遺構の破壊が予想されている宿舎建設予定地を対象として行った。調査地は西木の本4丁目11番地で、昭和55年度範囲確認調査で発掘を行なった第4調査区の北に隣接する土地である。したがって、あらかじめ地下2.0mに平安時代の水田遺構、地下2.4mに古墳時代の遺物包含層が埋没していることが判明していた。そのため、建物予定地を中心幅8m・長さ54mの東西に長いトレンチを設定し、平安時代水田遺構上面に被る乳褐色砂層直上までの約1.7mを機械掘削、以下は手掘りによる精査を行なった。

調査は2度の工程に分けて実施した。まず、第1工程では平安時代埋没水田址の検出を行ない、当時の水田区画および水田面の状況を確認することを目的としてトレンチ上面より垂直に掘り下げて調査を行なった。第2工程は平安時代水田の調査終了後約40cm下の古墳時代の遺物包含層を掘り下げ、古墳時代の遺構の有無の確認を目的としたが、掘り下げによりかなりの出水とトレンチ壁面の崩壊が予想されたため、第1調査面に幅1mの段を残して幅5m・長さ50mのトレンチによって第2調査面までの掘り下げを行なった。また、調査途中で昭和55年度

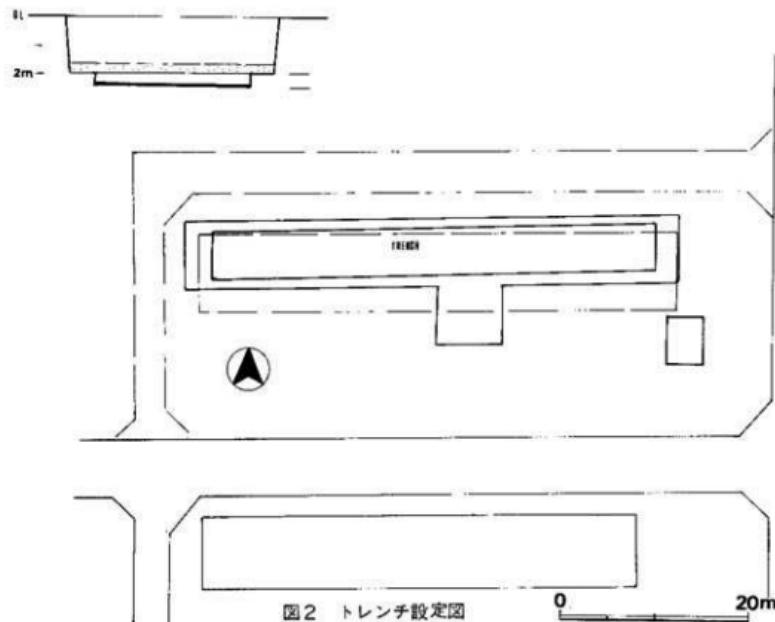


図2 トレンチ設定図

調査区との関連を確認する必要が生じたため、トレント中央部分を南へ6m拡張した。これら全工程終了までに約1ヶ月半、のべ33日を要した。調査の記録は、各工程終了のつど写真撮影を行ない、実測図を作成した。

II 調査の概要

1) 層序と年代

当調査地区の層序は基本的に8層に分けることができる。

地表下100cmまでは第1層の盛土で第2層は近年まで耕作されていた厚さ20cmの旧耕土である。第3層灰緑色砂質土は厚さ15cm、第4層灰色砂質土は厚さ16cmで前者はほとんど同質の状況で旧水田の床となっている。

第5層は灰色粘土で厚さ12cm、第6層は灰黄色粘砂で厚さ24cm、遺物はほとんど含まれていない。

第7層淡灰色砂は平安時代埋没水田の上に被っており、洪水により一挙に堆積した状況を示している。この層中には同時代の土器の細片が含まれている。この層の厚さは西側が14cm、東側で28cmである。

第8層暗灰色粘土は平安時代埋没水田の耕作土である。この上面に水田畔や足跡などの遺構が残存している。厚さは西側で40cm、東側で50cmとなっている。粘性はかなり高い。

第9層黒灰色砂粘土は約10cmと薄く、古墳時代中期の包含層であり、土師器片や須恵器片を含んでいる。包含状況は中央付近が最も多く、東側では希薄である。第10層乳灰色砂質土は古墳時代遺構のベースであり、この層の上面より溝や土塁などが掘り込まれている。

2) 平安時代埋没水田址の調査

水田面に被る淡灰色砂層は微砂・細砂・粗砂が入り混じっており、これらを注意深く取り除

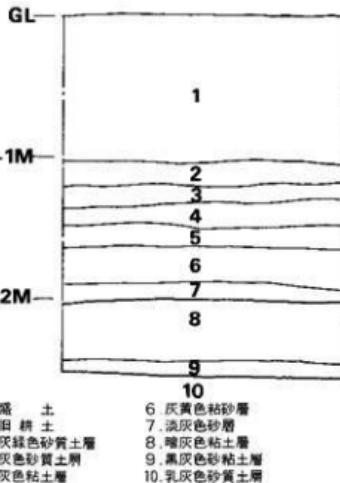


図3 土層柱状図

1



2



3
0 5cm

図4 水田上面出土遺物実測図

くと、畦畔や足跡をはじめとする水田遺構を検出することができた。この調査によって検出した畦畔は4本、水田の枚数は6枚である。この他、水口・落ち込み状遺構・流水路などがある。水田の標高はO P +9.50~9.60cmである。この水田は、水田直上に被る淡灰色砂層から出土した黒色土器など(図4)により、平安時代に埋没したことが判る。

1. 畦畔

1号畦畔

昭和55年度に実施した八尾南遺跡範囲確認調査で検出した畦畔で、当調査地区東部の南側を東西方向にのびる。トレンチ南側拡張区で、この畦畔の西端部分を検出した。幅40cm・高さ16cm・長さ26.5m以上を測る。西端は2号畦畔とT字形に接続するが、その手前約150cmにわたって途切れしており、水口になっている。この部分は南北方向の流路状遺構が存在するためにあけられたものと考えられる。なお、昭和55年度の調査で東側にも水口が存在することが判っている。

2号畦畔

調査区の中央東側を南北方向にのびる畦畔で、幅40~90cm・高さ27cm・長さ13m以上を測る。畦畔には、流水による凹凸がみられる。拡張区で東よりのびる1号畦畔と接続するが、接続点の南側で40cmにわたって途切れおり、水口になるものかと思われる。

3号畦畔

調査区の中央西側を南北方向にのびる畦畔で、幅30~70cm・高さ30cm・長さ7.5m以上を測る。この畦畔は中間で4号畦畔と接続するが、接続点の北側50cmにわたって途切れ、水口になる。また、接続点の南と北で食い違いになっており、この畦畔が直線的にのびていないことを示す。

4号畦畔

3号畦畔の3m東より東西にのび、西は調査区外へ至る。幅30~80cm・高さ18cm以上、長さ21.5m以上を測る。畦畔は崩壊が著しく、旧状をほとんどとどめていない。

2. 水田面

水田A

1号畦畔と2号畦畔に区画された南側の水田で、昭和55年度の調査ではこの水田の北東側の一部を検出しているが、今回は南西側の一部を検出した。部分的な検出のため、規模等は不明

であるが、水田面には多数の足跡が残存している。

水田面B

1号畦畔と2号畦畔に区画された南側の水田で、トレンチの西半部26.5mの間はこの区画の中にはいる。この水田面上には、西側の一部を除いて足跡は概して少ない。

水田面C

2号畦畔と3号畦畔に挟まれた東西11mの区画で、水田面のレベルは他の水田のレベルより低く、流水を被った形跡が強くみられ、粗砂が水田面上に厚く堆積する。

水田面D

3号畦畔と4号畦畔に区画された南側の水田で、足跡は点在する程度である。

水田面E

3号畦畔と4号畦畔に区画された北側の水田で、南東側の4号畦畔に沿って径90cm・深さ16cmの窪み状の遺構が存在し、ここにも砂の堆積がみられた。足跡は調査区西側に点在する。

3) 古墳時代遺構面の調査

水田耕作土下には厚さ5~10cmの黒灰色粘砂層がみられ、古墳時代の遺物包含層になっている。この層を取り払うと古墳時代の上塙や溝などの遺構群を検出できた。

SK1

長径160cm・短径110cm・深さ40cmの長円形を呈する土塙で、乳灰色砂質土に切り込んでいるため、漏水が著しい。この上塙上層の暗灰色粘土および濃灰色粘土内からは、多数の土器が発出土した。

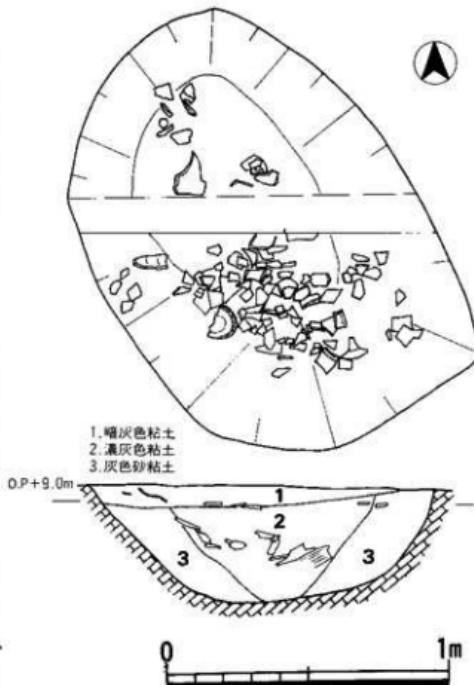


図5 SK1 平断面図

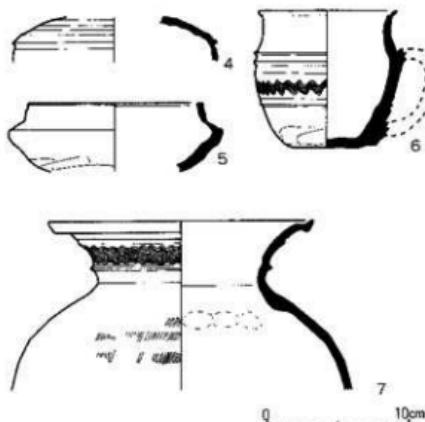


図6 SK1出土須恵器実測図

器種には須恵器蓋杯(4・5)、把手付椀(6)、土師器平底鉢(9・10)・高杯(11・12)・甌(13~16)などがある。

これらは同時性の高い一括遺物で、須恵器の形態から、陶邑編年によるI型式2段階の時期に比定できる資料である。特に土師器裏には長胴化の傾向が著しく、縦方向に行なう粗いハケ目は土師器平底とともに特徴的である。

このことは、八尾南遺跡SE1・SE2・SE5・SE27出土の資料に後出する資料として興味深い特徴を示しているといえよう。

(注記)

- 1 大阪府教育委員会「陶邑III」大阪府文化財調査報告書30号 1978年
- 2 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書 1981年

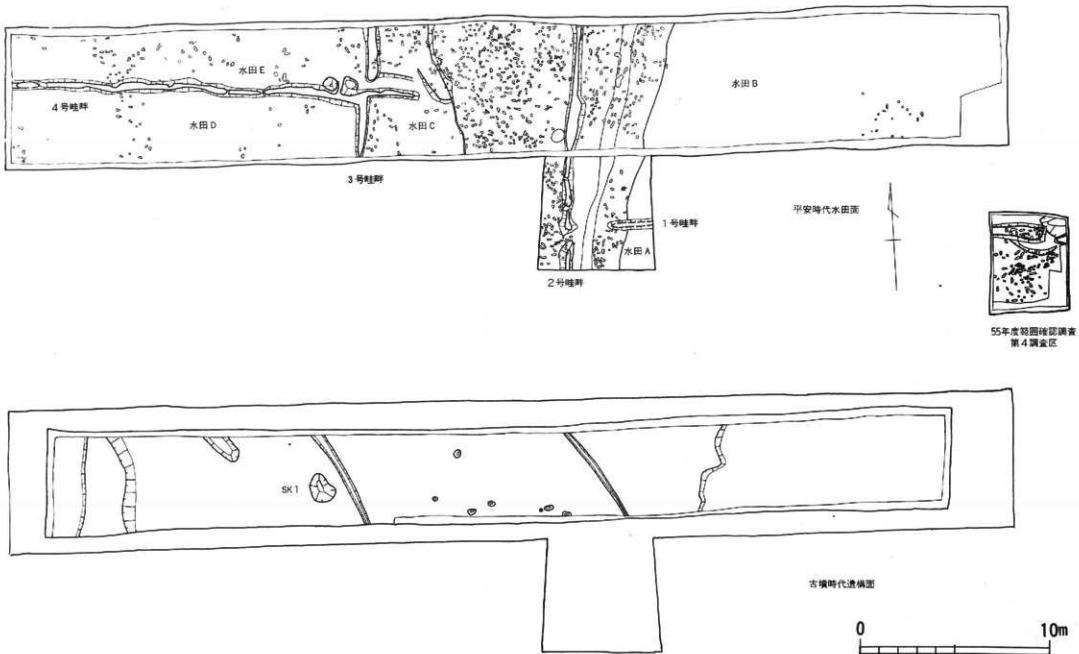


図7 平面図

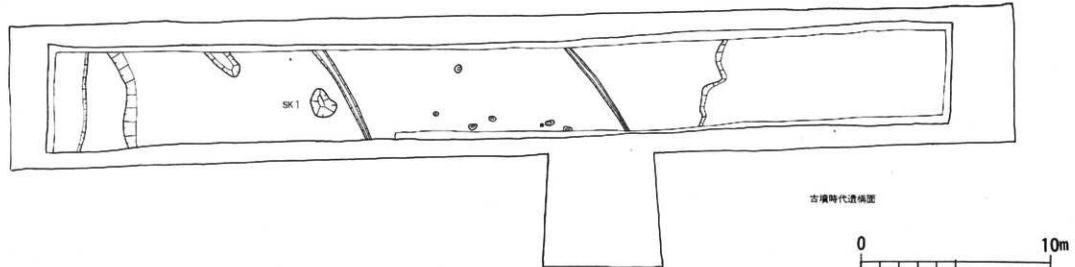
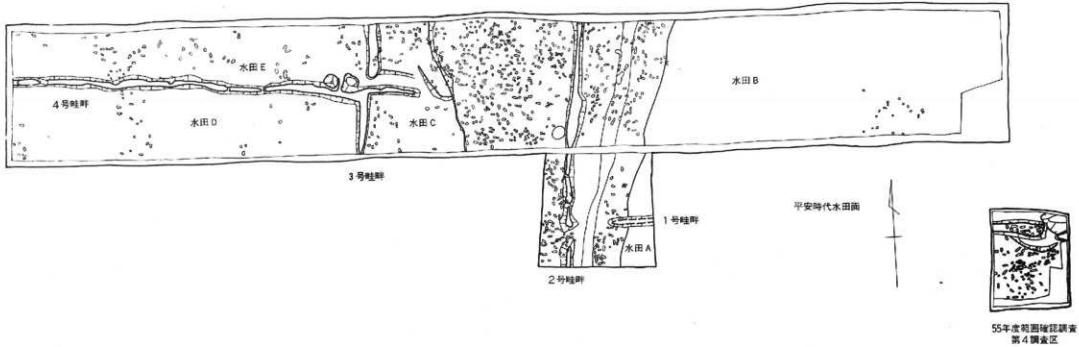


図7 平面図

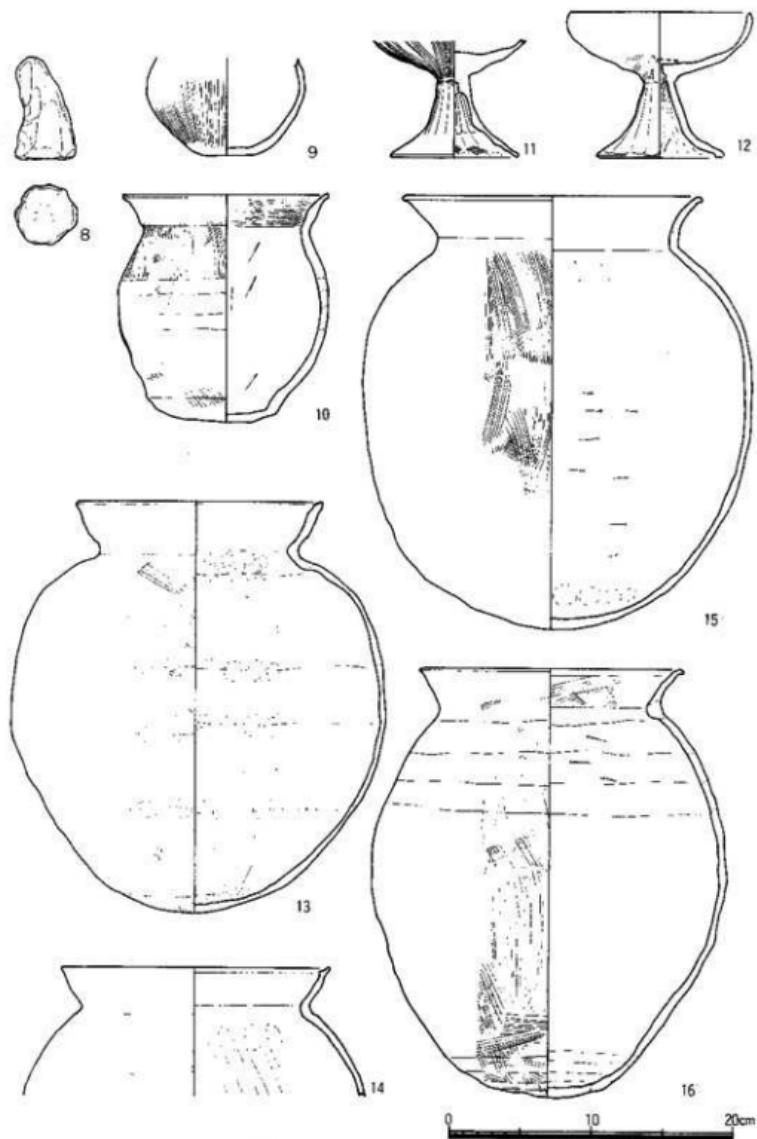


図8 SK1出土土器物実測図

III 出土遺物觀察表

1) 中世遺物

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・黏土・焼成・備考
1	土師質碗 高古墳 木田上田	高古墳 6.8	高古部は「へ」の字形に開く。高古端部は丸く終る。	高古部内外面ヨコナナ子調整、内底面ナナ。	色調 乳白色 粘土 良好 焼成 良
2	黒色土器碗 高台地 水田上面	6.6	重厚な高台で「へ」の字形に開き端部に至る。高台端部は外側に面取りが行なわれていて、やや尖り弧形で終る。内底面は水平面を作る。	体部外面及び高台部内外面ナナ。底面外面は指輪圧成形様ナナ。体部内面ヘラミガキ。	色調 黒色(内)茶褐色(外) 粘土 良好 焼成 良好 Aタイプ
3	黑色土器碗 高古墳 水田上面	8.2	高古部は、高くはげ面に貼り付けられている。高古端部はわずかに内傾し、平面を作る。	高古部内外面ナナ調整。底部内面は細かいヘラミガキ調整。	色調 黒色(内)茶褐色(外) 粘土 良好。小砂粒を散見する。 焼成 良好 Aタイプ

2) 須恵器

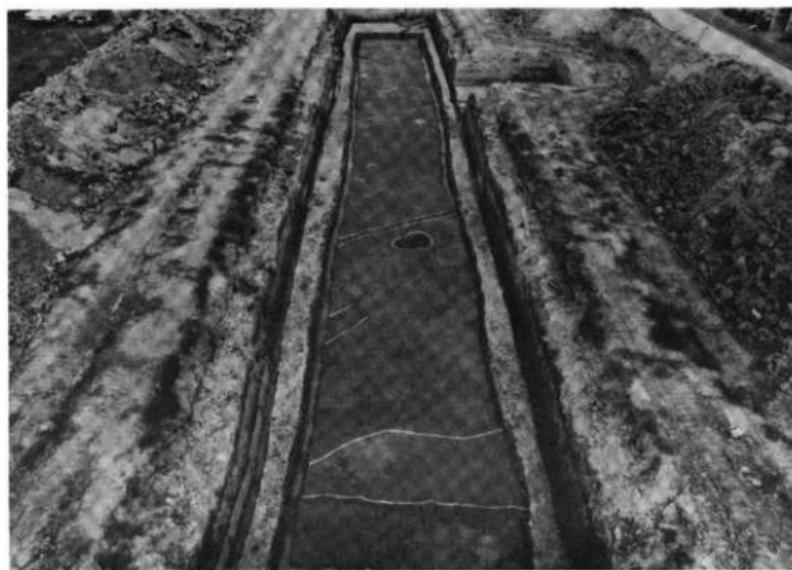
番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・黏土・焼成・備考
4	蓋杯(蓋) SK1	受部径 14.2	口縁部は軽く外反した後、ゆるやかに内傾して下る。 横は豊かくて丸く、口縁部との境に凹面を作る。	外面 天井部は被部端より0.6cm以上に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナナ調整。 内面 天井部は回転ナナ調整。	色調 青灰色 粘土 粘土、0.1~0.2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
5	蓋杯(身) SK1	受部径 15.2	口縁部は受部端から強く内傾した後、内上方に屈曲して縁部に至る。口縁端部は水平な面を有する。 受部は、ほぼ水平で外方向に突出しない。	外面 天井部は受部端より2cm以下静止ヘラケズリ調整。他は回転ナナ。 内面 天井部は回転ナナ調整。	色調 青灰色 粘土 粘土 焼成 良好堅緻
6	把手付椀 器 瓢 SK1	口 径 9.8 高 9.7	口縁部はゆるやかに外反して立ち上がり、縁部上位と下位に凸凹部を作り口縁部に至る。 口縁部はやや内凹気味に外傾し、丸く終る縁部に至る。凸凹部の間にほぼ1本1条の筋状の凹部がある。全体部は口縁部より底部へ下り平底の底部に至る。側面の把手位置と下位に把手の貼り付け跡がある。	外面 天井部は低部丁半ナナ子調整。底部は指輪圧成形の後ナナ。 内面 天井部は回転ナナ調整。 内底面はナナ調整。	色調 青灰色 粘土 やや堅、小砂粒を散見する。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
7	甕 SK1	口 径 18.6	口縁部より外反して立ち上がり、縁部上位と下位に凸凹部を作り口縁部に至る。 口縁部はやや内凹気味に外傾し、丸く終る縁部に至る。凸凹部の間にほぼ10本1条の筋状の凹部がある。 底部は外傾した後、内寄して折り曲がり底部に至る。	外面 天井部は口縁部が回転ナナ子調整。柄部は平行タクキの後、回転ナナ調整。 内面 天井部は底部が指輪圧成形後、回転ナナ子調整。	色調 黒灰色(口周部) 青灰色 粘土 粘土、0.1~0.2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 周部、胴部の一部に灰かぶり。

3) 土器

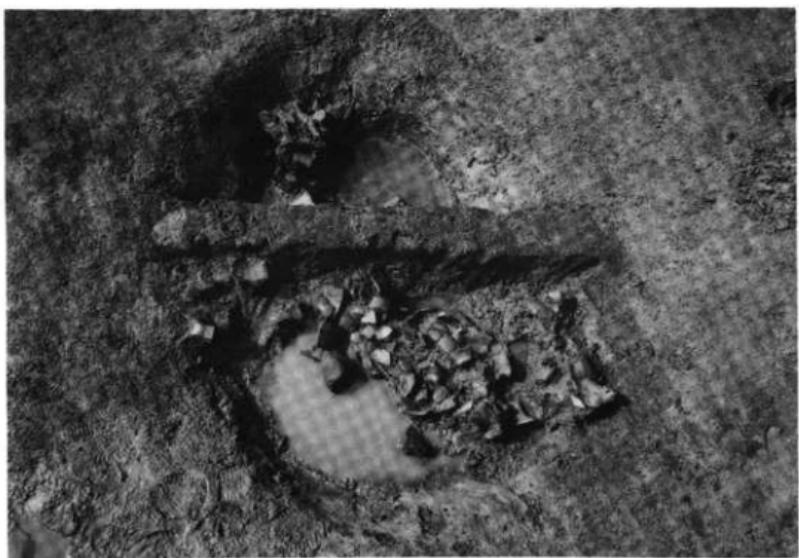
番号	部種 出土位置	法 番(cm)	形 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成・備考
9	鉢	最大径 11.2	球形に近い体部下位のみ直方。底部はわずかに平坦な面をもつ。	外表面 横方向ハケ。 内表面 ヘラナデ。	色調 乳白色 胎土 やや不良 焼成 精良 外表面に縦付着。
	SK1				
10	平底鉢	口 径 14.3 最大径 14.8 器 高 16.3	上外方へ外反する口縁部。口縁部は薄くなり、外へつまむ。体部は中位に最大径をもつが、盛りは少ない。底部はやや丸みをもつ平底。	外表面 横方向細かいハケの後の口縁部ヨコナデ。体部下半ナデ。 内表面 口縁部横方向ハケ。体部ヘラナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 精良、チャート・石灰 多く含む。 焼成 良
	SK1				
11	高杯	幅 径 8.8	比較的平進な杯底部を持つ。口縁部を外反する。肩部はゆるやかに開く。杯底部からわずかに屈曲して拵がる底部とからなる。握縁部は薄くなり、丸味のある面となる。	外表面 杯底放射状ハケ。柱状部ヘラナデ。握部はヨコナデであろう。 内表面 杯底ナデ。柱状部しまり目。握部指印ナデの後ハケ。	色調 乳白色 胎土 精良、長石の粒状多く含む。 焼成 良好
	SK1				
12	高杯	口 径 12.5 最大径 8.6 器 高 10.3	浅いやや球形を呈する杯部。口縁部は丸みを持てて内凹する。肩部は杯状部と杯部の境を持たずにゆるやかに広がる。握縁部近くでは若干内凹し、施部は水平な面をつくる。	外表面 杯底放射状ハケ。口縁部ヨコナデ。柱状部ヘラナデ。握部ヨコナデであろう。 内表面 杯底ナデ。口縁部ヨコナデ。柱状部しまり目。握部ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 良 器表の粉飾者しい。
	SK1				
13	鉢	口 径 17.1 最大径 26.5 器 高 29.2	内にゆるい棱を持ち、上外方へ内凹して伸びる口縁部。口縁部は外へ肥厚し、内凹する平面をもつ。体部は中位に最大径を持ち、肩の張る細平な倒卵形を呈する。	外表面 口縁部ヨコナデ。体部斜方向粗いハケ。接合部ヒビナデ。 内表面 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後ヒビナデ。接合部ヒビナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗く、長石・石灰、チャート等多く含む。 焼成 良 外表面中位に縦付着。
	SK1				
14	盤	口 径 18.9	内にゆるい棱を持ち、上外方へ内凹する伸びる口縁部。口縁部は内凹する凹面を成す。	外表面 口縁部ヨコナデ。体部斜方向粗いハケ。 内表面 口縁部ヨコナデ。体部ヒビナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 やや粗く、長石・石灰、チャート等多く含む。 焼成 良
	SK1				
15	盤	口 径 20.4 最大径 27.4 器 高 30.6	内にゆるい棱を持ち、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は外へ肥厚し、外側する平凹面を成す。体部は上位から下位までゆるく張る長卵形である。	外表面 口縁部ヨコナデ。体部上半横方向粗いハケ。下半ナデ。 内表面 口縁部ヨコナデ。体部横方向ヘラケズリ(左→右)の後上半をナデ底部には箇跡压痕が顯著に現れる。	色調 淡灰褐色 胎土 やや粗く、長石・石灰、チャート等多く含む。 焼成 良 外表面中位に縦付着。
	SK1				
16	盤	口 径 18.0 最大径 25.0 器 高 30.4	内にゆるい棱を持ち、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は外へ肥厚し、丸く終わる。体部は盛りの小さい長卵形を呈す。	外表面 粗いハケの後口縁部、肩部の一部分ヨコナデ。 内表面 口縁部横方向ハケの後底部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後上半ヘラナデ。下半ヒビナデ底部に明顯な压痕が現れる。	色調 淡灰褐色・乳白色 胎土 やや粗く、チャート多 く含む。 焼成 やや不良 外表面中位に縦付着。接合痕明瞭にみられる。
	SK1				



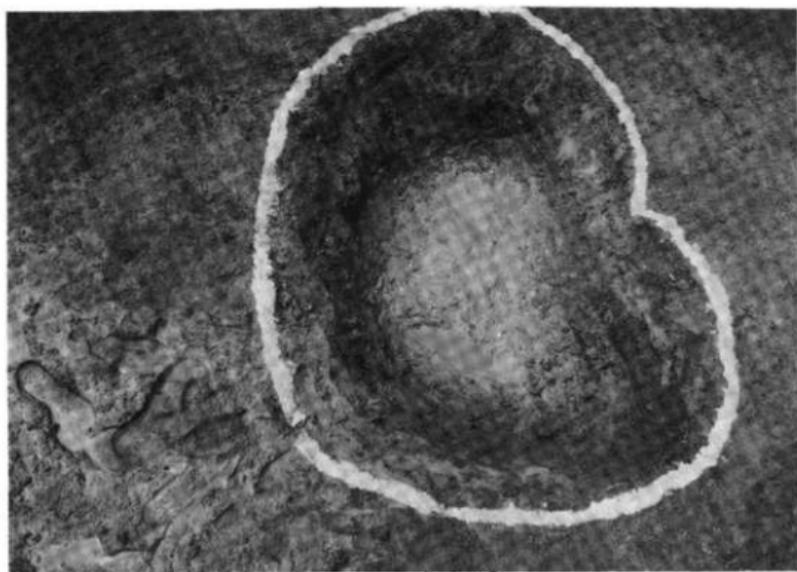
調査地全景（西より）



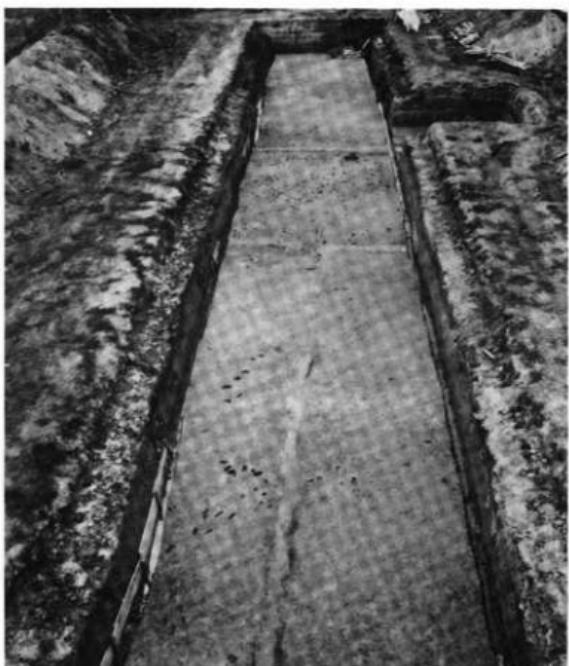
古墳時代遺構面（西より）



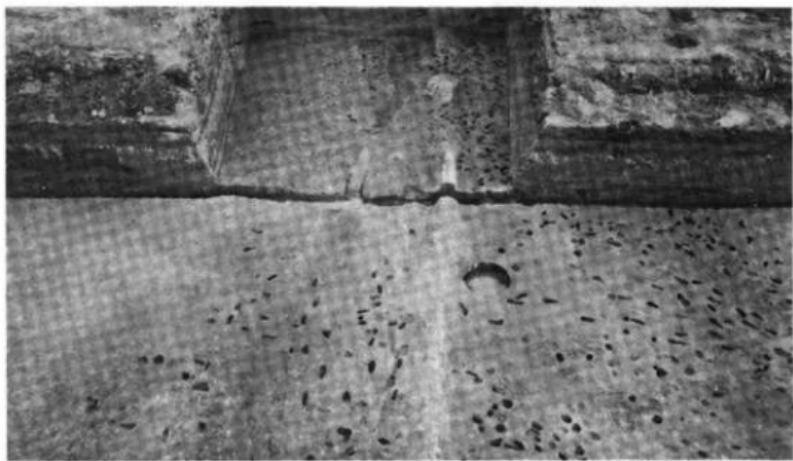
SK 1 遺物出土状況（東より）



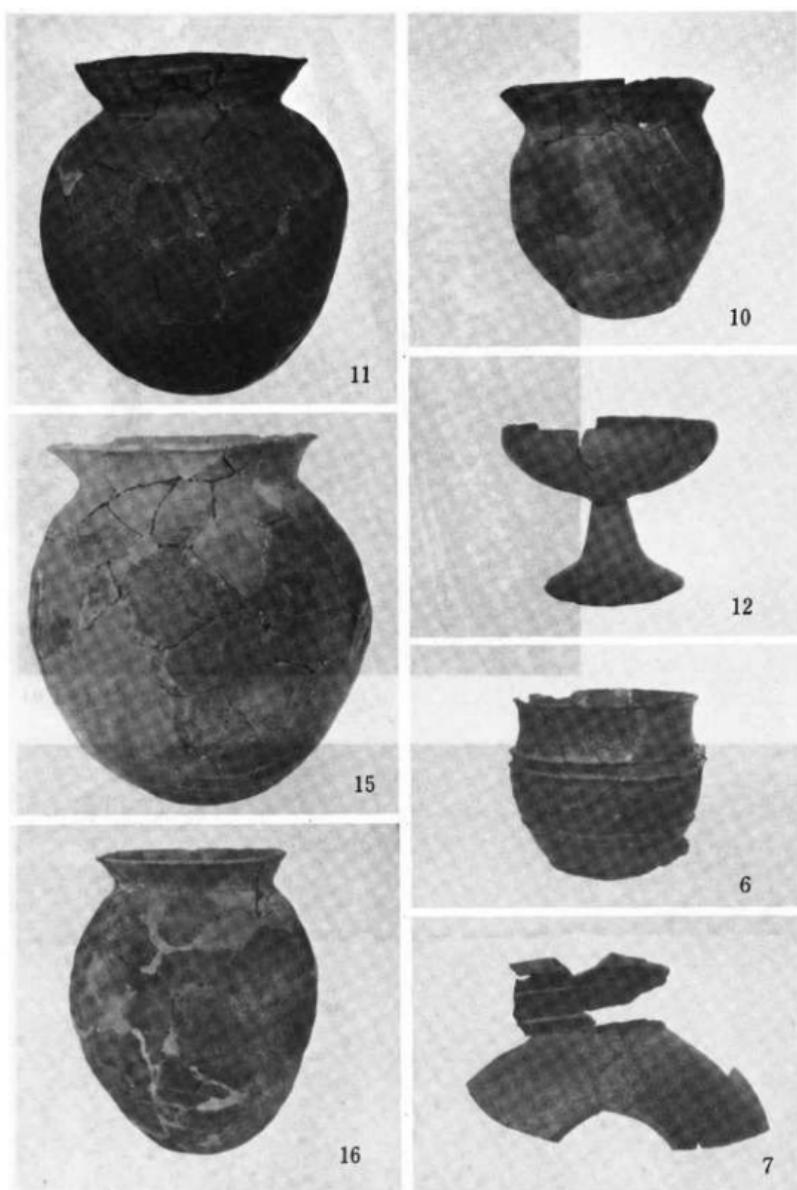
同上 完掘



水田全景（西より）



水田拡張区（北より）



SK 1 出土遺物

第5章 美園遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1. 本書は、八尾市美園町2丁目48-1において実施した、モリト株式会社倉庫建設に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年7月15日より8月20日にかけて実施した。
1. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が行ない、米田敏幸が現地を担当した。なお、調査にあたっては、駒沢敦・中野慶太・西辻正信・徳奥村組の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか駒沢敦(遺物実測)、池田まゆみ(トーレース)が行ない、執筆は米田敏幸が担当した。

本 文 目 次

I 調査の目的と経過	129
II 検出遺構	129
III 出土遺物	130
IV まとめ	132

挿図目次

図1 調査地周辺図	129
図2 S E 1 平断面	130
図3 平断面	133
図4 出土遺物実測図	134
図5 S E 1 出土遺物実測図	135

図版目次

図版1 近世遺構面
古墳時代遺構面

図版2 S E 1 遺物出土状況
S E 1 完掘

第5章 美園遺跡(美園町2丁目48)

I 調査の目的と経過

美園遺跡は八尾市美園町一帯に所在する弥生時代から鎌倉時代の遺跡で、旧大和川の本流である長瀬川右岸の沖積地に位置する。

北には古墳時代の集落址である友井東遺跡、^①東には平安時代後期の寺院址と推定される宮町遺跡があり、南には鶴大阪文化財センターが実施した発掘調査で古墳時代の竪穴式住居、中世の井戸等が検出された佐堂遺跡が隣接している。^③

当遺跡は、鶴大阪文化財センターの最近の調査で、家形埴輪を備えた古墳や、古墳前期の集落址が発見されたことで知られる。^④

今回の調査地は、この調査地の東方約100m地点に位置している。調査期間は昭和56年7月15日から8月20日までである。



図1 調査地周辺図

II 検出遺構

検出した遺構は近世の井戸、平安時代の河道跡(SD1)、古墳時代の建物(SB1)・溝(SD2~11)、井戸(SE1)等である。ここでは古墳時代の遺構の概略を述べる。古墳時代の遺構は、GL-3mの古墳時代の遺物を含む黒灰色粘土を除去したところで、TP+4.4mの黄灰色砂質土または粘土をベースに掘り込まれている。

SB1(建物)

2間×3間の掘立柱建物であろうと思われる。東西4.2m・南北5.9mを測り、主軸方向はN-14-Wを指す。柱穴は総個数7個を数え、掘形は径30cm程度の円形である。北側と東側の柱穴は明確にできなかった。

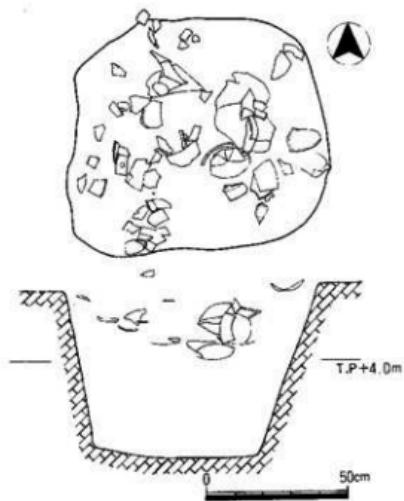


図2 SE1 平断面図

SD 2(大溝)

調査地の西隣、SB 1の西6mの地点で建物に平行する南北の溝を検出した。溝幅は2m以上と推定され、深さは50cmを測る。溝内からは、庄内式の土器が出土する。

SD 3～SD 11(小溝)

SB 1の主軸やSD 2に直交する9本の小溝を検出した。いずれも幅50cm以下で浅く、0.5～1m間隔で走る。溝内より布留式の土器が出土する。

SE 1(井戸)

SB 1とSD 2の間に位置する素掘りの井戸で、断面は逆台形を呈する。径90cm・深さ60cmを測る。この井戸の上層より、布留式の古相に属する土器が一括で出土した。

III 出土遺物

出土遺物は、包含層および各遺構から出土している。

包含層出土遺物(1～14)

包含層を形成する黒灰色粘土層は上層と下層とに分けることができる。上層からは古墳時代後期の遺物(1～13)、下層からは古墳時代前期の遺物(14)が出土している。

(1)は須恵器杯蓋で、天井部は低く平坦で内湾して口縁部に至り端部は丸い。外面は口縁部より天井部付近まで回転ナデ、天井部回転ヘラケズリを行なう。須恵器杯身(2～6)は、内傾する短い立ち上がりをもち、受部は上外方へのびる。杯底部は丸いもの(1・2・4)と平坦で深いもの(3・5)がみられる。いずれも外面受部下まで回転ナデ調整、他は回転ヘラケズリを行なう。内面はすべて回転ナデ、色調は灰色～淡灰色、胎土は緻密で焼成は良好である。(7)は須恵器有蓋高杯で、短く開く脚部をもつ。脚部は内外面ヨコナデ、杯部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整、色調は乳灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

(8)は土師器の小型塔である。扁平な球形を呈する胴部よりわずかに外反する短かい口縁部をもつもので、体部外面を指頭ナデ、口縁付近および内面はヨコナデ調整する。色調は赤褐

色で胎土は精良である。

(9~13)は土器高杯で、杯部は小さな杯底部より屈曲し、内側にのびる口縁部をもつ。いずれも屈曲部にわずかな段を有し、口縁端部は内傾ぎみにおさめる。脚部は中空の長い柱状部と屈曲して開く裾部をもつ。杯部は外面ともヨコナデ、脚部は外面縱方向のヘラナデ、内面は縱方向の強いユビナデを行なう。色調はいずれも赤褐色で、胎土は精良である。これらは形態・技法がさわめて類似している。

(14)は土器高杯で、球形の胴部より内側して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は平坦面をもって内厚する。器壁は薄く、体部内面はヘラケズリ、外面には細かい横方向のハケ目がみられる。口縁部は内外面ともヨコナデを行なう。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。

S D 2 出土遺物(15~18)

S D 2 の埋土からは、庄内式の古式土器が出土している。(15~17)は、いわゆる庄内甕で、体部より鋭く屈曲して直線的にのびる口縁部である。端部は上方へのつまみ上げがみられる。色調は暗褐色~淡褐色を呈し、胎土には角閃石の微粒を多く含む。(18)は複合口縁甕であろう。球形の体部より直立して立つ頭部を有する。体部内面はヘラケズリ、外面はヘラナデ調整を行なう。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。

S E 1 出土遺物(20~28)

井戸の一括遺物には、甕・器台・鉢・甕の各器種がみられる。

(20)は短頸甕で、球形を呈する大きな体部より、直立して外反ぎみにのびる直口の口縁部をもつ。外面は粗い不整方向のハケ目がみられ内面はヘラケズリする。色調は淡黄褐色、胎土には粗砂粒を含む。(21)は小型丸底甕で、扁球形の体部よりくびれ、斜外方に大きく開く口縁部をもつ。外面および口縁部内面は横方向の細かいヘラミガキを行なう。色調は淡赤褐色、胎土は精良で、器表に赤色顔料が残る。

(22・23)は小型器台の受部と脚部である。受部は基部より内窪して口縁部に至る浅い皿状を呈し、端部はつまみ上げぎみにおわる。外面を横方向のヘラミガキ、見込み部は放射状のヘラミガキで調整する。脚部は円錐状に開き、中位の4方に円孔をあける。外面は縱方向のヘラナデ、色調は(22)は赤褐色、(23)は灰褐色を呈し、胎土はいずれも精良である。(24)は小型鉢で、半球形の体部に2段に屈曲する口縁部を持つ。外面は底部付近ヘラケズリ、他は横方向の細かいヘラミガキを行ない、内面は口縁付近のみ横方向ヘラミガキがみられる。

甕は庄内系甕(25・26)と布留系甕(27・28)とに分けられる。庄内系甕は胴部より屈曲し、外反ぎみに開く口縁部をもつもので、端部はつまみ上げておわる。体部上半部外面には右上がり

の極細のタタキが明瞭に残り、下半部より左上へのハケ調整がみられる。内面は横方向にヘラケズリをする。胎土には砂粒を多く含む。(26)は赤色顔料を塗布する。布留器の裏(27・28)は、球形の体部に内窓として立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は肥厚する。外面には縦方向の細かいハケがみられ、内面はヘラケズリをする。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含む。(28)は体部外面に煤が付着する。

その他の出土遺物

(19)は、調査終了後施工者により発見され届け出された遺物である。出土位置は不明であるがほぼ完成品である。¹⁵⁾体部は上ぶくらみの球形を呈し、外反ぎみに立ち上がってのびる直口の口縁部を有する。外面には左上への細かいハケ目がみられ、内面は下半部を斜方向、上半部を横方向のヘラケズリを行なう。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土には粗粒の角閃石が多く含まれる。

IV まとめ

ここで検出した遺構は、いずれも庄内式～布留式の古相の時期に比定できる。このことは、建物(S B 1)・溝(S D 2)・井戸(S E 1)が同時併存していた可能性を示しており、建物と溝が同一方位を示すことやこの両者の間に井戸が位置していることから、これら三者の間に密接な関連性が考えられる。このことは古墳時代の生活様式を解明する何らかの手がかりとなるものであろう。さらに、北150mで発掘された同時代の集落遺構や西100mに所在する美園古墳の存在も含めて、古墳時代の美園遺跡の解明に重要な資料を提示している。

(注記)

- 1 神大阪文化財センター「友井東遺跡現地説明会資料」 1981年
- 2 八尾市教育委員会「宮町遺跡発掘調査概要」 1982年
- 3 神大阪文化財センター「近畿自動車道天理吹田線予定地内風生堂他5遺跡第1次発掘調査報告書」 1975年
- 4 神大阪文化財センター「美園遺跡現地説明会資料」 1981年
- 5 今回の調査は遺構面が地表下約3mにあり、工事によって破壊される部分すべてを調査することは技術的に困難であった。とはいっても現状では記録保存として充分な調査を行なっていないことは認めざるを得ない。多忙であるにもかかわらず当遺物を届けていただいた工事関係者の方々の善意と良識ある行為には、調査担当者として感謝にたえない。

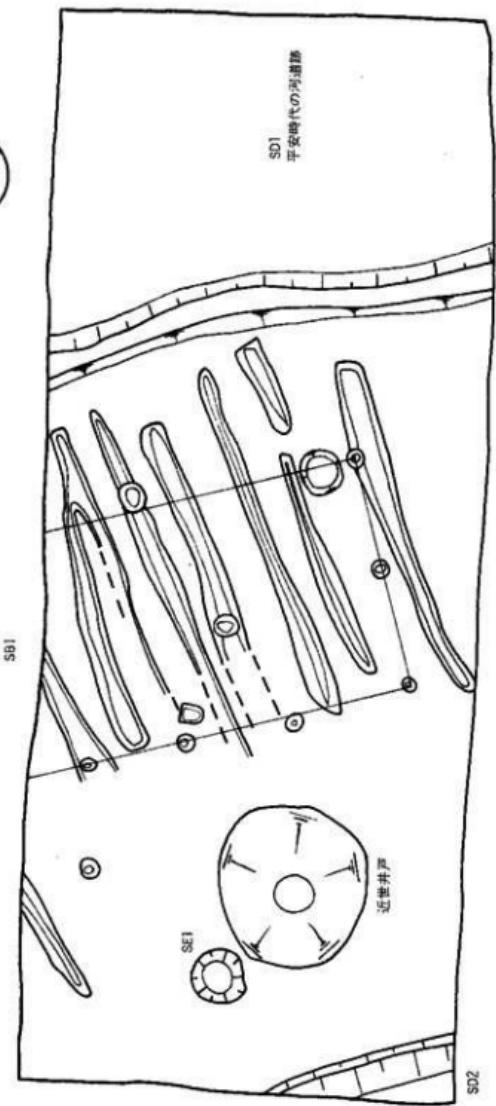


図3 平面図

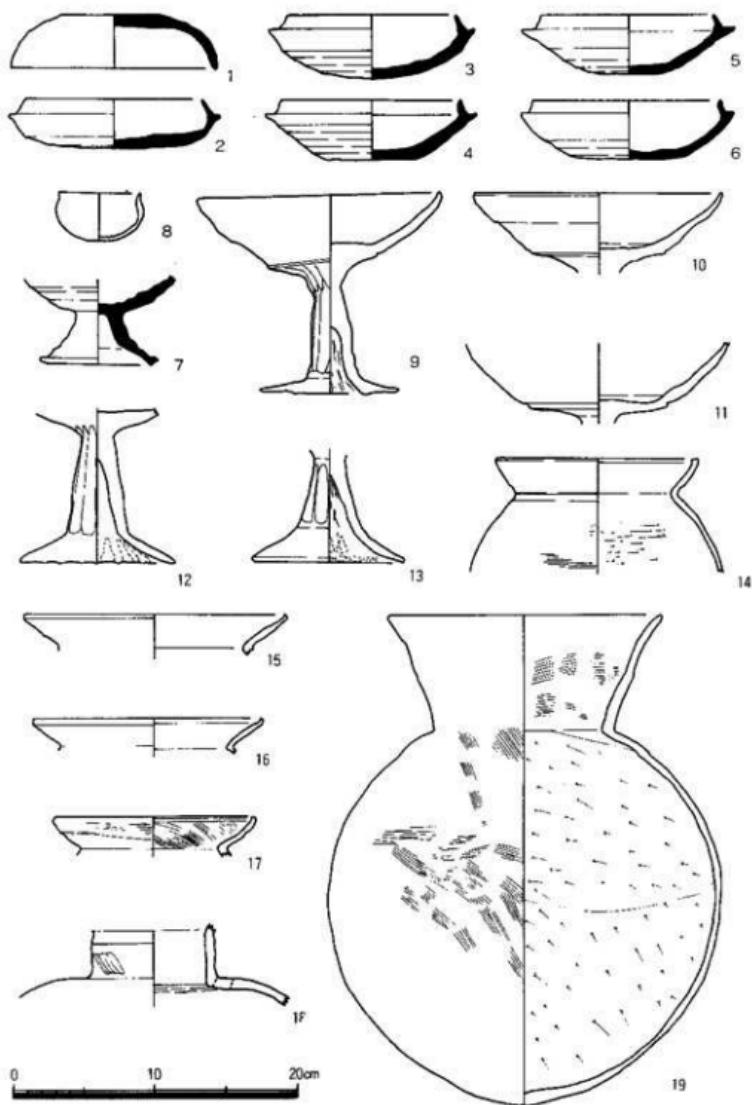
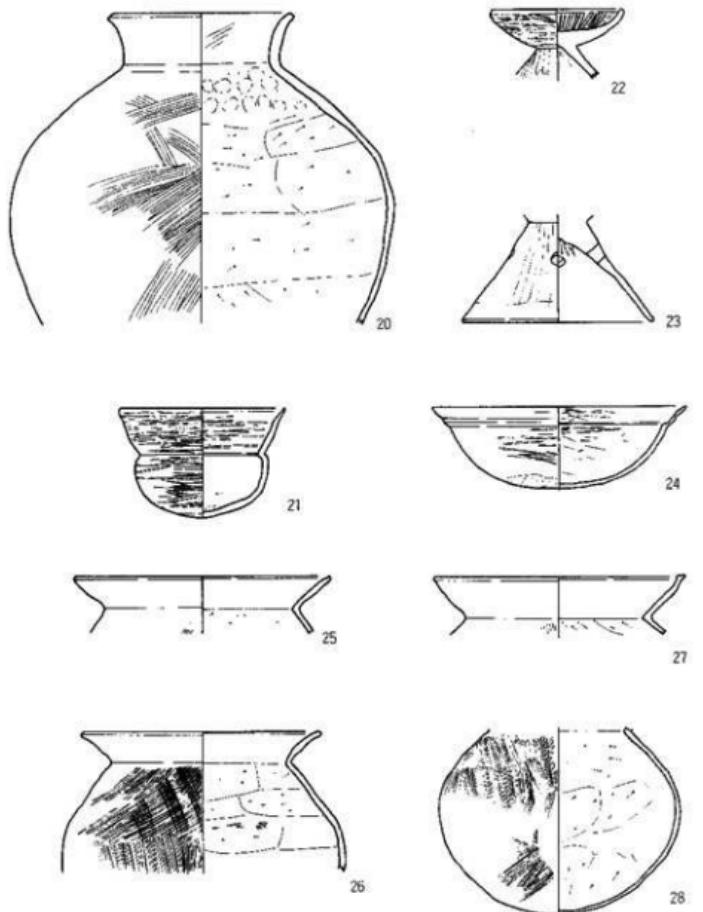


図4 出土遺物実測図



0 10 20cm

図5 SE1出土遺物実測図



近世遺構面



古墳時代遺構面